

僧いかてかつたへもちたりけんむかし文殊のみのりとき給ひける時の御けさどて蓮のいとにておれるけさなりもとの山の禪瑜僧都のつたへたりけるを池かみの皇慶あしやりの時乙こほうしてむねつちにてあらはせ給ひけるよし傳へたる袈裟なりこのせんまゆんとし八十はかりまてことなる弟子なしそのあたりちかく柳津のへつしよといふところ相真といふ僧あり六十にあまれり此けさのつたへやむことなき事をきいてこれをゆつりえんと思ひて弟子になりぬ選俊かいふやうけさをつたへんかために弟子に成給へる心さしあさからず志からの三衣のうちまつ五てうを當時ゆつり奉らんのを死後につたへとり給へといふ相真よろこひてこれをえてかへりぬそのち思ひの外に相真さきたちてやまひをうけて死する時此けさをかけて弟子ともにいふやう我まなむに此けさをかならずあひくしてうつめといひをきておほりにけれの弟子ともいひしことくにして日比すきにけりそのち選俊かの相真かてしの中にいひおくる袈裟をのみな亡者にゆつり申候へきよしちきりきこえしかどほいならずさきたれぬれに具にはなれてあるへきにあらす返し給はむといふ亡者のいひをきしやうなどありのまゝにいひけれとなを信せずかさねてたつねたりけれこの事よしなしとて相真かてしともせいもんをなむかきておくりたりけるそのうへにのどかくいふへきならぬなけきながら年月をおくるほどに中一年をへて長寛二年の秋選俊ゆめにみるやうまうしや相真來りていはくわれ此けさをかけたりしくとくによりて都率の内院にむまれたりたしけさをいわか申たりしまゝに具してうつみたりしかと不具になる事をふ

かくなけき給へんかへしたてまつる也はやくもどのはこをわけて見給ふへしといふ夢さめて此三衣の箱をわけてみれいもどのことくたゝみてはこの中にありまことにふしきの事なれいなみたをなかしつゝこれをくきやうすそのちかの選俊おはる時又此けさをかけてわうしやうすそのてし辨永といふ僧これをつたへて又わうまやうする事さきのことしかの辨永かわうしやうせし事十年のうちの事なれいみな人きゝつたへける事なりむかし物語なとにいみしき事おほかれとそなこりとしにそへてはろひうすまれゝ残りたるも世くたり人をとろへてふしきをあらはすことありかたしこれにこれる世のすゑにたくひすくなき程の事なりされいけちゑんのためわざとまうてつゝおかむ人おほく侍るへし

眞淨房志はらく天狗になる事

ちかきころ鳥羽の僧正とてやむことなき人おはしけりその弟子にてとし比同宿したりける僧あり名を眞淨房とそいひけるわうしやうをねかふ心ふかくして師の僧正にきこえけるやう月日にそへて後世のおそろしく侍れいまゆかくのみちをすてゝひとへに念佛をいとなまんど思ひ侍るにおりよく法勝寺の三昧あきて侍りかして申なし給へ身を非人になしてかの三まいの事にいのちをつきて後世をとり侍らんとときこえけれいかくおもひとりけるあはれなりとてすなはち申なされにけり其のちはいのことくのかに三昧をうはうにゐてひまなく念佛して月日をおくるとなりの坊にえいせん坊といふ僧おなしく後世を思ひけるにとりてそのつとめことなりかれの地さうをほんそんとしてさまゝにおこなひぬもろゝ

のかつたいをわはれみて朝夕物をとらす眞淨房かかたに阿彌陀をたのみたてまつりてひまなく名號をとなへこくらくをねかふこれ又乞食をわはれみけれのさまのこつしきともきはひあつまる二人の道心しやのまちかくかきをひとつへたてたれともおののならひにけれのかつたいもこなたへかけさす乞食もとなりへのそむ事なしけるほどにかの僧正やまひをうけてかきりになり給へるよしをきいて眞淨房とふらひにまうてたりけり事のほかによはくなりてふし給へるところによひいれてとしこむつましう思ひならはせるを此二三年うとしくなるたにこひしくおほえつるに今なかくわかれなんとす今日やかきりならんといひもやらすなけれけれの眞淨房いとわはれにおほえてなみたをおさへてさなおほしめしを今日こそわかれたてまつるとも後世にのかならずあひてつかうまつるへき也とさこゆかく同心に思ひけるこそいとうれしけれとてふし給ひぬれなくかへりぬそのち程なく僧正かくれ給ひにけりかくてとしこふるほどにどなりの叡泉房こちなやましくて廿四日のあかつきに地さうの御名をとなへていとめてたくをはりぬれの見きく人たうとみあへり此眞淨房をとらぬ後世しやなりけれのかならずわらしやう人なりとさたむるほどにふたとせはかりありていと心えすものくるはしきやうなるやまひをしてかくれにけりあたりの人あやしきほいなき事に思ひつとし月をねくるほどに老たる母のおくれゐてなけきけるか又物めかしき事ともありけるをまたしき人ともあつまりてよてさはく程に此はかいふやう我のことなる物のけあらすうせにし眞淨房かまうてきたるなりわかありさ

まをたれもころえかたく思はれたれのかつひその事をもきこえんとなりわれひとへにみやうりをすて後世のつとめよりほかにいとなみなかりしかの生死にとまるへき身にていなきをわか師の僧正のわかれおしみ給ひし時後の世にのかならずまいりあひてまたかひたてまつらんとさこえたりし事をいま券契のことくしてさこえいひしかとていかにいどまを給はせぬによりて思はぬみちに引いられ侍るなりたし天狗と申ことのある事也來年六ねんにみちなんどすかの月めにかまへて此みちを出て極樂へまうてはやと思ひ給へるにかならずさのりなく苦患まぬかるへきやうにとふらひ給へさても世に侍りし時はいのかどくおくれたてまつるならぬ母の御ためせんしきとなりて後世をとふらひ給らんもし又思ひの外にさきたちまいらせはいんせうしたてまつらむとこそねかひ侍りしか思はざるに今かゝる身となりてちかつきまうてくるにつけてもなやましたてまつるへしやといひもやらすさめくとなきく人さなかななみたをなかしてあはれみあへりとはかりのどかに物かたりしつゝあくひたひとしてれいさまになりけれの佛經などころのおよふほどかきくやうしけりかゝるほどにもしもかへりぬその冬になりて又その母わつらふとかくいふ間に母かいふやうたれくもさはかりありし眞淨房か又まうてきたるを其ゆへにまころに後世とふらひ給へるうれしさもきこえんと思ひ給ふうへにあかつきすてにとくたつし侍りいかむとなれいその志るし見せたてまつらなためなり日ころわか身のくさくけからはしき香かき給へとていきをためて吹いたしたるに家のうちくさくてたへ志のふへくもあら

すさてよもすから物かたりしてあかつきにおよひてた、今そすてに不淨身をあらためて極樂へまうて侍るとて又いきをしたりけれのたひのかうはしく家のうちかほりみちたりけりそれをきく人たどひ行徳たかき人なりともかならずこれにちぐせんといふちかひをいおこすましかりけりかれのとりはすしてあしき道に入たれいあへなくかゝるわさなりといひける

助重一聲念佛によりて往生の事

承久のころ前瀧口すけまけといふものありけりあふみのくにかまふのこほりの人なりぬす人にあひて射ころされけるあひたにその矢のせなかにあたる時こゑをあけて南無阿彌陀佛とたゝ一聲申てまゝぬそのこゑたかくとりの里にきこえけり人きたりてこれを見けれの西にむかひてゐなからまなこをどちてなむありける時に入道寂因といふもの有けり助重かあひまれるものなれと家ちかゝらぬの此事をまらすその夜の夢にみるやうひろき野をゆくにかたはらに死人あり僧おほくあつまりていふこゝにわうしやう人ありなんちこれを見るへしといふゆきてみれい助重なりけりを見て夢さめぬあやしと思ふほどにあしたに助重かつかひけるわらひきたりて此よしをつけり又ある僧あふみの國をまゆきやうしけり夢のうち人つくるやう今往生人ありゆきてえんをむすふへしといふそのころ助重か家なりけり月日又たかはすありけりかの僧正のとし比のきやうとく助重か一こゑの念佛の外の事なれどかれいあくたうにとゝまりこれいしやうとにむまるこゝにまゝぬ凡夫のおろかなる

心にて人の徳のほどはかりかたき事也

橋大夫發願往生の事

中比ときはの橋大夫守助といふ者ありけり年八十にあまりて佛法をまらす齋日といへとも精進せずほらしをみれともたうとむ心なし若をしへすゝむる人あれいかにへりてこれをあさむくすへて愚痴きはまれる人と見えけるまかるをいよの國に志る所ありて下りけりころの永長の秋ことなるやまひもなくてりんまうしやうねんにしてわうしやうせりすまのかたよりむらさきの雲あらはれてかうはしき香みちゝてめてたきすいさうあらたなりけりこれを見る人あやしみてそのつまにいかなるつとめをかせしとゝふ妻のいはく心もとよりまやけんにてくどくつくる事なしたゝしをとゝしの六月よりゆふへことにふしやうをかへりみす衣服をとゝのへす西にむかひて一枚ばかりなる文をよみてたなこゝろをあはせておかむ事こそありしかといふその文をたつね出してみるに發願の文ありそのことはにいはいく弟子うやまつて西方極樂のけしゆあみたによらゝはんおんせいしものゝまやうしゆをおどろかし申すわれうけかたき人身をうけてたまゝ佛はうにあへりといへとも心もとよりくちにしてさらにつとめおこなふ事なしいたつらにあかしくらしてむなしく三途にかへりなんどすまかるに阿彌陀如來われとえんふかくおはしますによりてにこれるすゑの世のまゆしやうをすくはむかため大願をおこし給へる事ありきそのおもむきをたつぬれいたとひ四重五逆をつくれる人なりともいのちをはらん時我國に生まれんとねかひ南無阿彌陀

佛と十度申さのかならずむかへんとちかひ給へり今この本願をたのむかゆへにこん日よりのちいのちをかきりにてゆふへことにしにむかひてはうがうをとなふねかはくのこよひまどろめるうちにもいのち盡なん事あらぬこれをおはりの十念として本願あやまたす極樂へむかへ給へたといのこりのいのちありてこよひすきたりともおはりねかひのことくならずして彌陀をとなへす日ころの念佛を以ておはりの十念とせんわれつみをもしといへともいまた五逆をつくらすくすくなくしといへともふかく極樂をねかふすなはち本願にそむくことなしかならずいんせうし給へどかけりこれをみる人なみたおとしてたうとみけりそのうちあまねく此文をかきとりてまにしおこなひてあるしを見たる人おほかりけり又ある聖人かやうにはつくわんの文をよむこといなければともよるまどろめるほかに時のかはることに最後の思ひをなして十念をとなへつゝこれはかりを行としてわうしやうをどけたりとなんつとむるところいすくなければともつねにむしやうを思ひてわうしやうを心にかけん事要か中の要也もし人心にわすれす極樂を思へいのちをはる時かならず生すたとへん木のかたふけるかたへたふるゝかことしなといへり

或上人客人にあはさる事

年來道心ふかくして念佛をこたらぬひしり有けりあひまたりける人のたいめんせんとてわさとたつねてきたりけれん大切にいとまふたかりたる事ありてえあひたてまつるまじきといふ弟子あやしと思ひてその人かへりてのちなとはいなくつゝかへし給へるをさし合事

も見え侍らぬをといへんあひかたくして人身を得たり此たひ生死をはなれて極樂に生れんと思ふこれ身にとりてきはまりたるいとなみなり何事かこれに過たる大事あらんとといひける此事あまりきひしくおほゆるゝわか心の及ばぬなるへし

坐禪三昧經に云今日營此事 明日造彼事 藥着不觀 苦不覺 死賊至 云云世の中にある人さすかに後世を思はざるゝなければもけふの此ことをせんあすのかの事をいとなまんど思ふはどにむしやうのかたきのやうやくちかつきていのちをうしなふ事をいゝたらざると也

舍衛國老翁宿善をあらはさる事

むかし釋迦如來志やゑこくにおはしまし、時あなんをんしやと申御てしをくし給ひて城のはどりを出給にあやしけなるおきな女と二人くしてみちにてあひたてまつるともにかしらのかみまろくおもてのまわたゝみてはねどかはとくろみおとろへたり身にいたなけなる物をわつかにむすひあつめつゝきたれどはたへもかくれすいさゝかあゆみてゝ大きにあへきひまなくやすむはどけこれを御らんして阿難これのみるや此おきな大きな宿善ありとしはしめてさかりなりし時つとめおこなひて此世をいのらましかの志やゑこくの第一の長者といなりなましゝゆつりのためにつとめましかの三明六通のらんかんといなりなまし次にさかりなりし時つとめましかの第二の長者となりとくたつを思はゝ阿那含のひしりといなりなまし次にさかりなりし時つとめましかの第三の長者となり證果を心さゝゝ斯陀含のひしりといなりなましおろかに物うくしてそのさかりを過してまゆくせんをもちなからねか

はざりしゆへに今つたなき身としてうけかたき人界の生をむなしく過しつるなりとおほせられきわれたましく法華經にあひたてまつり彌陀佛のひくはんをきゝなからつとめおこなはすしていたつらにあたし月日を過す露もたかはぬ乞者の翁也

善導和尚佛を見る事

唐の善導和尚の道綽の御弟子なり志かあれどその師にもこえて定のうちにあみたを見奉りおほつかなきことをとひたてまつり證を之給へり師の道綽善導にあつらへていはくわれあさゆふ往生こくらくをねかふ事かなひなんやこれきはめておほつかなしほとけにとひたてまつりてきかせ給へどたまひけれのたまちちやうに入て此事をとい奉るほとけのたまはく木をきるにの斧をくたす家にかへるにの苦を辭する事なしと此ことをきゝてたうしやくにかたり給ひけりとなんかくいへる心の木をきるにいかにかに大きな木といへどもたゆみなくこれをきれのつおにとしてきりたをさすといふ事なしをこたりてきりやすむへからす家にかへるに又くるしとて中にどゝまる事なかれはふくもかならすゆきつくへし心さしふかくしてをこたらすうたかひあらざるよしをおしへ給へるなり此事道綽にかきるへからすもろくの行者おなしかるへし

江州増叟の事

中ころあふみの國にこつしきありておきなありけりたちてもゐても見ることきく事につけてましてどのみいひけれの國の者ましてのおきななどを名つけゝるさせる徳もなければどもと

し比へつらひありきけれの人もみなありて見ゆるにまたかひてあはれみけり其時やまどの國にあるひしりの夢に此おきなかならすわうしやうすへきよし見たりけれのけらゑんのためにたつねきたりてすなはちおきな草のいほりにやどりけりかくてよるなどいかなる行をかすらんとてきけともさらにつとむる事なしひしりいかなる行をかなすとゝへのおきなさらに行なきよしをこたふひしりかさねていふやう我まこといなんちかわらうとやうすへきよしを夢に見待てけれのわざとたつねきたるなりかくす事なかれといふその時おきないはく我まことはひとつの行ありすなはちましてといふことくさこれなりうへたる時の餓鬼のくるしみを思ひやりてましてといふさむくあつきにつけても寒熱地こくを思ふ事又かくのことしもろくのくるしみにあふことにいよくあくたうをおそるうまきあちはひにあへる時の天のかんろをくはんしてまうをといめすもしたえなるいろを見すくれたる聲をきゝからはしきかをかく時もこれ何のかすにかのあらむかの極樂淨土のよそはひ物にふれてましていかにめてたからんと思ひて此世のたのしみにふけらすとをいひけるひしり此ことをきゝてなみたをなしたなこゝろをあはせてなむさりにけるかならすしも淨土のしやうこんをくはんせねども物にふれてことばりを思ひけるも又わうしやうのこうとなんなりにける

發心集第三

伊豫僧都の大童子頭光あらはるゝ事

奈良のみやこに伊豫僧都といふ人ありけり白河院のすゑにやあひ奉りけんちかき世の人なるへしその僧都のもとにとしころつかう大童子ありけりあさゆふに念佛を申事時のまもをこたらすある時僧都の夜ふけて物へゆきけるに此わらの火をともしてくるまのさきにゆくをみれり火のひかりに映してかしのひかりあらはれたりあさましくめつらかにおほえて人をよひて此火を車のまりにともすかくて又むかひてこれをみるになをさきのことくにあきらかなりとかくいふはかりなしそのうちこのわらはをよひていふやうとしもやうくたかくなりたりかく念佛を申すいとたうとし今の宮つかへさはりありまきるゝかたなく念佛しておたれかしまからのひはくひ物のためにいさゝか田をわけてとらせんといふわらの何事におほしめしあきて侍るにか宮つかへつかまつると念佛のさはりになる事も侍らす身のことたへて侍らんほどいつかうまつらんとこそ思ひつれいとほいなくなどいふそのていのことにあらずとてこのいはれをよくいひきかせけれぬまからのかしてまり侍りて此田をふたりもちたりける子にわけとらせてなん食物をいさたせさせけるかくて猿澤の池のかたはらに一間なるいはりむすひていと念佛して居たりけれいはりのことくりんまう正ねんにして西にむかひてたなこゝろを合せておほりにけりわうしやうのむちなるにもよらす山林にあとをくらふするにもあらずたゝいふかひなくこうつめる物かくのことし

伊豫入道往生の事

伊豫守源頼義のわかくよりつみをつくりていさゝかもざんぎの心なかりけりいはんや御門のおほせといひなからみちのくにむかひて十二年のあひたむほんのともからをほろほしもろくのけんそくきやうかいをうしなへる事かすをまらす因果のことほりむなしからすの地こくのむくひうたかひなからむと見えけるにみのわの入道とてさきたちて世をそむける者ありけり折ふしに此世のむしやう罪のむくひのおそるへきやうなをいひけるをさゝてたちまちにはつしんしてかしらおろして一すちにわうしやうこくらくをねかひけりかのみわの入道かつくれりける堂の伊豫入道の家むかひさめうし西のとうおんなりみのわ堂といひてちかくまてありさかの堂にておこなふあひたにむかしの罪をくひかなしみけるなみた板しきにおちつもありて大床につたはり大ゆかよりなかれてつちにおつるまてなんなきけるそのうちかたりていはく今のわうしやうのねかひうたかひなくとけなんといふ勇猛強盛なる心のおこれる事むかし衣川のたちをおとさむとせし時にことならずとなんいひけるまことにおほりめてたくて往生したるよし傳にまゐるせりおほくつみをつくれりてひげすへからすふかく心をおこしてつとめおこなへりわうしやうする事又かくのことしその息のつゝに善智識もなくさんけの心もおこさゝりけれつみほろふへきかたなし重き病をうけたりける比むかひにすみける女はうのゆめにみるやうさまくのすかたまたるおそるしき物かすもまらすそのあたりをうちかこめりいかなる事とたつぬれり人をからめんとするな

りといふとはかりありておとこをひとりをひたて、行さきにふたをさしわけたるを見れ、
無間地てくのさい人とかけりゆめさめていとあやしくおほえてたつねけれ、此あかつきは
やくうせ給ひぬとなんいんける

讚州源大夫儀に發心往生の事

さぬきの國にいつれのこほりとか源大夫といふものありけりさやうの者のならひといひな
から佛法のなをたにあらすいき物をころし人をほろぼすより外の事なけれ、ちかきもとを
きもおちおそれたる事かきりなしある時狩してかへりけるみちに人のほとけくやうする家
のまへをすぐとてちやうもんの人のあつまれるを見て何わさをすれ、人のおほかるそとと
ふらうとうのいはく佛くやうといふ事し侍るなりといふいてやけうかりいまたみぬことそ
とて馬よりおりてかりまやうそくのまゝなから中をわけいり庭もせにこゝらゐたる人これ
なさけなしとみるにむねつふれてひらかりおりこゝらの人のかたをこえて導師の法とくか
たはらにちかくゐてことこの心をとふ僧おそろしなからせつはうをとゝめてあみたの御ちか
ひたのもしき事極樂のたのしみ此世のくるしみむまやうのありさまなどをこまかにときき
かす此おとこいふやういとゝいみしき事にこそさら、我はうしになりてそのほとけのお
はしまさんかたへまいらんと思ふにみちをあらす心をいたしてよびたてまつらむと思ふに
いらへ給ひなんやといふまことにふかく心をおこし給は、かならずいらへ給ふへしとこた
ふさら、我をたゝいまはうしになせといふあれうのまゝにてともかくもいひやらすその時

らうとうよりきてけふの物さはかしく侍りかへり給ひてそのよういして出家し給は、よろ
しからんといふにはらたちておのれかはからひにてわか思ひたちたる事をいひかてさま
たけんとするそとてまなこをいからかして太刀をひきまはせ、おそれおのゝきてたちのき
ぬ大かたけふの願主よりはしめてありとある人色をうしなへりちかくゐよりてたゝ今かし
らそれそらてゝあしかりなんとまきりにせむれ、のかるへきかたなくてわなゝくゝ法師
になしつ衣けさこひてうちきてこれより西さまをむきてこゑのあるかきりなむあみた佛と
申てゆくこれをきく人なみたをなかしてあはれむかくしつゝ、日をへてはるかにゆきゆきて
すゑに山寺ありけりそこなる僧あやしみて事の心をとふまかゝとありのまゝにいへはた
うとみあはれむことかきりなしさても物ほしくおはすらんとてほしいひをいさゝかひきつ
ゝみてとらせけれ、露物くはん心ちなしたゝほとけのいらへ給はんまで、山はやしうみ川
なりともいのちのたえんをかきりにてゆかんと思ふこゝろのみふかくてその外に何事も
おほえすどてなを西をさしてよはひゆくかの寺にひとりの僧ありあどをたつねつゝ、行てみ
れ、いはるかの西の海きはにさし出たる山のはなる岩のうへにゐたりかたりていはくこゝに
てあみた佛のいらへ給へ、いまちたてまつるなりといひて聲をあげてよひ奉るまことにうみ
のにしにかすかに御こゑきこえけりきゝ給ふにや今、いはやかへり給ひねさて七日はかり過
て又おはして我なりたらんすかたさまを見給へといひけれ、なくゝかへりにけり、其のち
いひしかことく日ころへてそのてらの僧あまたいさなひて行てとへるにもどるところに露

もかゝらすたなこゝろを合せつゝ西にむかひてねふりたるかことくにてわたり舌のさきよ
りあをきはちすの花一ふさおひ出たりけりおのゝほとけのことくおかみてこの花をとり
て國のかみにとらせたりけるをもてのほりて宇治殿にそたてまつりけるこうつめる事なけ
れども一すちにたのみたてまつる心ふかけれいわうしやうする事又かくのことし

或禪師補陀落山にまうつる事

ちかくさぬきの三位といふ人いまそかりけりかのめのおとこにてとし比わうしやうを
ねかふ入道有けり心に思ひけるやう此身のありさまよろつての事こゝろにかなはずもしあし
きやまひなどうけておはり思ふやうならすいはいとけんこときはめてかたしやまひなくて
志なむばかりこそらん志う正念ならめと思ひて身燈せんと思ふさてもたへぬへきかどて鍬
といふ物を二つわかくなるまでやきて左右のわきにさしはさみてまはしはかりあるにやけ
こかるゝさまめもあてられすとはかりありてことにもあらずけりといひてそのかまへど
もしけるほどに又思ふやう身燈のやすくまつへしされど此生をあらためて極樂へまうてん
せんもなく又ほんふなれいもしをいりにいたりていかゝなほうたかふこゝろもあらんふた
らくせんこそ此世の中のうちにてこの身なからもまうてぬへき所なれまからいかれへまう
てんとおもふなり又すなはちつくろひやめて土左の國にまれるところありけり行てあた
らしき小舟一つまうけて朝夕これにのりてかちとるわさをならふそのゝちかちどりをかた
らひ北風のたゆみなくふきつよりなん時のつけよとちきりてその風をまちえてかの小舟に

はかけてたゝ一人のりてみなみをさしてのりにけり妻子ありけれどかほとに思ひたちらる
事なれいどゝむるにかひなしむなくゆきかくれぬるかたを見やりてなんなきかなしみけ
るこれを時の人こゝろさしのいたりあさからすまいらぬらんとおしはかりける
一條院の御時とか賀東ひしりといひける人このちやうにして弟子ひとりあひくしてまいり
けるよしかりつたへたるあを思ひけるにや

或女房天王寺にまいりて海に入事

鳥羽院の御時あるみやいらにはゝとむすめとおなしみやつかへする女はうありけりとしこ
ろへてのち此むすめはゝにさきたちてはかなくなりけりなけきかなしむ事かきりなしま
いしのかたへの女はうもさこそい思ふらめことほりそなどいふほどに一年二年はかりすぎ
ぬそのなけきさらになをこたらすやゝ日にそへていやまさりゆけいおりあしき時もおほかり
こといみすへきころをもわかすなみたをさへつゝあかしくらすを人めもおひたゝしくは
てに此事こそ心えねをくれさきたつならひ今はしめたることかいなと口やすからすさゝ
めきあへりかくしつゝ三年といふとしあるあかつきに人にもつけすあからさまなるやうに
てまきれいてきぬひとつ手はこ一つはかりをなんふくろに入てめのわらひにもたせたりけ
る京をいすきて鳥羽のかたへゆけい此めのわらひ心えす思ふほどになをゝゆきゝて日
くれぬれいはしもとゝいふ所にとゝまりぬぬれい又出ぬからうしてそのゆふへ天王寺へ
まうてつきたりけりさて人の家かりてこれに七日はかり念佛申さはやと思ふに京よりいそ

のよういもせずたゝわか身とめのわらひとを侍るとて此もちたりけるきぬを一つぬきてと
 らせたりけれいとやすき事とて家ぬしそのほこのこといしけりかくて日ごとに堂
 にまいりており見めくる程に又こと思ひせず一心に念佛を申たりける手はこきぬ二つの
 御志やりにたてまつりぬ七日にみちての京へかへるへきかと思ふほどにかねておもひしよ
 りいみしくこゝろもすみてたのもしく侍り此ついでにいま七日とて又きぬ一つとらせて二
 七日になりぬそのちきけの三七日になし侍らんとてなをきぬをとらせけれの何かのかく
 たひことに御よういなくともさきに給はせたりしにても志はしの侍りぬへしといへどさり
 とて此れうにくしたりし物をもちて歸るへきにあらすとてあてなをどらせつ三七日かあ
 ひた念佛する事二心なし日かすみちてのちいふやういまの京へのほるへきにとりておとに
 きく難波の海のゆかしきに見せ給ひてんやといへいとやすきことゝて家のあるしゑるへ
 してはまに出つゝすなはち舟にあひのりてこきありくいとおもしろしとて今すこしゝと
 いふほどにをのつからおきにとをく出にけりかくてとはかり西にむかひて念佛する事志は
 しありて海につぶとおち入ぬあなみしとてまどひしてとりわけんとすれと石などをなけ
 いるゝかこどくにしてまつみぬれのあさましとあきれさゝく程にそらに雲一むらいてきて
 舟にうちおほひてかうはしきにはひあり家ぬしいとたうとくあはれにてなくゝこきかへ
 りにけりそのときはまに人のおほくあつまりて物を見あひたるを志らぬやうにてとひけれ
 のおきの方にむらさきの雲たちたりつるなどいひけりさて家にかへりてあをみるに此女

房の手にて夢のありさまをかきつけたりはしめの七日の地ざうりうじゆきたりてむかへ給
 ふと見る二七日にいふけんもんしゆむかへ給とみる三七日にいあみたによらいもろゝの
 はさつとゝもにきたりてむかへ給ふとみるとそかきをきける

書寫山の客僧斷食往生の事

はりまの書寫山にはかよりうかれきたる持經しやありけりところの人のなさけにてなんと
 し比すきけるとりわき長者なる僧をあひたのみたりけるに此持者いひけるやうわれふかく
 りんまう正念にてこくらくにむまれんことをねかひ侍れとそれをはりまにかたけれのこと
 なるまう念もおこらす身にやまひもなき時この身をすてんと思ひ侍る也それにとりて身燈
 入海などのことさまもあまりきはやかなりくるしみもふかゝるへけれの食物をたちてやす
 らかにおはりなんと思ひたちて侍り心ひとつにてさすかなれのかく申あはするなりあな
 して口より外へもらし給ふなむところのみなみの谷にまめをきて侍へり今のまかりこもる
 はかり後のむこんにて侍るへけれの申うけ給はる事のけふはかりなるへきといひけれのな
 みたをおとしつゝいとゝあはれなりさほどに思ひたゝれたる事なれのとかく申におよは
 すとゝしおほつかなくおほえん時おのつから忍ひつゝゆきて見申さん事のゆるし給はん
 やといふそれいさらなりへたて奉らぬのこそかくいきこゆれなどよくゝいひちきりて行
 かくれぬあはれに有かたく覺えて日々にもゆきとふらのまほしけれとうるさくを思はん
 はゝかるほどにをのつから日ころになりぬ七日はかりすきてをしへし所を行てみれの身ひ

とつ入るはとなるちいさきいほりをむすひてそのうちに經うちよみておたりさしよりていかに身よいくくるしくやおはするなどへ物にかきつけて返事をいふ日比いみしく苦しく覺えて心よはくをはりもいかとおほえ侍しを此二三日かさきにまどろみたりし夢におさなき童子のきたりて口に水をそくと見て身もすしくちからもつきていまうれふる事侍らすそのかみのやうならぬ終りもねかひのことくならんなどいふいよくたうとくうらやましくてかへりて又そのちあまりめつらかなることなれぬ思ふにさりかたき弟子なとにこそのをのつからもかたりけめ此事やうくきて此山の僧とも結縁せんとしてたつねゆくあないみしさはかりくちかためし物をと思へどかなはずはてにこのほりのうちにあまねくきこえてちかきとをきもあつまりのしるこの老僧いたりてころのをよふかきりせいすれとさらにもに聞入る人たになしかの僧の物をいはねといみしくわひしけに思へるけしきをみるにもひとへにわかあやまちなれなくやしくかたはらいたき事かきりなしかくてよるひるをわかすさまの物なけかけ米をまきおかみのしれいたよりあるへしとも見えぬほどにかゝちたりけん此僧よるいつちともなくはひかくれぬこらあつまれる者とも手をわけて山をふみあさりもむれともさらになしふしきなりやなどいひけるか後十日あまりへてなん思ひかけすかのあとを見つけたりけるもとのとろわつかに五六たんはかりのきていさゝかましばふかくおひたるかくれに佛經とかみきぬとはかりをありける此三四年かほと事なれぬかの山に見ぬ人なしとそすゑの世にいと有かたき事なりかし

すへていもろくのつみをつくるみなこの身ゆへなれぬかやうに思ひとりてをはりをもわうしやうをものそまむに何のうたかひかあらんかかれどもにこれる世のならひわか分ならぬことをねかひやもすれぬこれをそちりていはくさきの世に人にくひ物をあたへすして分をうしなへるむくひに身つからかゝるめをみるそともいひあるひ天魔の心をたふらかして人をおとろかして後世をさまたけんとかまふるそともいへりまことにまゆくごうのちりかたき事なれとさのみいはいつれの行かいたのしくゆたかなるみなほしきあちはひを忍ひ身をくるしめ心にくたくをもとすこれことく人をわひしめたるむくひとやさためむとするいはんや佛はさつの因位の行みな法をいもんし分をかるくすそのあとをおいぬわかころのつたなきにてこそあらめたままなふへきをそしるに及はざる事なりかのせんだうくはしやうの念佛のそしにて此身なからさとりをえ給へる人なりわうちやううたかふへくもあらさりしかと木のすゑにのほりて身をなけ給へり人のためにあしきことをしそめ給はんやの又はけきやうにいはくもし人ころをおこしてほたいをもとめんと思は、手のゆびあしのゆひをともしてふつだにくやうせよと國城妻子およひ太子國土もろくのたからをもてくやうするにすくれたりとのたまへり此事うち思ふに人の身をやく香のくさくけからはしほとけの御ために何の御ようやのあらんいは、一ふさの花にもおどり一ひねりの香にもおよひかたけれと心さしふかくしてくるしみを忍ぶゆへに大きなるくやうとなるにこそあらめざるにていもし人いさきよき心をおこして思は、太子國土すく

れたる供養とのたまは、こそわれらかためにかたからめ此身のわか有なりまかも夢のこ
とくにしてむなしくちなんとす何かの一指にかきらんさなから身命を佛道になけて一時
のくるしみ無始しやうしのつみをつくのひほどけのかびによくりんしう正ねんなる事をえ
んとふかく思ひとりてくひ物をもたち身燈入海をもせんにつれゆへおこし給へるひく
んなれいかいんせうし給はさらんさらの今の世にもかやうの行にておほりをとる人まのあ
たり異香にはひ紫雲たなひきてそのずいさうあらたなるためしおほかりすなはちかの童子
の水をそ、きけんも證にあらすやあふきてまんすへしうたかひて何の益かあるまかる
をわかこ、ろのおよはぬまゝに身つからまんせぬのみならず他の信心をさへみたるの愚痴
のきはまれるなり

蓮花城入水の事

ちかき比れんけやうといひて人にまられたるひしりありきト蓮法師あひまりて事にふれ
なさをかけつゝすきけるほどにどころありて此ひしりのいひけるやうの今としにそ
へつゝよはくなりまかれの死期のちかつくことうたかふへからす正念にてまかりかくれん
事はまされるのそみにて侍るをこゝろのすむとき入水しておほりとり侍らんと思ふとい
ふほくれん聞おとろきてあるへき事にもあらずいま一日なりとも念佛のこうをつまんどこ
そねかはるへけれさやうの行いぐちなる人のするわざなりといひていさめけれとさらにゆ
るきなく思ひかためたる事と見えけれいかくこれほど思ひとられんにいたりていどむる

におよはすさるへきにこそあらめとてそのほどのよういなとちからをわけてもろともにさ
たしけりつゝに桂川のふかきどころにいたりて念佛たかく申し時へて水のそこにあつみ
ぬそのとき、およふ人市のことくあつまりてまはらくいたうとみかなしむ事かきりなしほ
くれんいとしころ見なれたりつる物をとあはれにおほえて涙をおさへつゝかへりにけりか
くて日ころふるまゝにト蓮物のけめかしきやまひをすあたりの人あやしく思ひてこと、し
ける程に靈あらはれてありし蓮花城と名のりけれの此事けにとおほえすとし比あひまりて
をはりまてさらにうらみらるへきことなしいはんや發心のさまなをさりならずたうとくて
をはり給ひしにあらすやかたゝ何のゆへにや思はぬさまにて來るらんといふ物のけのい
ふやうその事なりよくせいし給ひしものをわかこゝろのほどをあらていひかひなきまにを
して侍りさはかり人のためのことにもあらぬそのきはにて思ひかへすへしもおほえさ
りしかといかなる天まのまわさにてかありけんまさしく水にいらんとせし時たちまちに
やしくなんなりて侍りしされともさはかりの人中にいかにしてわか心と思ひかへさんあは
れた、今せいし給へかしと思ひてめを見あはせたりしかとまらぬかほにて今のとくゝと
もよほされてまつみけんうらめしさににのわうしやうのこともおほえすゝるなるみち
にいりて侍る也此事わかをろかなるとかなれの人をうらみ申へきならねとさいこにくちお
しと思ひし一念によりてかくまうて來るなりとといひけるこれこそ氣にまゆくごうとおほ
して侍れかつゝ又すゑの世の人のいましめともなりぬへし人のこゝろはかりかたきものな

れいかならずしも清淨質直の心よりもおこらすあるひに勝他名聞にもちうしあるひにけう
 まん志つとをもとゝしておろかに身燈入海などするのしやうとにむまるゝとばかり去り
 てこゝろのはやるまゝにかやうの行を思ひたつ事し侍りなんすなはち外道の苦行におなし
 大なる邪見といひつへし其ゆへの火水にいろくるしみなのめならず其心さしふかゝらすの
 いかんかたへ忍はん苦患あれい又こゝろやすからす佛のたすけより外に正ねんならん事
 きはめてかたし中にもをろかなる人のことくさまて身燈のえせし水にやすくしてんと申
 侍るめりすなはちよそめなたらかにてその心去らぬなるへしあるひしりのかたりしはかの
 水におほれてすくに去なむとせしを人にたすけられてからうしていきたる事侍りきその時
 はなくちより水入てせめしほどのくるしみたどひ地こくのくるしみなりともさはかりこ
 そはとおほえ侍りしかまかるを人の水をやすき事と思へるのいまた水の人ころすやうを去
 らぬなりとそ申侍りしある人のいはくもろくのおこなひのみなわか心にあり身つからつ
 とめてみつからるへしよそにはからひかたき事なりすへてくはこのこういんも見らひの
 くはほうも佛天加護もうちかたふきてわかこゝろのほどをやすくせいのつからをしはか
 られぬへしかつゝ一事をあらはすもし人佛道をおこなはんために山林にもましはりひと
 り曠野の中にもをらんとし身をおそれいのちをおしむ心あらひかならずしもほどけのをう
 ぢし給ふらむといたのむへからすかきかべをもかこぬのかるへきかまへをしてみつから身
 をまもりやまひをたすけてやうくすゝまむ事をねかふへしもしひたすらはとけにたてま

つりつる身そと思ひて虎狼きたりてをかすともあなかにおそるゝ心なく食物たえてうへ
 志ぬともうればしからすおほゆるほどになりなほとけもかならず擁護し給ひほさつも志
 やうしゆもきたりてまもり給ふへしほうのあくきもとく去らもたよりをうへからすぬす人
 の念をおこしてさりやまひいふつりきによりていゑなんこれを思ひわかすこゝろのこゝろ
 としてあさく佛天の護持をたのむいあやうき事なりとかたり侍りし此ことさもときこゆ

樵夫獨覺の事

近き比あふ見の國池田といふところにいやしき男ありけりをのか身いとしたけてわかき子
 をなむもちたりけるふたりあひくしてなすへき事ありておく山に入たりけるにやゝ久しく
 やすみぬたりころの十月の末にやありけん木からしすさましく吹て木々のこの葉雨このと
 くみられたり父これをみていふやうなんち此木のはのちるをみるやこれを去つかにおもひ
 つゝくれいわか身のありさまにいさゝかもかはらぬなりそのゆへの春のみるゝとわか葉
 さしそめたりと見しほどにやうく去けりて夏のみなさかりに成にき八月はかりよりあを
 きいろ黄にあらためてのちにくれなふかくこかれつゝ今のすこし風ふけいもろくちる
 おちていつおにくちなんどすわか身も又これにおなし十歳はかりの時たとへはるのわか
 葉なり二三十にてさかりなりし時の木すゑかけ去けりて心ちよけなりし比にいたり
 今六十にあまりくろかみやゝ去ろく去はたゝみはたへかはりゆくすなはち秋のいろつくに
 ことならずいまたあらしにちらすといふはかりなりそれ又けふあすの事なるへしかくあた

なる身を志らす世をすくさんどてあさゆふといふはかりくるしきめを見てはしりいとなむ事こそ思へいよしなけれ我のいまの家へもかへるまし法師になりてこゝにゐて此木の葉の有さまなど思ひつゝ、けつゝのどかに念佛してをらんと思ふわぬしんとしもいまたわかすゑはるかなれいとくかへりねといふこのおとこのいふやうまことにたかはすいはれたるところのたまふやうなれといはりひとつもなし田はたけつくるへきたよりもなしすへて雨風のくるしみけた物のおそれひとつとしてたへ忍ぶへきところもあらずいかにしてかひとりのすみ給はんさらわれもくし奉りて木のみをもひろひ水をもくみていかにもなり給ひむやうにこそいならめ今よはひさかりなりといへどもたどへ夏の木のほにこそ侍るなれつゝるにもみちしてちらん事うたかひなしいかにはんや木の葉の色つきてこそちるなれ人のわかくてまぬるためしおほかりや木の葉よりもあたなりといひつゝへしさらにふるさどへかへるへからすといひけれのあはれに思ひたりさらのいとうれしき事とて人もかよはぬみ山の中にちいささいほりふたつむすひてそれにひとりつゝあさゆふ念佛してそすくしけるむけにちかき世の事なれのみな人志りて侍りとなんある人のいはく父すてにわうしやうしをはりぬ息いまに現存と云々

證空律師希望深き事

藥師寺に證空律師といふ僧ありけりよはひたけてのち辭してひさしくなりにけるをかの寺の別當の闕にのそみ申さんと思ふいかにあるへきと弟子どもにかたるにおなしさまにあ

るましき事也御としたり給ひたりつかさを辭し給へるにつけてもかならずおほすところあらんかしと人もこゝろにくゝ思ひ申たるを今さらさやうにのそみ申給は思はずなる事にて人も心をとりつかまつるへしとことばりをつくしていみしういさめけれとさらにけにもと思へるけまきなしにかにもその心さしふかき事と見えけれすへてちからをよはす弟子よりあひてこの事をなけきつゝいふやう此うへにいかにかきこゆとも聞入らるましさをら夢を見て身もたへ給ふはかりかたり申さんとそさためける日比へて後まつかなる時ひとり弟子いふやう過ぬる夜いと心えぬ夢なん見え侍りつる此庭にいろくゝなる鬼のおそろしけなるあまたいてきて大きなかまをぬり侍りつるをわやくしく覺えとひつれの鬼のいはく此坊主の律師のれうなりとこたふるとなん見えつる何事にかいふかきつみもおはしまさむ此事こゝろえす侍るなりとかたるすなはちおとろきおそれんと思ふほどにみもどまてゑみまげてこのまよまうのかなふへきにこそひろうなせられそとおかみけれすへていふはかりなくてやみにけり智者なれいこそ此律師までものほりけめとし七十にてこの夢をよろこひけんいと心うきとんよくのふかさなりしかの無智のおきなか獨覺のさとりを待たりけんいたとへもなくこそ

親輔養兒往生の事

中比壹岐前司親輔といふ人とり子をしておさなくよりはぐくみやしなひけり此兒三つといひける年ずゝをもちてあそびとしくさらにこと物にふけらすちゝはゝこれをあひして紫檀

のずゝをどらせたりけれのあみた佛をこどくさに申ゐたり母きゝていさめけれとなを此こ
 とをどゝめす六といふとしをもきやまひをうけて日比へて後ゆかにふしなから手あそひに
 せし念珠のかたはらにありけるを見てわかすのうへにちりのゐにけりといひてふかくな
 けきたるけしきなりこれをきく人涙をおとしてあはれみあへりすなはちちゝはゝにあひて
 身のけからいしくおほゆるに湯をあみはやと云やまひをもきほとなれのさらにゆるさすそ
 のゝち人にたすけられて西にむかひつゝおきわてこゑをわけて 聞妙法華經提婆達多品淨
 心信敬不生疑惑者不墮地獄といふより若在佛前蓮華化生とまで誦すそのこゑことにたへな
 りおさなきものなれの日ころ人のをしふる事なしみなおとろきあはれむ聲いまたやまぬほ
 どにまなこをうけていきたへにけれの父母なきかなしむ事かきりなし日比へてのちはゝひ
 るねしたる時夢ともなくうつゝともなく此兒をみるかたちことにてめてたくきよらかにてあ
 りけり母にむかひてわかかたちをいよくみるやといふはゝよく見るといふ兒誦して即往南
 方無垢世界坐寶蓮華成等正覺此文をよみをはりてすなはちうせにけりとそ此事の嘉承二年
 の比なり

松室童子成佛の事

奈良の松室といふところに僧ありけり官などいわざとならさりけれと徳ありてもちひられ
 たる人になんありけるそこにおさなき兒のことにおしくする有けり此ちこあさ夕ほけ
 きやうをよみたてまつりけれの師これをうけすおさなき時の學文をこそせめいとけに

しからすなどいさめられて一度の志たかふやうなれとやゝもすれの忍ひゝになんこれを
 よむいかに心さしふかき事と見て後にいたれもせいせずなりけりかゝる程に十四五は
 かりに成て此ちこいつちともなくうせぬ師大きにおとろきていたらぬくまもなくたつねも
 とむれとさらになし物のりやうなどにとられたるなめりといひてなくのちの事なとと
 ふらひてやみにけりそのゝち月比へて此はうにある法師のたきゝとらんとて山ふかく入た
 りけるに木のうへに經よむこゑきこゆあやしくてこれをみれのうせにし兒なりあさましく
 おほえていかにかくていおはしますそさしもなけき給ふ物をといへその事なりさやうの
 事もきこえんとてあひたてまつらんと思へどたよりあしきことになりてえなんちかつき奉
 らすうれしく見えあひたりこれへかまへておはしませと申せといひけれのはしりかへりて
 此よしをかたる師おとろきてすなはちきたる兒かたりていはく我どくじゆの仙人にまかり
 なりて侍るなり日ころも御戀しく思ひ奉りつれとかやうにまかりなりて後いさくへきたよ
 りもなし大かた人のあたりいけからはしくさくてたゆへくもあらぬの思ひなからえなむ
 まうてさりつるあひたちかくて見たてまつる事いあるましといひてともになみたをおと
 しつゝやゝひさしくかたらふかくてかへりなんとする時いふやう三月十八日に竹生鳥とい
 ふところにて仙人あつまりて樂をする事侍るに琵琶をひくへき事の侍るかえたつね出し侍
 らぬなりかし給ひなんやといふやすき事なりいつくへかたてまつるへきといへこのにて
 給はらんといひてともにさりぬひわををくりたりけれとその時の人もなしたゝ木のもとに

をきてをかへりにけるさてこの法師の三月十七日にちくふしまへまうてたりけるに十八日
あかつきのねさめにはるかにえもいはれぬ樂のこゑきこゆ雲にひき風にまたかひてよの
つねのかくにも似すおほえてめてたかりけれ涙こほしつゝきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かくなりて樂のこゑとまりぬとはかりありてえんに物をおくをどのしけれの夜あけてこ
れを見るにありし琵琶なり師不思議の思ひをなしてこれをわか物にせん事は、かりあり
とて權現にたてまつるかうはしきにはひふかくみみて日比ふれともうせさりけるとその
ひわ今にかの鳥にありうきたる事にあらす

三昧座主の弟子法花經の志るしをうる事

中ころ義叡といひてこゝかしておこなひありく修行者ありけりくまのより大みねに入て見
たけへ出るあひたにみちをふみたかへて十日あまりか程すゝるにけはしき谷みねをまよひ
ありきけり身つかれちからつきていとゝあやうくおほえけれの心をいたして本尊にいのり
こふそのゝちからうしてたいらかなる所にゆき出たりけりそこを松はらありはやしの中に
ひとつのいはりありちかくあゆみよりてこれをみるにえもいはぬあたらしくつくれる屋あ
り物のくかさりみな玉のことし庭のすなご雪にことならずうへ木に花さき木のみむす
ひ前ざいにいさまゝにさく花いろことにたへなりぎゑいこれを見てよろこぶ事かきりな
し志はしうらやすみつゝ此屋のうちをみれひしりひとりありよはひわつかに二十はかり
にやとみゆころもけさうるはしくきてほけきやうをよみたてまつるそのこゑ妙なる事たと

へていはんかたなし一のまきをよみおはりて經つくゑのうへにおけのそのきやう人も手ふ
れぬにみつからまきかへされてもこのことくなるかくしつゝ一の巻より八の巻にいたる
までまく事さきのことし一部よみおはりて廻向禮拜すそのゝち立出て此人をみておどろき
あやしみていはく此どころにむかしより人きたる事なし山の中にもふかき山なれの鳥の
こゑたにもきこゑすいかにしてきたれるそといふ事のありさまはしめよりかたるすなはち
あはれみて坊のうちへよひいれつとはかりありてかたちえもいはすうつくしきどうじめて
たき食物をさゝけてきたるひしり此僧にすゝむれこれにくひをばりぬあちはひの妙なる
事人間の食にあらずおほかた事にふれ物ことにふしきならずといふことなし僧ひしりに問
ていはく此どころにすみていくとせはかりにかなり給へる又いかなる事か侍る何事もおほ
すやうなりやといふひしりのいはくこゝにすみそめて八十餘年になりぬ我もこの叡山東塔
の三まい座主の弟子にてなんありしか志かあるをいさゝかの事によりてはしたなくさいな
まれしかいおろかなる心にこゝかしていまよひありきてさためたりし所もなかりきよはひ
をとろへて後この山にあとをとゝめて今こゝにておはらんことをまつ也といふ僧いよ
ゝゝあやしくおほえてかさねてとふ人來らぬよしのたまへとめてたき童子あまたみゆこれ
御いつはりに似たりひしりのいはく天のもろもろの童子もつて給仕をなす何かいあやしか
らんといふ僧又とゝくよはひたけたるよしをのたまへと御かたちをみれいわかさかりな
りこれとおほつかなしひしりのいはく得聞是經病即消滅不老不死更にかされる事にあらす

かくてや、ほどふるあひたにひしり此僧をすゝめてとくかへり給へといふ僧なけきていふやう日ころまよひありきつるほどに身つかれ力つきてたちまちにかへるへき心ちもせずいはんや日すてにかたふきて夜に入なむとす何のゆへにかひしり我をいとひ給へるといふひしりのいふやういとふにあらすはるかに人間の氣をはなれておほくのとしをへたるゆへにすゝめきこゆるはかりなりもしこよひとまらんとならん身をうごかさすこゑをたてすしてゐたれどをしふ僧ひしりのをしへのことかくれつゝゐたりやうゝ夜ふくるほどに風にはかに吹てつねの氣しきにあらすすなはちさまさまのかたちしたる鬼神もろゝのたけきけた物數もあらずあつまる馬面なるもあり牛にたたるもあり又鳥のかしらなるもあり鹿のかたちなるもありをのゝ香花のことくた物のたくひもろゝのぼんじきをさゝけてまへの庭にたかきつくゑをたてゝそのうへにをきつゝたなこゝろを合せてうやまひおかみてひらびぬぬ此中にあるともからのいふあやしきかなつねにす人間の氣あり又あるかいふ何人かこゝにきたらんとそのゝちひしりはつくはんしてはげきやうをよむあかつきにおよひてゑかうする時このもろゝのともからうやまひはいしてさりぬ僧問て云此さまゝのかたちしたる物かすもあらず何のたくひいつれの所よりきたれるをひしりのいはく若人在空閑我遣天龍王夜及鬼神等爲作聽法衆これなりといふさまゝのふしきを見ひしりのことはをきくにたうとくたのもしき事かきりなし明ぬれい今のかへりなんと思ひてなをみちにまとはむことをなけくひしりゑるべをつけて送り申へしといひて水瓶をとりてまへ

にをくその水かめをとりおりてやうゝさきにゆくそのかめのまりにつきてゆくまゝに二時はかりをへて山のいたゝきにのほりぬこゝにて見おろせいふもとに人里ありその時水瓶をらにのほりてもどのどころにとひかへりにけり此人里にゆき出て此事をかたりつたへたりけるなり記とてこゝかしこにゑるしをける文あれとことまけけれいおほゆるはかりを書たる也

發心集第四

淨藏貴所鉢をとはす事

志やうさうきそときこゆるい善さいしやう清行の子息ならひなき行人なり山にて鉢のほうをおこなひてはちをとはしつゝすきける比ある日むなしき鉢はかりかへりきて入る物なしあやしと思ふほどに此事つゝけて三日になりぬおとろきてみちのあひたにいかなる事のあるをみんと思ひて四日といふ日はちのゆくかたの山のみねに出てうかゝひけるほどにわかにはちとおほしくて京のかたよりとひくるを北のかたより又あらぬはちのきあひてその入物をうつしとりてもどのかたへかへりゆくありけりこれをみるにいとやすからすさりともしこそおもふにたればかりかゝわかはちの物うつしとるわさをせん此事めさましきものゝ志わさかなみんと思ひてわかむなしき鉢をかちしてそれをゑるへにてなむはるゝときたを

さして雲霧を志のきつゝわけ入ける今の二三百町もきぬらんと思ふほどにある谷はさまの
 松風ひゝきわたりにいさきよくこのもしき所に一間ばかりなる草のいほりありみきりに苔
 わをく軒ちかくまみつなかれたりうちをみれのとしたかき僧のやせをどろへたるたゝひと
 りゐてけうそくによりかゝりつゝ經をよむいかにもたゝ人にあらす此人の志わさなめりと
 思ふほどに淨藏を見ていふやういつくよりいかにして來り給へる人をおほろけにても人の
 まうてくる事も侍らぬをといふその事に侍り我のひえの山にすみ侍ける行者なり志かるに
 月日をおくるはかり事なくて此ほどはちをといしつゝおこなひをし侍るにきのふけふこと
 〱しくあやまき事の侍りつれいられへ申さんどてまゐりきたる也といふ僧のいふやうえ
 こそゑり侍らぬいとふひんに侍る事かなたつね侍らんとて志のひに人をよぶすなはちいほ
 りのうしろのかたよりいらへてきたる人をみれ〱十四五はかりなるうつくしき童子のうる
 はしくからまやうそくしたるなり僧これをいさめていふやう此仰らるゝ事なんちかまわ
 さかいとあたらぬことなり今よりのさるわさなせそといへ〱かほうちあかめて物もいにて
 かへりぬかく申つれ〱今〱よもさやうのわさ〱つかまつらしといふ淨藏ふしきの思ひをな
 してかへりさらんとする時僧のいふやうはる〱とわけきたり給ひてさためてくるしくお
 はすらん志はし侍たまへきやうをうし奉らんとて又人をよぶおなしさまなる童子いらへて
 さし出たりかくとをさほどよりわたり給へるに志かるへからん物まいらせよといひけれ
 どうしかへり入てるりのさら〱にからなし〱のむきたるを四ついれてひあふきのうへにならへ

てそもちきたるそれ〱とすゝむれ〱これをとりてくふあち〱ひのうまき事天のかんろの
 ことしわつかに一果をくふに身もひやゝかにちからつきてなん覺えけるすな〱ち雲をわけ
 つゝかへるほどにみちもちか〱しく見えさりけれ〱いつくともおほえすそのさまたゝ人
 と〱見えさりき讀誦仙人などのたくひにやとそかたりける

永心法橋乞食をわいれむ事

永心法橋といふ人ちか比の事にや清水へ百日まいりける時日くればしをわたりけるに河
 原にいみしう人のなく聲きこえけり何物のいかなることをうれふるにかとおほつかなきう
 ちにも觀音のわいれみをさきとし給へりそのとくをわふきたてまつりてまうてなからなさ
 けなくとふら〱てすきむ事こゝいとあやしけれと思ひてこゑをたつねつゝちかくいたりて
 なにも〱かく〱なくそととふかたわ人に侍りてこたふいかなることをかうれふると〱へ
 は我かたわにまかり成にし後まれる人にもこと〱〱くわかれてたちよる所も侍らぬにより
 さきたちてかたわなる人の家をかりてそこにやどりゐて侍れ〱ひる〱日〱くらしといふはか
 りせためつかひ侍りうしとてもなれぬ身なれ〱又物をこひて〱のちをつかむとつかまつる
 どにかくに身のくるしさ申つくすへきかたなし〱のかたにうちやすむへきを又このやまひ
 のくつうにせめられてぬられ侍らすきりやくかこどくうつきひ〱らき身もほどをりてたへ
 志のふへくもあらぬ〱もしやたすかると河のはどりにまうてきてあしをひやし侍るなりい
 にしへ世々にいかなるぎやくざいをつくりてかかゝるむくひをうけつらんとかなしく心う

く侍るにそのかみ住山してかたのこどく學問などし侍りしか大師の志やくに唯圓教意逆即是順日餘三教逆順是故といへる文をたゝ今思ひ出てそのこゝろを志つかに思ひつゝ侍るにたうどくたのもしく覺えてどにかくにさくもしあへすなかれ侍るなりとかたる永心これなきくにわれにいとおしき事かきりなしすなわちわか一山の同法にこそありければとなみたをなかしつゝみつからきたりけるかたひらぬきてとらせ逆即是順なるやう念比にやゝ久しくとききかせてさりにつけり年ころをへぬれどわすれすとなんかたりける

叡實路頭の病者をあわれむ事

山にえいぞつあぢやりとてたうとき人ありけり御門の御なやみをもておのしましけるころめしければたひく辭し申れどかさねたる仰せいなひかたくてなましぬにまかりけるみちにあやしけなる病人のあしてもかなはずしてあるところのついちのつらにひらかりふせるありけりあぢやりこれを見てかなしみのなみたをなかしつゝくるまよりおりてあはれみどふらふたゝみもどめてあかせうへにかりやさしおほひくひ物もどめあつかふほどにやゝひさしくなりにけりちよくし日くれぬへしいとゝひんなき事なりといひければまいるましきかくそのよしを申せといふ御つかひおどろきてゆへをどふわしやりいふやう世をいひて心を佛道にまかせしより御門の御事とてもあななちになうとからすかゝる非人とても又をろかならすたゝおなしやうにおほゆるなりそれにとりて君の御祈のため志るしあらん僧をめさむに山々てらくにおほかる人たれかまいらさらむさらにとかくまし此ひ

やうしやにいたりていひきたなむ人のみありてちかつきあつかふ人のあるへからすもし我すてゝさりなほとゝいのちもつきぬへしとてかれをのみあわれみたくするあひたにつゐにまいらすなりにければ時の人有かたき事になんいひける此あぢやり終にわうしやうをとけたりくいしく傳にあり

肥州の僧の妻魔に成事

中ころ肥後の國に僧ありけりもといきよかりけるをとしなればたけてのちめをなむまうけたりけるかゝれとなを後世の事を思ひはなたすりくいんを心にかけつゝそのつとめのためにはちに屋をつくりてかしてをくいん念のどとさためてとしのつとめおこなひけり此つまおとこのため心さしふかくことになれてねんころなりけりといかゝ思ひけん病をうけたりける時このつまにうちとけすあひまれる僧をよひて忍かたらふやうもしかきりならん時のあなかしこあなかしこめのかたにつけ給ふなとさらすしおもふゆへありといひければそのこゝろえてのみあつかふほどにいとわつらひすをいり思ふさまにめてたくして西にむかひていきたえにけりさてしもあるへきならぬとはかりありて妻に此事をつぐすなはちおどろきまどひおひたゝしく手をたゝきてまなこをいからかしもたへまどひてたえいりぬ人おちてちかつきもよらさりけるあひたに一時はかりありてよにおそろしうこゑのあるかきりをめきさけびていふやうわれ狗留孫佛のときより此やつかはたいをさまたけんために世々生々に妻となり男となりてさまゝゝたしみたばかりて今まてはいのことく志

たかひつきもたりつるを今日すくににがしつるねたきわさかなといひてはをくひまのりか
 きかべをたゞく人いとおそれをのゝきてみなはひかくれたるあひたにいつちともなくう
 せにけりそのうちつねにゆきかたあらずとなん往生傳に康平の比とあるせりこれ一人か
 うへにあらすあくまのさりかたき人となりて二世をさまたくる事いたれもかならず有へき
 ことなりかれこの事を心にかけてつゝまたしきうときわかす善をすゝむる人あらの佛はさ
 つこそさま／＼かたちを變して人を化度し給へもし化身かもし又そのたよりことむつまし
 く思ひつみをつくらせくどくをさまたけてあうをどゝめむ人をいしやう／＼世々のあくえ
 んとおそれてをさからん事をねかふへし大かた人の心の野の草の風にまたかふかことし
 えんによりてなひきやすしたれかの道心なき人といへとはどけにむかひ奉りてたな心をあ
 はせざるいかなる智者かのこびたるかたちをみてめをよろこしめざるかの淨藏貴所の日
 本第三の行人なれどあふみのかみながよかむすめに契りをむすへり久米の仙人のつうをえ
 てそらをとびありきけれと下す女の物あらひけるはきのまろかりけるによくをおこして仙
 を退してたゞ人と成にけり今の世にも手足の皮をはきてゆひをともしつめをくたきさま
 しくかたわをさへつけて佛道を行ふ人の其發心の程かくれなければと惡縁にあひて妻子をま
 うくる例おほかり我も人も凡夫なれいたゞちかつかぬにのまかぬなり

玄賓亞相の室に念に係る事

むかし玄賓そうついみしうたうとき人なれいたかきもいやしきもほとけのことく思へりけ

る中に大納言なる人なむとし比ことにあひたのみ給ひたりけるかゝるあひたに僧都そこは
 かどなくなやみて日ころになりぬ大納言おほつかなさのあまりに身つからわたり給ひてさ
 てもいかなる御心ちになどこまやかにとふらひ給ふをちかくより給へ申侍らんとあれ
 あやしうてさしより給へるに忍ひてきこゆまことにいことなるやまひにも侍らす一日殿の
 御もとへまうてたりしに北の方のかたちいとめてたくて見え給へりしを涙のかに見たてま
 つりて後物おほえす心まどひむねふたかりていかに物はいはれ侍らぬなり此事申につけ
 ては、かりあれどふかくたのみたてまつりて久しくなりぬいかてかへたて奉らんと思ひ
 てなんときこゆ大納言おとろきてさらいなとかいどくのたまひさりしいとやすき事なり
 すみやかに御なやみやめてんわたり給へいかにもの給はんまゝにたよりよくはからひ侍
 らんとてかへり給ひぬうへにかくときこえ給ふにさらなりなのめにおほせられんやのいと
 あさましく心うけれどかくねんころにおほしはからふ事なれいなひ給ひしそのよういし
 て僧都にあないせさせ給へるにいと事うるはしく法服たゞしくしてきたり給へりあやし
 けに／＼しからすいおほゆれと問なとたてゝさるやうなるかたに人奉らせ給ふうへのうつ
 くしうとりつくろひて給へるを一時はかりつく／＼とまもりて彈指をうたひ／＼しける
 かくてちかくより事なくて中門のらうに出て物をなむかつきてかへりにけれいあるしいよ
 く／＼たうとみ給ふ事かきりなかりけり不淨をくいんしてそのまうをひるかへすなるへしか
 くいふ人の身のけからいしき事を思ひてなりもろ／＼の法みなほとけの御をしへなれど

きいどをきこといをろかなる心におこらす此觀にいたりていめに見えこゝろに志れりさ
 どりやすく思ひやすしもし人のためにもあいちやくし身つからも心あらん時のかならずこ
 の相を思ふへしといへり大かた人の身はねまゝのあやつりくちたる家のことし六腑五藏
 のありさまとくじやのわたかまりにことならず血の跡をうるはしすぢつぎめをひかへたり
 わつかにうすき皮ひとへおほへるゆへに此もろくくのふじやうをかくせり粉をほどこした
 き物をうつせとたれかいつはるかざりとまらざる海にもとめ山にえたるあちひも一よ
 へぬれのことくく不淨となりぬいはゝゑかけるかめに糞穢をいれくさりたるかばねに
 しきをまどへるかことしたとひ大海をかたふけてあらふともきよまるへからずもしせんた
 んをたきてにはいすとも久しくかういしからしいはんや玉しるさりのちつきぬるのちひ
 むなしくつかのはどりにすてつへし身ふくれくさりみたれてつゐにまろきかぬとなりま
 ことこのさうをまゐるゆへに念々にこれをいとふをろかなる者のかりの色にふけりて心をまど
 いす事たとへんかやの中のむしのふんえをあいするかことしといへり

或女房臨終に魔の變するを見る事

あるみやはらの女はう世をそむけるありけりやまひをうけてかきりなりける時せんちしき
 にあるひしりをよひたりけれの念佛すゝむるほどに此人色まさをになりておそれたる氣色
 なりあやしみていかなる事の見え給ふととへのおそろしけなるものとも火の車を
 めて來たるなりといふひしりの云やう阿彌陀佛の本願をつよく念してみやうかうをこた

らすとなへ給へ五ぎやくの人たに善知識にあひて念佛十度申つれにくらくにむまるいは
 んやさほどのつみのよもつくり給ひしといふすなはち此をしへによりてこゑをあけてとな
 ふまはしありてそのけしきををりてよろこへるやうなりひしり又これをとふかたりていは
 く火のくるまのうせぬ玉のかざりしたるめてたき車に天女のおほくのりて樂をしてむかひ
 に来たれりといふひしりのいはくそれのらんとおほしめすへからすなをくたゝあみた
 佛を念したてまつりて佛のむかへにあつからんとおぼせとをしふこれによりてなを念佛す
 又まはしありていはく玉のくるまのうせせてすみそめのころもきたる僧のたうときなるたゝ
 ひどりきたりて今いさ給へゆくへきすゑのみちもまらぬかたなり我をひてゑるへせんと
 いふどかたるゆめくその僧にくせんとおほすな極樂へまいるにゑるへいらすほどけの
 悲くんにのりてをのつからいたる國なれの念佛を申てひどりまいらんとおほせとすゝむ
 とばかりありてありつる僧も見えず人もなしといふひしりの云くそのひまにとくまいらん
 と心をいたしてつよくおほして念佛し給へとをしふそのち念佛五六十へんのかり申てこ
 ゑのうちにいきたえにけりこれも魔のさまさまにかたちをかへてたばかりけるにこそ

或人臨終に物ははさる遺恨の事

とし比あひゑる人ありき過ぬる建久のころをもき病をうけたりける時たのみたりけるひし
 りをよひけれのゆきてねんころに見あつかひけりかくてのとかに此人のさまをみるにやま
 ひの有さまいと心えず日にそへてよはりゆくを身つからぬまぬへしとも思ひもよらすあた

りの女はうなどましてかけても思ひよらさりけり此人いとけなき子あまたある中にことにかなしうなむするむすめひとりありける子どもの母のさきたちてかくれにしかのそれをふかくなけて又と人をも見す此むすめのかた〜みなし子になれる事をあはれみつゝ此はどむことらんとて「さま〜」いとなみさたしけれいさやらの事やむ〜もなをおこたらすこのひしりいとあさましくをろかにもあるかなとみれとなのめなるほどの人をいたりていひ出す十日のかりありてまめやかにをもちぬる後ぬしもやう〜心ほそけに思ひ人もをのつからの事もやなど思へるけしきを見てひしりは、かりながら有侍の身の思はずなる物をあとの事などかねてためをき給へかしなどいひ出たるにまことにさるへき事といふをきいておさなき子どもあたりの人までさとうちなくけしきいとはかなけなりこよひはくらし明日こそいとのとむるほどにその夜よりとにをもちていたくくしけなり人々おどろきて處分のやうを申合せてため給へ御あどゆくゑなくぬへしとひしりすゝむまことにとていかやうにか侍るへきといへあるへきやうのとてくるしけなるを念してこま〜と一時はかりいひつゝくれと舌もたりにけるにこそなにもきゝわき侍らすといへはさらの紙と筆とをたまへあら〜かきつけんといふすなはちとらせたれと手もわなゝきえかゝすわつかに書つけたるいたかぬみゝすかきなりすへきかたなくてひめ君のめの日ころおほしめしたりけるおもむきいゝか〜と云まゝにはからひかきて見すれとかしらゝをふりてとくひきやり給へといへ引やりつすへちからをよすさすかに心のたかぬ

にやさま〜思ふ事をえいひあらゝさすなりぬるを心うく思へるけしきあのれにかなしき事かきりなし夜の中のかりこそこれほどの心あるやうにも見えけれあけぬれの物もおほえずとよろしき程のまよぶんの事まきれにけり今いとて念佛すゝむれといひかなきさまなりかくてあくる日の巳の時のかりに大きにおどろける氣しきにて二たひのかりあめきてやかていきたえぬるいもしおそろしき物などのめに見えけるにや此事とをきほどなれのちにつたへきゝて今一たひあひ見すなりぬるをくちおしく思ひける程に廿日はかり過てかの人を夢に見るなへらかなる布衣つねのさまにかゝらすたいめんしたる事をよろこへるけしきながら物をいはずかくしてたゝむかひあたりと思ひてさめぬすなちうつゝにそのかたちあさやかなりやう〜ほどふるまゝにうすゝみになりゆきはてに人のかたちともなくけふりのやうに見えてきえうせにきその面かけ今にわすれかたくなむ侍る大かた人の志ぬるありさまあのれにかなしき事おほかり物の心あらん人のつねにをりを心にかけつゝくるしみすくなくして善知識にあのんことを佛ぼさつにいのりたてまつるへしもあしきやまひをうけつれのくつうにせめられてりんじう思ふやうならすをいり正念ならぬい又一期のおこなひもよしく善知しきのすゝめもかなはずたとひもしりんじう正ねなれどもせんちしきのをしふるなけれゝ又かひなしゝやうがいたゝ今をかきりとおもふをおんあいのわかれといひみやうりの餘執といひ見る物きく物にふれつゝ心肝をくたかすといふ事なしいつの心のひまにか浄土をねかゝんとするまかるを念佛こらつともり運心としふか

き人のかびのゆへにをり正念にしてかならず善しきにあふみ、にせいくんの外の事をきかす口にいせうみやうの外のをいはす最初引接を期すれいさいしのわかれもなくさみぬ五妙きやうかいをおもへいえぞの志うもあらずすゝろにすゝむてつゐにわうしやうをどくるなりあるひにかねて死期をきりこゝろもどなくまつ事國を出へき人のその日のをそむかとしなどいへりいかに況やまやうじゆのらいかうにあつかりて樂のこゑをき、たへなるかをかぎまさしくそんようを見たてまつる時心のうちのたのしみときつくすへからすかゝれいたとひ道心すくなくともをりをおそれんためにもいかゝわうしやうをねかひさらむ

武州入間河洪水の事

むさしの國いるま河のほとりに大きなつゝみをつき水をふせきてそのうちに田はたけをつくりつゝ在家おほくむらかりぬたるところありけり官首といふおとこなんそこにむねとあるものにてとしころすみけるあるとし五月雨日ころになりて水いかめしう出たりけりされどもとしころいまた此つゝみのきれたる事なけれいさりどもとおどろかすかゝるほとに雨いこほすとくふりておひたゝしかりける夜中はかりにいかにかつちのとくよにおそろしくなりとよむこゑあり此官首と家にねたるものともみなおどろきあやしみてこの何物のことゑとおそれあへり官首らうどうをよひてつゝみのきれぬるとおほゆるそ出て見よといふすなひちひきあけてみるに二三町はかりあらみわたりて海のおもてととならずこのい

せんといふほどこそわれ水たゝまさりにまさりて天井までつきぬ官首か妻子をはしめてあるかきり天井にのほりてけたうつばりにどりつきてさけぶこの中に官首とらうどうといふき板をつきあけてむねにのほりぬていかさまにせんと思ひめぐらすほどに此家ゆるくどゆるきてつゐにはしらのねぬけぬつゝみなからうきてみなどのかたへなかれゆくその時らうどうおとこのいふやう今のかうにこそ侍るめれ海のちかくなりぬみなどに出れぬ此屋いみな浪にうちたかれぬへしもしやとどひ入てをよぎてこゝろみ給へかくひろくなかれちりたる水なれいをつからあさきところも侍らんといふをきゝておさなき子女はうなど我をすてゝいつちへいまするそとをめぐこゑもつともかなしけれとともかくてもたすくへきちからなしわれらひとりたにもしやと思ひてらうどうおとことも水へどひ入ほど心の中いけるにもあらずあゝいふたりいひあひせつゝをよきゆけと水のはやくてはてい行すゑあらずなりぬ官首たゝひとりいつちともなくゆかるゝにまかせてをよきゆけいちからすてにつきなんとす水いつくをきいとも見えすとおぼれぬるとこゝろはそくかなしきまゝにかこつかきにはどけかみを念したてまつりけるいかなるつみのむくひにかゝるめをみるらむと思はぬ事なく思ひ行程にまら波の中にいさゝかくろみたる處のみゆかばかりのあさりもなかりつゝゝにてまはしちからやすめんと思ふあひたにまたい(四體)にこどくくまどひつくをれどろきてさくれいみな大くちなはなり水になかれゆくくちな

いとも此あしにわつかになかれかゝりて次第にくさりつらなりつゝいくらともなくわだかまりおたりけるか物のさいるをよろこひてまきつくなりけりむくつけくけうとき事たとへんかたなしをらみすみをぬりたらんやうにてほしひとも見えず地のさなから去ら浪にていさゝかのあさりたになし身にいひまなくくちなはまきつきて身をもくはたらくへきちからもなし地こくのくるしみもかはかりにこそいと夢をみる心ちしてこゝろうかなしき事かきりなしかゝるわひたにさるへき佛神のたすけにや思ひの外にあさき所にかきつきてそこにてくちないをかたのしよりとりはなちてけりといかりちからやすむるほどに東去らみぬれい山を志るへにてからうして地につきにけり船もどめてまつはまのかたへゆきてみるにすへて目もあてられす浪にうちやふられたる家とも算をうちちらせるかとしみきいのうちよせられたる男女むまうしのたくひかすも去らすその中に官首か妻子ともをはしめとして我家のものとも十七人ひとりうせてありけりなくく家のかたへゆきて見れり三十よ町去ら川原になりてあとたになしおほかりし在家たくいへをきたる物あさゆふよひつかひしやつこ一夜のうちにほろひうせぬ此らうとうおとこひとり水こゝろある者にてわつかにいのちいきてそあくの日たつねきたりけるかやうの事をきゝても厭離の心をおこしつへしこれを人のうへとて我かゝる事にあふましとい何のゆへにかもてはなるへき身のあたにやふれやすき身なり世のくるしみをあつめたる世なり身のあやうけれどもいかてかうみ山をかよひさらん海賊おそるへしとてすゝろにたからをすつへきにあらすいんやつ

かへて罪をつくり妻子のゆへに身をほろはすにつけても難にあふ事かすも去らす害にあへるゆへまぢくなりたゝ不迷の國にむまれぬるのかりなんもろくのくるしみにあひさりける

日吉の社に參る僧死人をとりあやしむ事

中比の事にやともなき法師の世にありわひて京より日吉のやしろへ百日まいるありけり八十日あまりになりて下向するさまに大津といふところを過けるにある家のまへにわかき女の人めも去らすさくりもあへすよゝとなきたてるあり此僧事のけしきをみるに何事といふらねとよのつねのうれへにあらすきわまれる事にこそといとおしくおほえてさしよりて何事をかかなしむととふ女のいふやう御すかたを見たてまつるに物まうてし給ふ人にこそとさらえなむきこゆましきといふはゝかるへき事なめりといをしはかられなからあひれみのあまみやゝねんころにたつぬれいそのとに侍り我はゝにて侍るものゝ日比なやましうつかまつりつるをけさつおにむなしくみなして侍なりさらぬわかれのならひあひれにかなしき事いさる物にていかにしてこれを引かくすわさをせんとさまく思ひめぐらせとやもめなれい申あひすへき人もなしわか身の女にてちからをよひ侍らすとなり里の人の又なをさりにこゝろあひれととふらひ侍れ神のわさまけきわたりなれいまことはいかゝいしく侍らんとにかくに思ひよるかたなくてなんといひもやらすさめくどなく僧これをきくにけにさようい思ふらめとわりなくいとおしくてやゝひさしくともになきたてり心に思ふやう

神の人をあれみ給ふゆへにこれる世にあとをたれ給へりこれをき、なからいかてかな
 さけなくすきん我かくはどふかきあれみをおこせる事おほえすほとけもか、み給へ神も
 ゆるし給へと思ひてなわひ給ひを我どもかくもひきかくさむ外にたてれの人めもあやしど
 てはひ入ぬ女なく、よるこふ事かきりなしかくて日くれぬれ、夜にかくしてたよりよき
 どころにうつしをくりつその、ちいもねられさりけるま、につく、と思ふやうさても八
 十よ日まいりたりつるをいたつらになしてやみなんこそくちおしけれ我此事名利のため
 もせずた、まいりて神の御ちかひのやうをも志らんむまれ志ねるけからひいはい、かりの
 いましめにてこそあらめとつよく思ひてあかつき水あみてこれより又日吉へうちむきてま
 いる道すからさすかにむねうちさいきそらおそろしき事かきりなしまいりつきてみれ、こ
 の宮の御まへに人所もなくあつまれりた、今十禪師のかんなきにつき給ひてさま、のと
 のたまふおりふしなり此僧身のあやまりを思ひ志りてちかくいえよらす物かくれにとをく
 るてかたのとく念誦して日をか、ぬ事をよろこひてかへらんとするほどにかんなきはるか
 に見つけあそこなる僧いといはれて心をろかならんやいされとのかるへきかたなくてわな
 くく、さし出たれいこ、らあつまれる人いとあやしげに思へりちかく、とよひよせての
 たまふやう僧のよむへせし事をあきらかに見しそとのたまへるに身のけよたちむねふた
 かりていける心ちもせずかさねてのたまふやうなんちおそる、事なかれいしくする物かな
 どみしを我もとより神にあらすあれみのおまりに跡をたれたり人に信をおこさせんかた

めなれ、物をいむ事も又かりのはうへんなりさとりあらん人のつから志りぬへし但此
 事人にかたるなをろかなる者いなんちかあれみのおすくれたるによりせいする事をい志ら
 すみたりにこれを例としてわつかにおこせる志んも又みたれなむとすもろ、の事人によ
 るへきゆへなりとこまやかにうちさ、やきてのたまふ僧の心な、めならずあはれにかたし
 けなくおほしてなみたをなかしつ、出にけりその、ちとにふれてりしやうとおほゆる事お
 はかりとなん

唐房の法橋發心の事

中ころ但馬守國舉か子に所の雜色國輔といふ人ありけりある宮はらのはした物を思ひてこ
 ろさしふか、りける比ち、のたしまのかみにて下りけれいえさらぬ事にてはるかにゆき
 けり一日二日のたえまたにわりなくおほゆるをたちわかれていたへぬへくもあらねといか
 いせんとさま、くにかたらひをきつ、なく、わかれにけり國にくたりてもこれより外
 に心にかゝる事なし京のたよりとに文をやれとど、かすさ、りかちにて返事も見すいふせ
 くてのみとし月を、くるあひたにとのたよりに人のかたるをきけ、京に人おほくやみて
 世の中さ、かしくなんあるといふにもまつおほつかなき事かきりなしかくしつ、からうし
 て京へのほり給ひつゝかありし宮のうちをたつぬれいはやれいならぬとありて出給ひにき
 どいふつかひむなくかへりて此よしをかたるにふとむねふたかりて何のあやめもおほへ
 す立かへりゆくゑたつねにやりたれと志る人もなしすへきかたなくて心のあらぬま、に

すゝろに馬にうちのりてうち出にけり西の京のかたにこそ志る人あるやうにきゝしかど
 かりほのかに思ひ出ていつくともなくたつねありく程にあやしけなる家のまへに此をんな
 のつかひしめのわらいたてりいとうれしくて物いはんど思ふほどにかくるゝやうにて家の
 うちへにけいるを馬よりおりて入てみれり此をんなうちをのみてかみをけつりてなむおた
 りけるあなみしくのおはしけるいとてうしろをいたきて目比いふせかりつる事なん念こ
 ろにかたらへといらへもせずさめゝとなくより外のとなし我をうらむるなりけりどあは
 れにこゝろくるしうおほえてなみたをおさへつゝさまゝになくさめおたりさてもなとか
 いうしろをのみむけ給へるいつしか見たてまつらんと思ふに今さへいふせくとてひきむけ
 んとするにいとゝなきまさりてさらにおもてをむかへすあなみし心ふかくもおほし人た
 るかなとてあゝてひきむくれりふたつのまなこなし木のふしのぬけたるとくにすへてめ
 もあてられすこゝろまどひとのかり物もいはれぬをねんしてさてもいかなりし事とどふ
 主はねをのみなきてもかくもいはねありつるめのわらひなんなくゝとのありしやう
 をかたりける御くたりの後志はし御文もなとかあるかど人えれすまぢ給ひしかとさら
 御をどつれもなくとせふたとせ過にしかり物をのみおほしてあかしくらし給ひしあひ
 たに御やまひつき給ひて宮を出給ひきたしき御あたりにもたよりあしき事ともありてさ
 るへきどころも侍らさりしかのこれにてあつかひたてまつりしほどにはかなくていきたえ
 給ひにき今のをき奉りてもかひなしとて此まへの野にをきたてまつりし程に日中はかりあ

りてなん思ひの外にいきかへり給ひにしそのあひたにからすなどの志わさにはやくいひか
 ひなきとになりて侍れりとかく申のかりなしわさともたつね奉るへきにてこそ侍りしかと
 此御ありさまのこゝろうさに今いひかて世にある物と人にあられしとふかくおほしたるも
 ことひりなれりかくれたてまつらんとつかまつるなりとなみたをおさへつゝかたるをきく
 に心うくなしき事かきりなしにのむくひにてかゝるめをみるらむ今此世のかきりに
 こそありけれとてやかてこれよりひえの山へのほり甘露寺の教靜僧都の房に慶祚の弟子に
 て眞言のひほうをつたふ唐坊の法橋行因といひし此人なり山王にあひたてまつりてく
 んじやうし奉りける人なりこの人はしめて山へのほりける時我もはかゝしうみちも志ら
 す志るへする人もなかりけれり人にとひつゝたどるゝゆきけるを水のみといふ所にてだ
 んなそうづ覺運といふ人に行あひていとあやしき事のさまをみるに出家しにのほる人にこ
 そいみしうちゑかしきまなこもちたる人かないつゝへゆくを見よとて人をつけやりてけ
 りつかひかへりきてあかゝ甘露寺僧都のもとへ入ぬといひければされりこそあれいみ
 しかりつる智者を慈覺の門人になさて智證のなかれへやりつるくちおしき事なりとそ
 まひける此人眞言ならひをめける比師のおほあしやりの心みんとや思はれけんおとこにて
 の物のまねをよくし給ひておかしきかたに人にけうせられけりときゝつる也千秋萬歳し給
 へみむといはれけれり又こともなくうけたまひりぬとて經のつゝみ紙のありけるをかしら
 にうちかつきてめてたくまふたりけれりあまやりなみたをおとしてさためていなひすらん

どこを思ひつるにまことの道心者なりけりいとたうとしとそほめ給ひける

伊家并妾頓死往生の事

中ころあさゆふ御門につかうまつるおのこありけりゆふなる女をかたらひてとし比すみわたりけるほどに心うつるかたやありけん宮つかへにことよせてやうくかれかれになりゆくをこゝろの外のためまかとおもふほどにつゐにかよひすなりにけれの女ことによれつゝ心ほそく思ひなけきつゝとし月をくくるあひたにおとこ事のたよりありて女の門のまへをすきけりそこなる人見あひてたゝ今どのゝ御まへをこそこれよりすき給ひつれさすかにさる所ありといおほし出つるめり物見よりなん見いれ給ひつるとかたるこれをきゝてきこゆへき事侍り入給ひなんやと申せといふ過給ひぬる物をやいかへり給ひんするといひながらはしりつきて此よしをきこゆあやしく何事にかとおほえなからこれをさへきゝすくへきならぬいとまりぬ門よりさし入てみれぬ草ふかくまけりてありしにもあらずあれたる庭のけしきをみるよりなにとなくあひれふかくなんまさりけるわか身のか思ひまられていかにそやすゝろのしきやうにおほゆるを女のいまさら心うきたるけしきなしもとよりかくておたりけるやうにてけうそくにをしかりてほけきやうをよみ給ひつる物思ひけるさまなからすこしおもやせたる物からいときよけにらうたけなるかたちすかたかみのこほれかゝるさまなともみし人とおほえすたくひなくみゆるに何の物のくるゝしにて此人に物を思ひせけんといひころの心くるしさを思ふにもいとあひれあさからすゝろならぬ事のあり

さまなどねんころにかたりけり女ものいはんど思へるけしきなからいらへもせぬのきやうよみはてゝと思へるなるへしいふせく心元なくまつ程に於此命終即往安樂世界阿彌陀佛といふところをくり返し二たひ三たひよみてやかてねいりたるかことくにておなからいきたえにけり此おとこの心いかはかりなりけんおとこはなにかしの辨とかや聞しかと名いわすれにけり人をこひてゝあるひの望夫石の名をとゝめもしのつらさのあまりにあくりやうなどになれるためしもきこゆいかに罪ふかきならひのみこそ侍るにそれをわうまやうのえんとして思ふやうにをりにけんいとめてたかりける心なるへしあひれこれをためしにて此世にも物を思ふ人のわうしやうを願ふ事にて侍らひいかにこゝろかしてからんたとひおなし心なる中とてもいく世かゝあるやうきひのむなくひよくの契りをのこし李夫人のわつかにはんごんのいふりにのみあられたりいはんや思はぬ人のためにのこになれつゝあはれもあらんことりもなし思ひあまりぬる時ふしのねをひきかけ海士の袖とかちて念ころに心のそをあらはせと何のかひかゝあるひとむねをこかし袖をまほる程いみしうもあちきなくなん侍りいかにいんや此世ひとつにてやむへき事にてもあらずそのむくひむなしからぬゝ來世にゝ又人のこゝろをつくさすへしかくのことくせゝしやうゝたかひにきゝまりなくして生死のきつなどならん事のいとおみふかく侍るなりこのたひ思ひきりて極樂にむまれなゝうきもつらきもねぬる夜の夢にことならしたちかへりせんちしきとさとりてかれをみちひかん事こそあらまほしく侍れもし浄土にてなをつきかたきほど

のうらみならぬその時いひむかへをもせよかし

母娘をねたみて手の指蛇になる事

いつれの國とかたしかにきゝ侍りしかどわすれにけりあるところに身のさかりにておとなしき妻にあひくしたるおとこありけり此つまさきのおとこの子をなんひとりもちたりけるいかゝ思ひけんおとこにいふやう我にいとまたべ此うちに一聞あらん座敷にゐてのどかに念佛などしてゐたらんさて外の人をかたらぬよりこれにゐるわかき人をあひくして世の中の事さたさせ給へさらうとからん人よりわかためにもよからん今としたかくなりてかやうのありさまことばふれてはいならずといひければおとこもおとろき思ひむすめもあるましきやうにいひければ此事をさりならずともすれいませめやかにうちくときつゝいふ事たひたひになりぬさほと思はるゝことならぬうけ給りぬとていふかことくしておくのかたにすへておとこいふまゝむすめとなんあひくしてすみけるかくてときゝいさしのそきつゝ何事かなといふことばふれて妻もおとこもをろかならぬやうにてとし月をゝくするほどにゐる時おとこ物へいたるあひたに此つまはゝのかたにゆきてのどかに物かたりなとするほどにはいみしう物思へるけしきなるをこゝろえす我に何事をかへたて給ふへきおほされんこといひたまひあひせよといふさらに思ふことなしたゝ此ほどみたり心ちのあしくてなといひまさらぬすさまたゝならずあやしければなをゝゝあゐてとふその時にはいふやうまことばにいなに事をかかくし申さんよにこゝろうきことありけり此家のう

ちのありさまいこゝろよりおこりて申すゝめし事をかしされいたれもさらゝうらみ申へき事もなしゝかあるを夜るのねさめなどにかたいらさひしきにもちと心のはたらく時もあり又ひるさしのそかるゝ折もあり人のふるまひになりたるこそ思はさりし事かなれとむねのうちさゝいゝをこれ人のどかくいゝあなをろかの身やと思ひかへしつゝすくれとなを此事のふかきつみとなるにやあさましきことなんあるとてひたりみきりの手をさし出たるをみるに大ゆびふたつなからくちなひになりてめもめつらかに舌さし出てひらゝとすむすめこれを見るにめくれこゝろもまどひぬ又こもいはす髪おろしてあまになりけりおとこかへりきてこれを見て又法師になりぬもとの妻もさまをかへあまになりて三人なからおなしやうにおこなひてなん過けるあさゆふいひかなし見ればくちなはもやうゝもどのゆひになりけり後に母の京に乞食しありきけるとかやまさしく見しとてふるき人のかたりしいちかき世の事にこそ女のならひ人をそねみ物をねたむによりおほくいつみふかきむくひをこるなり中々かやうにあらはれぬる事いゝかへしてつみほろふるかたもありぬへしつれなくこゝろにのみ思ひくつをれて一しやうをくらせる人のつよく地ここのこうをつくりかためつるこそいと心うく侍れいかにもゝこゝろの師となりてかついさきの世のむくひと思ひなしかつゝ夢のうちすさひともおもひけりて一念なりともくゆるこゝろをおとすへきなりある論には人たどひをもきつみをつくれともいさゝかもくゆる心のあれい定業とならずとこそ侍るなれ

發心集第五

亡妻現身夫の家にかへり來る事

中比かた田舎におとこありけりとしこ心さしふかくてあひくしたりけるつま子をうみてのちをもくわつらひけれの夫をひめてあつかひけりかきりなりける時かみのあつけそみたれたりけるをゆひつけんとてかたはらに文のありけるをかたのしをひきやりてなんむすひたりけるかくてほどなくいきたえにけれなくとかくのさたなどしてはかなく雲けふりとなしつそのちあとのわさねんころにいとなむにつけてなくさむかたもなくこひしくわりなくおほゆる事つきせすいかて今一度ありしなからのすかたをみんとなみたにむせひつゝあかしくらすあひたにある時夜いたうふけて此をんなねところへきたりぬ夢かと思へどさすかにうつゝなりうれしさにまつなみたこほれてさてもいのちつきて生をへたてつるにはあらずやいかにしてきたり給へるそとどふまかなりうつゝにてかやうにかへりくる事のこといりもなくためしもきかすされと今一度見まほしくおほえたる心さしのふかきによりてありかたきとをわりなくして來れるなりその外のころのうちかきつくすへからす枕かはすとありし世に露かいらすわかつきをきていてさまに物をおとしたるけしきにて寢所をこゝかしこさくりもどむれと何とも思ひわかす明はて、後あどをみるにもどゆひひとつおちたりとりてこまかにみれのかきりなりし時かみゆひたりし反古のやれにつゆもかはらす此もどゆひのさなからやきはふりてきとあるへき故もなしいとあやしくおほしてありし

やりのこしの文のありけるにつきあひせてみるにいさゝかもたかひすそのやれにてそありけるこれのちかき世のふしき也さらにはうきたる事にあらずとて澄憲法師の人にかたられ侍りしなりむかし小野篁のいもうどのうせて後よなくうつゝにきたりけるの物いふこゑのかりしてさたかに手にはさる物なかりけりとを大かたこゝろさしふかくなるによりてふしきをあらぬ事これらにてありぬへしばんぶのをろかなるたにまかりいはんや佛ぼさつのたくひの心をいたして見むとねかゝ、其人のまへにあらぬれんとちかひ給へりこれをきゝなからおこなひあらぬして見たてまつらぬわか心のとかなり妻子をこふかこどくこひたてまつり名利を思ふかこどくおこなひ、あらぬれ給へん事かたからす心をいたすこともなくて世のすゑなれのありかたしつたなき身なれのかなしなど思ひて退心をおこすいたゝこゝろさしのあさきよりおこる事なり或人いはくかけろふといふむしあり妻夫の契りふかき事もろくの有情にすぐれたりその證をあらぬさんとす時にこの虫めをとこれをとりにて錢二文にべちくにはしつけさて市にいたして二の錢をあらぬ人にひとつゝこれをうるあき人かひとつれのとかくいたる事かすも志らす志かあれともそのちきりふかきによりて夕にかならずもとのとくつなぬかれてゆきあふといへり此故に錢の一名をの蜻蛉といふとそむかしいもせのちきりあるして用事なけれと何につけても思ふへしわれらふかき心さしをいたして佛法にちぐし奉らんとねかゝ、なしかのかけろふのちきりにことならんたとひどうにひかれて思はぬみちに入ともおりくゝにかならずあらぬれてすくひ給ふ

へし

不動持者牛にむまるゝ事

ちかく山の西塔のにし谷みなみおといふところにごくらくはうのあしやりといふ人ありけりかのすみける坊の南尾にとりて北尾といふかたを見やりてのほりくたるみちかくれなくみゆるどころにてなむありける此阿闍梨念じゆうち志て脇息によりかゝりてちどまどろみたる夢に北尾よりゆゝしけにやせかれたるうしに物おほせてのほる人あり牛の志たをたれてのほりかねたるをかみあかくちゝみあかりたる小わらのまなこいとかしこけなるかつきてまりになりさきになりはしりめぐりてこれををしあけたすけつゝのほるありあやしくたゝ人ともおほえす童子なに物ならんと思ふほどにその人に人有ていふやうあれゝ生々而加護のちかひをたかへしとてなりといふと見ておどろきぬうつゝに見やれゝみえつるやうにすこしもたかひすかのうし物をおひてのほるありつるにあかかしらの童の見えすこれを思ふに此牛のさきの世に不動の持者にてありけるにこそいんくわのとりかきりあれゝごうによりてちくしやうとなりけれとなをすてかたくてかく後前にたちつゝたすけ給ふにこそいといみしうあはれにたうとくおほえけれゝ小法師物に米いれてちどもてこよといひすてゝはしりむかひてうしを志はしとゝめて食物をなんあたへたりけるほどけの御ちかひむなしからぬ事かくのとし世々生々にちぐし奉らむとねかふへし

少納言公經先世の願によりて河内の寺を作る事

少納言公經といふ手書ありけりあかためしのころこゝろのうち願をおこしてもしことよろしき國給はりない寺つくらんと思ひけるを河内といふあやしの國のかみになりたりけれいはいなくおほえてさらゝふるき寺などをこそ修理せめと思ひて國にくたりにけりさてその國の中にこゝかしこ見ありきけるにあるふるき寺のはとけの坐のしたに文の見えけるをひらきてみれゝ沙門公經とかけりあやしてみてこまかにみれゝ來世にこの國の守となりて此寺を志ゆりせんといふ願を奉たる文にてなんありけるこれを見て志かるへかりける事と思ひありてのそみのほいならぬ事をもいさめつゝ信をいたして修理しけりかきたる文字のさまなども今の手に露ほどもかゝらす似たりけり伏見の修理のかみのやうにむかし同じ名をつけるなりけり我も人もさきの世を志らねゝこそあれ何事もこの世ひとつの事にて侍らぬをむなく心をくたきはしりもとめてかなゝねは神をそしりほとけをさへうらみたてまつるゝいみしうをろかなりかつゝ願のむかしにたかゝぬにて願としてなるへき事を志るへし

少納言統理通世の事

少納言むねまさときこえける人年來世をそむかんと思ふこゝろさしふかゝりしか月くまなかりけるころ心をすましつゝつくゝと思ひわたるに山ふかくすまむ事のをせちにおほえければまつ家にゆするまうけせよ物へゆかむといひてかみあらひけづらばうしなどしけりけしきや志りたりけん妻なりける人心えてさめゝとなむなきけるされともかたみにと

ちひき給ふへき事も返すく契りきこえて今かへりなんとし給ひける時さてもわたり給へるいとかしこまり侍り俊實いふかくの者にて侍るなりとてなん申給ひけるその時のなにも思ひわき給ひすかへり給ひて此ことをあし給ふにさせるついてもなかりきよもわか子のあしきさまの事はんとてのたまひしくれたる事なくとも見はなたすかたうとせよとにこそいあらめ世をそむくといへともなを恩愛のすてかたき物なれし思ひあまられたるにこそとあられにおほされてそのち事にふれつひきたてとり申給ひければみなしかなれとはやく大納言までそのほりにけるみの大なこんときこゆる此君なりけり

成信重家同時に出家の事

兵部卿致平親王の御子成信中將と堀川右大臣の子にて重家の少將ときこえける人時にとり世にとりてたくひなきわか人なりければ中將ひかる少將とておなしさまにそいはれ給ひける此二人おなし時に心をおこして世をそむかんことをいひ合せ給ふ心さしひひとつなれと發心のおこりのことなりけり少將の時の一の人のをもくわつらひ給ひけるにそのかけにかくれたる人のうれへあるさまをうけとり給ふへきかたの御ゆかりの人のけしきなどを見給ひけるにおしむもそねむもころうきならひなりとおほしけるよりのつからいとふ事と成にけり中將の齊信公任俊賢行成など聞えていみしかりける人々陣の座にて朝のさためともおりくさいかくをはきていみしかりけるをたちきつつかさくらゐれたかくのほらんと思はし身のはちをまらぬにこそありけれ此人くいにいかにもよふへくもあらず

さて世にありてい何にかいせん後の世をねかふへかりけりと思ひとり給ひけるなり此二人その日とさためて三井寺の慶祚あしやりのもとへゆきあんと契り給へり重家の君をそく見えければ夜に在るまで待かねてをのつから思ひわつらふ事のあるなめりとはいなくおほしなからひとりあしやりの室にいたりてかしらおろさむときこゆあさやりあたらしき御さまなるのみにあらず名高くおはする身なれしひんなく侍へりなんとていなひ申ければあからさまにたちいつるやうにてみつからかみをきりてかくなんまかり成たるとありける時をいひかひなくてゆるしきこえけるかくてあかつきかへらんとし給ひける時露にそほぬれつゝまけいゑ少將おはしたりいかにをそくの夜ふくるまでまちたてまつりしかどもしためらひ給事などの侍るかどてさきになんつかまつりたるとありければさやうにちきりきこえていかてかひ日をおいたかへ侍らんおとせにいとまこひ奉らてつみえぬへくおもひ給へてついでをはからひ侍りしかひ日をたかへしとてよもどゆひをいきり侍りとてなん見せ給ひける中將の廿三少將の廿五とそさしもすくれさるへき人たにもあたらしかるへきをかくおなしころにてかたちをやつし給ひつれいあしやり涙をおとしつゝかついおしみかついあはれみけり此少將まつもとゆひをきりてやはらかふりをしてくらさまきれに父の大臣にいとまこひ給ひければのつからそのけしきやあるかりけんいかにいふともとまるへきやうにも見えさりしかいえとめすなりにきとそ給ひける又たふのみねの入道高光少將の兄の一條の攝政の事にふれつゝあやまらおほくおはしけるを見たまひて世にあるいはちかま

しき事にこそとてこれより心を發し給ひけるとなむ人のかしこきにつけてもおろかなるにつけてもまことの道をねかふ便と成にけんこそけにあらまほしく侍れ

花園左府八幡に詣て往生を祈る事

花その、左大臣の御かたち心もちひ身のさへすへてかけたる事なくと、のほり給へる人なりちかき王孫にいますか、りけれのかくた、人になり給へる事を人もおしみたてまつりわか御心にもおほしまりて御よろこひなるへき事をそのけしき人に見せ給ふとなかりけりもしつかふまつる人の中におとも女をものつから心よけにうちわらひなどするをもか、るすくせつたなきあたりになりなから何事のうれしきなき、すくさはしたなめ給ひけれのはつ春のいはひとをたに思ふはかりのえいはぬならひにてなんおりける春のうちわたりも中、事うるのしけれの身にさへあるほどのわかき人のた、此殿にのみまうてあつまりて詩歌管絃につけつ、こゝろをなくさむる事ひまなしうへの御せうとたちはたいますあさゆふといふはかりさふらひ給ひけれのおほい殿など申はかりこそあれさるへきいろいの御もてなしにかいらすわかぬ事なく見えければとすへて身をうき物にふかくおほしどりてつねにの物思へる人どを見え給ひけるいつれの時にかありけん京より八幡へかけより御東帯にて七夜まゐり給ふ事ありけり別當光清此ことをき、て大きに御まうけよういして御氣しきし給ひけれと此たひのことさらになちやとるかたなくてまうてなんと思ふこゝろさしあれのえなむたち入ましきとてより給ひさりけり七夜にみて、かへり給ひけるに算豆と

いふ所において御のをみかなふへきよしの歌たてまつりたれの返し給ひすこれの御神のおほせなりとて御ふくろにおさめてかへさのり給ふ御馬をを鞍置ながら給はせける御どもにつかうまつる人々いかはかりなる御のをみなれのかくかちにて夜をかさねつ、まうて給ふらんとありかたくおほえていかにもた、事にはあらし大はさつ、のあら人神と申中にもむかしの御門におはしますかきりある御氏のたえ給ひぬる事おほせらるゝにやとまておほつかなく思ひけるに御幣のやくすとてちかくさふらひけるにき、けれの忍ひつゝりん玄う正念わらしやうこくらくと申させ給ひけるにそかなしくも又めてたくもおほえけるまこと御門の御くらもやむことなけれどつねにのせちりもすだもかはらぬならひなれば往生極樂のつねの事にいなをまかすなん

目上人法成寺供養に參り堅固道心の事

河内の國に目聖とてたうとき人ありけり御堂入道殿はうじやうじつくり給ひて御くやうありける日まゐりておかみけるに事のぎしき佛前のかさりまことにこゝろをもよひす宇治殿その時の關白にて事おこなひておのしませす座にかたならふへき人もなくめてたく見えけれの人界にむまるゝとならゝ一人こそいみしかりければとほ、のゝしる百司雲霞のことく圍遶しらんしやうのゝまりていたり給ふ時いみしとおほえつる關白物ならず覺えてさきの思ひをあらためていかにも國王にのまかさりけりともみるあひたに金堂にいらせ給ひてはどけをおかみ給ひける時なんなをし佛をうへもなくおはしましけりとおほえていと、道心

をかためたりけるかのめうしやうごんわうのたくひにことならずいとかしこき思ひはかりなるへし

乞兒物語の事

ある上人の物へまかりけるみちに乞兒三人行つれたりけるかをのがどち物かたりするをきけいひとりかいふやうあふみのゆゝしき運者かな坂のましらひしていまた三年にたにみたぬにほうちやくゆりたるのありかたき事をかしといへは今ひとりかいはいくそれのべちの果報の人を口きたなくていふへからすといふこれを聞いてこそわかさまを佛はさつの事にふれてはかなく見給ふらん事思ひあられてあはれにはつかしくおほえ侍りしかどかたりき又ある人かたの中に行ていやしき家にやとをかりてとまりけるに此家のあるしをみれいとし八十あまりにやあらんかうへい雪のことくしてはたへくろくまはたゝみ目たゝれ口すけみこしいふたへにかゝまりてたちあるたひに大きにくるしういかにもけふあすの事にこそいとおしくおほえてこれをすゝめていふやうなんちおひせまりて殘命いまいくはくかのあらん行歩もかないされは人にまするにつけてもくるしからん今の出家うちして念佛申てのどかにゐたれかしさらの後世のたのしみもまかるへきのみにあらず身もやすからんといふおきなにいふやうまことにいまいさやうにこそつかまつるへきをなるへきつかさのひと侍るによりてたへぬ身におひのちからをはけみてかくまてつかへ侍る也我よりも今みとせかこのかみなる翁上臈にて侍りかれ人まねつかまつりなん後いかならずそのつかさにまかり

なるへけれいそれまで侍侍るなりとそいひけるさやうの者のなるつかさ思ふにさのかりにこそいあるらめ其事にまうをどめて今やゝとまほりをりけん罪ふかくあはれにこそ侍れたゝしこれらをうちきけいをろかなるやうなれとよくおもへい此世の望たかきもいやしきもみちおなしわれらかいみしく思ひならいせるつかさ位もこれをかみつかたにならふれいおきなかのそみにことならずいはんや天ぢくまんだんのこくわう大臣のありさまなどいたとへてもいふへからす又或人の云治承のころ世の中みたれて人おほくほろひうせ侍りし時かたきのかたの人をとらへて頸をきりに出まかるとてのゝまらあへるをみれいことよろしき者にこそさすかによしありてみゆるをなさけなくゆゝしけにしてをひ立てゆく地獄ゑにかける鬼人にことならずあなこゝろ憂よもうつゝ心あらしとあわれいとおしく見ゆるほどにみちにむばらのあるをふましとてよきてゆかむとしけるをみる人なみたおとしていはくかはかりの目を見て今いく時あるへき身なれいむばらをふましとおもふらんとはかなくかなしみあへりこれ又人の上かゝわれら世のすゑに及びていのちみしかくくのほうつたなき時わつかに人界に生れたりといへども二佛の中間やみふかくとうじやうけんこのおそれはないたしひまゆくこまはやくうつりひつじのあゆみ屠所にちかつけいをいりけふともあらずあすともあらず何の他念かゝあるへきたちてもゐてもぼんなふのあたのためにはばくせられたる事かなしむぬてもさめても無常のつるきのたちまちにいのちをたゝむ事おそるへきをかしまかるをむなしくちりはいとなるへきかきりの身を思ふとて露のまの貴賤を

うれへてこゝろをなやまし名利にわしるたゝかのむばらをよぎけん人どこを覺え侍れ大かたひを虫のあらたにむまれて夕へに去ぬるならひもかならずみな是わか身のうへにあり天の中にいのちみしかき四天王天をきけり此世の五十年をもつて一日一夜とせり我國のいのちなかしのいふ人わつかに此天の一日二日にこそいわたるらめいはんや上さまの天にくらふれいたゝ時のまといふへしかゝれいとていつこかのわれらかひをむしを思へるにことなるもろくの事かくの如しいはゝとてもかくてもありぬへき此世なり只かの夢の中の有無の有無とも無なりまといひのまへの是非の是非とも非なりといへるかめてたき理りにて侍るなりされり禪仁といふ三井寺の名僧の法印になりたりける時人よろこひひたりける返事のかの六よく四禪の王位に見えたるどころなり此小國へんひのくらゐ何をあひするにたらんとこそいひたりけれちゑのなをかしこき物なり大かたばんふのならひいやしくつたなき事も身のうへをいゑらすこのゆへに乞食かたくひ名聞をせりめてたくやむことなき事とても又わかぶんに過ぬれいのそむ心なし民の王宮をねかひさるかことし今これを思ひとくにににされるすゑの世の人極樂をねかひぬきめたることはりなりかの國のありさままよゆしやうのたのしみ事につけ物にふれてなにかいわれらか分になすらへたるみなこゝろもとはも及ばぬ事ともそかしゑかあれのもしひくんのをゝきて信をもおこしいさゝか望む心もあらん人の此世ひとつの事にあらす生々世々につとめたりけるなこゝろとしていかにもちかつける事とたのもしく思ふへきなり

貧男差圖をこのむ事

ちかき世の事にやとしのたかくてまつしくわりなきおとこありけりつかさなどある者なりけれと出つかふるたつきもなしさすかにふるめかしき心にてあやしきふるまひなどい思ひよらす世執せしうなきにもあらぬの又かしらおろさんと思ふ心もなかりけりつねにのゐどころもなくてふる堂のやふれたるにそやとりたりけるつくくとし月をゝくるあひたに朝夕するわさとして人にかみはんぐなどこひあつめいくらもさしづをかきて家つくるへきあらましをす寢殿のまかゝ門のなにかとなどこれを思ひはからひつゝつきせぬあらましにこゝろをなくさめて過けれり見きく人のいみしき事のためしになんいひけるまことにあるまじきことをたくみたるのはかなけれとよく思へり此世のたのしみはこゝろをなくさむるにまかす一二町をつくりみてたる家とてもこれをいひ思ひならにせる人めこそあれまことにはわか身のおきふすところの一二間にすきすその外のみなまたしきうとき人のおとこのためもしの野山にすむへきうし馬のれうをさへつくりをくにのあらずやかくよしなき事に身をわつらはしこゝろをくるしめて百千年あらんために材木をえらひひはだかはらを玉かゝみとみかきたてゝ何のせんかある主のいのちあたなれいすむ事久しからすあるひ他人のすみかとなりあるひの風にやふれ雨にくちぬいはむや一度火事出きぬる時とし月のいとなみ片時のあひたに雲けふりとなりぬるをやまかあるをかのおとこかあらましの家のいはしりもとめつくりみかくわつらひもなし雨風にもやふれす火災のおそれもなしなすと

ころのわつかに一紙なれと心をやとすにふそくなしりうじゆほさつのためひける事ありといへどもねかふこゝろやまねのまつしき人とすまつしけれどももどむることなけれのどめりどすと侍り書寫のひしりかきとめたることはにひぢをかゝめてまくらとすたのしみ其中にあり何によりてかささらに浮雲のゑいようをもとめむと侍り又ある物にのろこしに一人の琴の師あり絃なきとをまぢかくをきてまはしもかたはらをはなたす人あやしみてゆへをどひけれの我ことをみるにそのきよく心にうかへりそのゆへにをなけれどもこゝろをなくさむる事ハ彈するにことならずとなんいひけるか、れの中へ、目のまへにつくりいとむ人のよそめこそあなゆゆしとみゆれとこゝろにいたらぬ事おほからんかのおもかけのすみかハ事にふれてとくおほかるへしたし此事世間のいとなみにならふる時ハかしこけなれとよく思ひとくに天上のたのしみなをおりありつはのうちのすみかいとこゝろならずいはんやよしなきあらましにむなく一期をつくさんよりもねかハ、かならずえつへきあんなやうせかいのけらくふたいなる宮殿樓閣をのそめかしはかなかりける希望なるへし

勤操榮好をわはれむ事

むかし大安寺に榮好といふ僧ありけり身のまつしくて老たる母をもちたりけれの寺の中にすへおきてかたのこどくのちつくほどの事をなんしける七大寺のならひにて居たる僧の室にけふりたつることなし外にて飯をしてくるまにつみつゝあさゆふことに僧坊のまへよりわたしてくばれの榮好これをうけて四つにわけて一をの母にたてまつり一をの乞食にと

らせ一をの身つからくひ一をのたゝひとりつかふわらひかれうにそあてたりけるまつは、にあたへてまいるよしをきゝて後みつからひくふならひにてとしころの次第をたかへす此榮好か房のかたのらに垣を一つへたて、勤操といふ人すみけりおなし心にわひたのみたる人にてとし比此事をありかたく見きくほどにある時かべをへたて、きけの榮好か小童のひつゝなくこゑあり勤操あやしく思ひてわらひをよひて何事によりてなくそとどふこたへて云やう我師けさにはかにいのちをのり給ひぬれのをのれひとりしてはふむりおさめたてまつらん事思ひやるかたなくて侍るうへには、の尼うへ又いかにしていのちつぎ給ひむすらんどかなしく侍るなりといふ勤操これをきゝてあられにかなしき事かきりなしなくさめいふやうなんちいたくなくへからすはふむらん事ハ我もろどもに今宵の中にとかくしてんす又母をの我まうしやにかはりて我分をわけてやしなれんといふ小童これを聞てかなしみの中にかきりなく覺えてなみたをのこひつゝさりげなきやうにもてなせり勤操わか分をわちて榮好かをくるやうにてわらひにもたせて母のもとへをくるは、此事を思ひよらぬ氣色をみるにつけても涙のこぼるゝをどかくまきらひしつゝ物いはすしてさし置てかへりぬ暮ぬれの夜半はかりに勤操とわらはとふたりして榮好をもちてふかき山にをくりをきつ母の尼公さきゝにかはれる事もなけれのわか子のうせたるともまらすして月日を送るほどに勤操かもとに客人來て酒などのむ事ありけり何となくまきれてさきゝゝ飯をくる時すきにけれとおや子のわひたならねのはゝかりて童いひ出さすやゝ久しくありて後をくり

たるには、の尼公いふやうなとれいよりのをそかりつるをとしおひぬる身のむね志のりこ
 いたかひてれいにもにおほゆるなりといふをき、て此わらひいふかひなくなみたと
 し忍ふとすれとこゑもおしますなきおたり母心もえす覺えてなをく、志のどふにつるに
 くすへき事ならねのこの有さま始よりかたるやかても申へかりしかどもとしたけたる御
 身にもしなけきにたへすひきり給ふ事も侍るとていま、て申さ、りつる也此めし物
 を、子御房の同法のおはするかありしやうをひき、てうせ給ひにし日より我分をわかち
 奉らるゝなり今日客人のきたりて酒などまいりつるほどに心ならず日たけて侍るなりされ
 と御子ならひこそいかにもともす、めんさすかに憚り思ひ給てなといひもやらすなく母
 きくまゝにたふれふしてなきかなしみていはくわか子のはかなくうせ給ひにしを志らすし
 てあしたにや來るゆふへにやみゆるとまちけるこそいはかなけれけふのくひ物のをそか
 りつるをあやしめさらましかりわか子のありなしを志らざらましといひてたちまちにた
 え入ぬ勤操これをき、て岩淵寺といふ山寺にてはふむりす、めて七日、には鉢をまうけ
 てはけきやうをときもろくの衆にいひあひせつ、四十九日はうじにてけだいなくなむつ
 とめける其のとしに一度の忌日とに同法八人ちからをわはせて同法八かうとなつて延曆
 十五年よりはしめたりけるを岩淵寺の八講と名つけたり八かうのおこりこれよりはしめて
 どころくにおこなふ事今にたえすさて勤操のおほやけわたくしたうとき聞えありけれ
 うせて後僧正のつかさなんをくり給ひける

正算僧都の母子のため志深き事

山に正算僧都といふ人ありけりわか身いみしくまつしくて西塔の大林といふところすみ
 ける比としのくれに雪ふかくふりてとふ人もなくひたすらけふりたえたる時ありける京に
 は、なる人あれとたちくらしきやうなれの中、心くるしうてとさら此ありさまをいきか
 れしと思ひけるを雪の中のこゝろはそさをやおしはかりけんもし又事のたよりにやもれ聞
 けんねんころなるせうそくありみやこたにあとたえたる雪の中に雲ふかきみねのすまひの
 こゝろはそさなとつねよりもこまやかにていさ、かなる物を、くりつかひされけり思ひよ
 らざるほどにいとありかたくあわれにおほゆる中にもこのつかひのおとこのいとさむけに
 ふかき雪をわけきたるかいとおしけれ、まつ火などたきて此もちきたる物てうしてくす
 今くはんとする程にはしうちたて、はら、となみたをおとしてくすなりぬるをいとあ
 やしくてゆへをとふこたへていふやう此たてまつり給へる物のなをさりにて出きたる物に
 ても侍らすかた、たつねられつれともかなりて母御せんの身つから御ぐしの志たをきり
 て人にたひてそのかひりをわりなくしてたてまつり給へるなりた、今これをたべんとつか
 まつるにかの御心さしのふかきあれさを思ひ出て下らうにて侍れといとかなしうてむ
 ねふたかりいかにものせへ入侍らぬなりといふこれなき、てをろかにおほえんや、や、久
 しくなみたなかしけりすへてあはれみのふかき事母の思るに過たるいなしをろかなる鳥け
 た物まてもそのじひを具したりぬ中のもの、かたり侍りし、雉の子をうみてあた、むる

ひ出にせんとなくくいふをきつゝなみたをなかしおどろきかなしむもことなり也わか
 をろかなる心にくとくのおほくならん事をも思はず君いとけなかりしおりの我にはく
 まれき我としたけよはひかたふきての君をたのむ事天地のことしのこの命けふあすも
 たらぬ時にいたりて我をすてゝ心とさきたゝむ事こそいとかなしけれとその心さしふかき
 ことを思ふに師のいのちにかはりなり君か後世においてのうたかふへからすもし此事をゆ
 るさすのほとけもをろかにおほしめし君かこゝろにもたかひなんまことに老少不定のい
 ちなりおもへい夢まほろしの前後なりはやく君か心なりとくじやうとにむまれて我をすく
 ひ給へよと涙をおさへていひけれの證空なくくよろこひてかへりぬやかてとしなのりか
 きつけて晴明かもとへやりつこよひ祈りかへたてまつるへきよしへり夜やうくふけゆ
 くほとに此證空かしらいたみ心ちあしく身ほとをりてたへかたくおほえけれのわか房に行
 てみくるしかるへき文などとりまたゝめつゝとし比もちたてまつりけるゑさうの不動尊に
 むかひ奉りて申やうわれとしわかく身さかりなれいのちおしからざるにあらぬと師のを
 んのふかき事を思ふによりて今すてにかのいのちにかはりなんとすつとめすくなけれの後
 世きのめておそろしねかはくの明王あわれみをたれて悪道におとし給ふな病苦すてに身を
 せめて一時もたへ志のふへからす本尊をおかみたてまつらん事たゝ今はかりとなくく申
 すその時ゑさうの佛眼より血のなみたをなかしなんちの師にかゝる我の汝にかはらんと
 たまふ御こゑはねにとをりきもしむかないしとたなこゝろをあはせて念しむたるあひた

におせなけれぬるみさめてすなりちこゝちさのやかになりけり内供もその日より心ちを
 こたりにけれの此事をきいてをろかに思はんやの後にい人にすくれてあひたのみたる弟子
 にてなんありけるかの本尊のつたりて後白河院におはしましけりじやうぢう院のなき不
 動と申のこれなり御目よりなみたをなかしたるかたちけにさやかに見え給へりけると證
 空阿闍梨といふの空也上人のひちのおれ給へるを餘慶僧正のいのりなをし給ひたりける時
 法器のものなりとて聖のたてまつられたりける小童なり

后宮の半者一乗寺僧正の入滅を悲む事

一乗寺の僧正かくれ給ひて後そのはてのわさしける日あしたよりわかき女房のつはしやう
 そくしたるかなみたおさへつゝむかひわたりにたゝすむありけり人くあやしう思ひて事
 まさるゝ日なれいわざとたつねとふ人なしすてに佛事はしまりてのち此女はう人にましり
 てちやうもんすはしめよりをりまてなくことをこたらすそのけまきよのつねの事にあら
 すめたゝしきほとに見えけれいある人此女はうのさまこそ心えねかやうにあつまりゆる
 をもしあしさまにとりなす人もあらいなき御かけにも見くるしかりぬへしいさをひいたさ
 むといふ又あるひいやうこそいあるらめいかせつはうの時なくとてをひいたすへきなさ
 けなからんそのゆへをどふへきかなとやすからすいひしらふほとにわさをいりぬちやうも
 んの人ともやうくゆきけるにも此女はういとゝなきまさりていそき出むもせずかへり
 見かちにてたちわつらふをみれいとしはたちいかり也かたちなどいときよけなるをけし

やうのみななみたにあらひれてあさからす思ひ入たるやうなりおほつかなさのあまりある人さしよりてそのゆへをどふ女のいふやう我の故僧正御はうの御あひれみをかうふりたる身にて侍るなりかくし申へき事にあらすわか身むかしすて子にて河原に侍りけるを故御房の御ありきのついでに御らんしつけてあひれみ給ひてなにかしといひし大童子におほせつけられてやしない給ひしあひたひとへに御いとおしみにて人となり侍るを十三と申しとし此やしなひおや夫妻どもにおなし時にあしきやまひをしてうせ侍りにしかり思ふかたなくてかれかたしき者のもとへたつねまかりてをのつからまよひ侍りしほどにさるへきにや侍りけん思ひかけぬゆかりにて一とせきさいのみやの御はした物にまいりて侍るなりたかき御かけにかくれて侍ればわひしき事も侍らねどちへは、世にや侍らん志り給ひすやしなひたてたりしおやのあどなくなりきた、ひとりとらうどにて心ほそくあひれなる身のありさまを思ふにも又ありかたく侍るなり人の身のはかなくてやみぬへかりける事ども思ひつけ侍るにもどにかくに故僧正御房の御あひれみのかたしけなさかた時忘るゝひまも侍らすあさことにかゝみのかけを見てもたれゆへ人となる身をも思ふおほふしきやうそくを給ひ身にとりてめんほくあるやうなるおりにもいつも御かたにむかひてなみたをおとしつゝ、こととふれてあひれにほうしかたくなん思ひ侍りしされともあやしくかたゝたよりあしきさまなれの申ひらくかたも侍らすすへて無縁の御あひれみよりおこりし事をよろこひ申さんにつけてもさすかに侍りあはれわか身おとこならましかりいかなるさまにて御あたり

にこそいつかうまつらめどかひなき女の身をうらみてむなしくすき侍りしかと世におひしましたほどの何となくたのもしく侍りきをのつから宮つかへせし時よりよそなからおかみたてまつれのいみしきよろこひをしたるやうにおほへてそれになくさみつゝまかりすきしをかくれ給へりとうけたまひりしかり世の中かきくらせる心ちしてかくしてなからふへしどもおほえ侍らす今日御はてどうけ給りつれの又いつかこれ程の御なこりをもうけ給らん今いけふにこそと思ひて宮つかへさしあふ日にて侍りつれとさりを申てなんあしたより此御あたりたゝすみ侍る今わさをいりてまかりいつるにすへてなみたにくれてかへるへきみちもおほえ侍らすといひもやらすよゝとなくこれをきく人あやしみてをひ出さんといひつる者までなみたをなかにあひれみけりもろゝの事めつらしくみちかきをさきとするならひなれの何わざに付てもさしあたりてきりやかなるおんなとかうふれるをこそ悦ぶめれかやうにおほそらなることを忘れす心にかくる事いど有かたかるへし誰も思ひある人も年月つもりゆけりすなちのやうにやあるされのかの村上御門の御服をきて一期つゝぬかてやみけん事などを哀にありかたき例にこそ云傳へ侍ぬれ志かるをはかなき女の心にさしもつきせす思ひしめたりけん情のふかき猶たぐひなく侍る

發心集第六

堀川院藏人所衆主上を志たひ奉り入海の事

ほりかんの院くらむにおいしましける時あめかしたおさまりて民やすく世のどかなりちか
くの後三條院の御時などをこそいみしきために申ぬるをこれの今すこしなさけふかくえ
んにやさしきかたさへすくれさせ給へりもろこしに天寶のためしをひき我國に延喜天
りやくのかしき御代にたちかへる事をそたかきもいやしきもよろこひけるその時身のい
やしなからくらんどとにさふらひてあさゆふつかうまつるおのこありけりをよぬ心
にも御ありさまをかきりなくめてたく思ひしめて何のわか身をたてん事までも思はずた
かゝる御代にむまれあひてみかきの内にあかしくらすことよろつのうれへもなくなくさみ
てこゝろはかりつかうまつれとわか身かすならぬのあらゐるゝたよりもなしかゝる程に無
常のかしきもをろかなるものかれぬならひなれいさかりなる花の雨風にまほみぬる心ち
していさゝか才ある人の身ひとつのなけきとかなしみあへるさまことりにも過たりけり
かのおとこかくれおのしましける日よりあるのあはるにもあらず夜のあけ日のくるゝわかち
も志らぬやうにてなんかよひけるつゐにかしらおろしてこゝかしこちやうもんなどしあり
きけれと物もいはすなす事もなくせみのもぬけのことくにていける物とも見えざりけりつ
ねにもろゝの佛神にかの御むまれとをを志めし給へどふたこゝろなくいのり申ける
ほどにとしへて後西のうみに大龍になりておのしますよしを夢に見たりけれいかきりなく

うれしくてたちまちにつくしのかたへ行て東風のはけしく吹たりける日舟にのりてをし出
にけり志はしの浪まによろこひつゝ見えけれとのちにゆくゑも志らすなりにけれのみる
人なみたをなかけてその比の世かたりになんしけるよろつの事心さしによることなれい身
をかへてかならずまいりあひてつかうまへりなんかし大かたほどにつけつゝまこと世に
い思はずなる事おほかり志たしきうときにもよらすかへりみのあるなしにもよらすかくは
しりつきたる物のいのちかりとし比ふかくあひたのみたる人の人よりもをろかなるため
しおほくきこゆるいさきの世のけちえんによるにこそ一たひいきかへりて見まほしき事
なり

母子三人の賢者衆罪を遁るゝ事

むかし男ありけりおのこ子二人もちたるにとりて兄いさきのつまのはらおとゝ今の妻の
はらになんありけるかゝれと兄のおのこまゝ母のため露もをろそかならずうせにし我は
ゝのこどくねんころにけうやうすれいはゝ又わか子に思ひおとせることなかりけり二人の
子やうゝひとゝ成て後父さきたちてやまひをうけて志なむとする時母にいふやうとし比
このあにのおのこをわかれみはくゝむ事のこと折ふしにみな思ひ志れりうしろめたなか
るへきならねど何事も跡の事を思ふになをかれかいとおしく覺ゆるなり我をふかく思ひゝ
わかかたみと思ひていとおしくせよとなくゝいひをきて志ぬそのゝち此ことをたかへす
やゝ弟にもまさりてなんわかれみけるかゝるほどにともにおとなになりて兄のおのこ妻を

まうけたりこのつまかたちよくて見る人おほく心をうかすその中にあさ夕おほやけにつかうまつりて身のはとよりしをくれる者ありけりおのか身君に志られまいらせたる事をたのむにやありけんよなくおとこにもいからすやもすれいあられてかよふをみるに此をどのおのこやすからすおくる後の事もおほえすはしり出てこれをころしつかくすですれど此事世にきこへてすなわちをどの男からめられぬ志する者の志たしきものどもはやくいのちをたゝるへきよしこはくうたへ申うへにも御とかめかるからさりけれいけいしうけたまひりてころさんとすその時兄のおのこすみ出て申やう弟の男のさらをの身のためにつかうまつりたる事にあらす我みなもとに侍へりはやく我つみをかうふるへしと申すをどのいふやう兄の女のねとこと申はかりにてこそ侍れさらにとがしたることなし我こそつみいかうふらめと申す兄弟かくのことくあらさふあひたに上にもはからひわつらひ給ひて一人をつみせらるへきにとりてかれらか申事ともみないはれなきにあらすさらは母をゆしてかれか申さんによるへしとさためられぬすなわちめし出して此ことをどはるゝに母といかり思ひわつらひてなみたをなかしつゝをどいつみせらるへきよしを申すその時檢非違使思ひの外におほえて故をどふ母の申やう兄のまゝ子なりをどのいふことの子なりまかあれといとけなく侍りしよりかれもまことのはとたのみ我も子に思ひをどす事なしはいはんや父まかりかくれし時ねんころに申をくこと侍りき其ことは心のそこにとゝまりてむかしを思ひ出ることたゝ今きくかことしたとひいくたりの我子をうしなふと

もかれをいたすけんと思ふすへてのちまかりかくれて後これらをひたりみきりにすへ兄をい父のかたみと思ひ弟をいわか身とたのみてもろもろのうれへをなくさめつゝ月日を過し侍りつるに今こゝに罪をかうふれりすなわち我身のむくひのつたなきといふきく人皆なみたをなかしてあわれむうたへ申つる者ども又これをあわれみあへり此事うへにきこしめして三人どもにやむことなきものなり罪をなためてゆるすへしとなんおほせられけるかの山蔭中納言のうへにいたとへもなかりけるはゝのころかなたゝしこれの晋の三賢といふ物かたりに似たりもし其事にや

西行か女子出家の事

西行はうし出家しける時あどをいをどゝなりける男にいひつけたりけるにいとけなき女子のことにかなしうしけるをさすかに見すてかたきかさまにせんとおもへともうしろやすかるへき人もおほへさりけれいなを此をどのぬしの子にしていとおしみすへきよし念頃にいひをきけりかくてこゝかしこ修行しありくほどにはかなくて二三年になりぬ事のためりありて京のかたへめぐり來りけるついでにありし此をどゝか家をすぎけるにきと思ひ出てさてもありし子の五つばかりにのなりぬらんいかさまにかおひなりたるらむとねほつかなくおほえてかくといいはねと門のほとりにて見いれるおりふし此むすめいとあやしけなるかたひらすかたにて下すの子どもにましりて土におりてたてじとみのきにてあそふかみのゆらくとかたのほとにおびてかたちもすくれたのもしきさまなるをそれよとみ

るにきとむねつぶれていとくちおしく見たてはほどに此子のわかたを見をこせていざな
んひしりのあるおそろしきにとて内へ入にけり此事思ひしと思へどさすかにこゝろにかゝ
りて日頃ふるほどにもしかやうの事をやまらきかれけん九條の民部卿の御女にれんせい殿
ときこえける人のは、にゆかりありて我子にしていとおしみせんとねんころにいはいれけれ
人からもいやしからすいとよき事とていそきわたしてけりはいのことくまたなき物にか
なしうせられければこゝろやすくてとし月を、くるあひたにこの子十五六はかりになりて
後此とり母のをとゝのむかへばらのひめ君にはりまの三位家明ときこえし人をむこにとら
れけるに若き女はうなとたつねもとむるにやかて此おね君も上らうにてひとつとこなる
へければたよりもあるへしおやなどもさるものなりとて此子をとり出てわらひなんせさせ
ける西行此ことをもれきゝてはいならず覺えけるにやこの家ちかくゆきてかたのらなる小
家にたち入て人をかたらひて忍びつゝなんよのせけるむすめいとあやしくのおほえけれと
ことさまをきくにわかおやこそひしりになりてありときゝしかさうたれたれか我をよひ
出むと思ふに日ころ見てやゝみなんと心うかりつるをもしさらはいみしからんとおほえて
やかてつかひにぐして人にもまられす出にけりかしこに行てみれいあやしけなる法師のや
せくろみたる麻のすみそめのころもけさなとまことにあのれにおほえてなみたくみつゝこ
まやかにうちとけかたらふ西行のありしつちあそひの時きと見しにあらぬ物におひまさり
ていとさよけなるをみるにもさこそ思ひすつる世なれとさすかにこれはかりをいえみすぐ

さす事のありさまなどきゝてむすめにいふやうとしころのゆくゑもまらすかたをたにけ
ふこそはしめて見るらめされともおやことなるいふかきちきりなり我申事きゝてんやたか
へらるましくいひんといへむすめのいふやうまことにおやにておはしまさひいかてか
たかへたてまつるへきといふまかあら申さんそのむまれおちしよりこゝろのかりいは
くゝみし事のおとなになりなん時の御門のきさきにもたてまつりもしのさるへき宮はらの
さふらへをもせさせんとこそ思ひしかかやうのつぎのところにもまかなひせさせてきかんと
い夢にも思ひよらさきたどひめてたきさいはひありとても世の中のかりなるさまとにか
くに心やすきこともなかむめるをあまになりて母かかたのらにゐてはどけのみやつかへう
ちしてこゝろにくゝてあれかしと思ふなりといふやゝ久しくうちあんしてうけ給りぬはか
らひ給ひせん事いかてかたかへたてまつらんさらはいつとさため給へその時いつくへもま
いりあひむといふわかきこゝろにありかたくもあるかなと返すゝよろこひてまかゝゝそ
の目めのどのもとへゆきあふへき事よくゝさためちきりてかへりぬ此事又ある人もなけ
れたれも思ひもよらぬほどにあすになりてこのかみをあらひゝやといふ冷泉殿のきゝて
ちかうあらひたる物をけしからすやなといはれければたゝことさらにいへは物まうてやう
の事なめりと思ひてあらひせつあくるあしたにいそきてめのどのもとへ行へき事のあると
いへん車などさたしてをくる今すてにくるまにのらんとする人の志はしどてかへりきて冷
泉殿にむかひてつくゝとかはうち見ていふこともなくてたちかへりて車にのりていぬあ

やしくおほゆれとかゝる事あるへしどのいかにてかゝらんかくてひさしくかへらぬおほつ
 ことなくたつねけるを志はしのかくいひやりけれと日比ふれのかくれなくきこえぬれん
 せいどのの五つよりひとへにわか子のやうにしてかた時かたのらはなる、ことなくてなら
 しはく、みたてたるうちにもおとなひゆくまゝに心はへもはかくしうことにふれてあり
 かたきさまなりけれのふかくあひたのみて過けるにかく思はずにてなかくわかぬれらう
 らめしかりける心つよさかなたけき者のすちといふもの女子まてうたてゆゝしき物なりけ
 りといひつゝけてうらみなかれけるたゝしすこしつみゆるさるゝ事とていすてにくるまに
 のりし時又見ましきをかしとさすかに心ほそくこそ思ひけめさせるいふへき事もなきに志
 はしたちかへりて我がほをつくゝとまもりて出にしはかりそうらめしき中にいさゝかあ
 りねなるとそいはれけるさてゝ此むすめあまになりてかうやのふもとに天野といふとこ
 ろにさきたちて母かあまになりてゐたるところにゆきておなし心におこなひてなん有ける
 いみしかりける心なるそかしかのやしなひ母の冷泉殿ものちにいたうとくおこなひてもと
 よりゑかく人なりけれの日々の所作にて丈六の阿彌陀佛をかきたてまつられけるかをり
 ける時にそのほとけの御かたちをあらわされて見え給ひけるとそ

侍従大納言幼少の時驗者の改請を止る事

侍従大納言成通卿そのかみ九さいにてわらのやみし給ひけりとしころいのりけるなにかし
 僧都とかやいふ人をよびて祈らせけれとかひなくおこりけれの父の民部卿ことになけき給

ひてかたのらにそひゐて見あつかひ給ふあひたには、君といひあひせつゝさりとていかゝ
 いせん此たひのこと僧をこそよはめいづれかよかるへきなどのたまひけるを此ちこふしな
 からきゝて民部卿にきこえ給ふなをこのたひの僧都をよひ給へかしと思ふなり其故のめ
 のとなどの申すをきけりまた腹の内なりける時より此人をいのりの師とたのみてむまれて
 今九つになるまで事ゆへなくて侍るのひとへにかの人のとくなりそれ今日此やまひによ
 りてくちおしく思はん事いとふひんに侍る也もしこと僧をよひたまひたらたどひおちた
 りともなをほいにあらすいはんやかならずおちむこともかたしさとともこれにて志ぬるほ
 どの事はよも侍らし我をおほさいいくたひもなを此人をよひ給へつゝおにのさりとともやみな
 んどくるしけなるをためらひつゝきこえ給ふに民部卿もは、うへもなみたをなかしつゝあ
 はれに思ひよせたりおさなきおもひばかりにのをとりてけりとて又のあたり日僧都をよひ
 てありのまゝに此次策をかたり給ふかくし奉るへき事に侍らす御ことをろかに思ふに
 あらねどもかれかなやみわつらひ侍るけしきをみるに心もほれておほされんことも志らす
 志かゝの事をうちゝに申すをちりて此おさなき者のかく申給るなりとなみたをゝしの
 こひつゝかたり給ふに僧都をろかにおほされんやのその日ことに信をいたしてなくゝい
 のり給ひけれいきのやかにおち給ひにけり此君のおさなくよりかゝる心をもち給ひて君に
 つからまつり人に交るにつけてもことにふれつゝなさけふかくゆうなる名をとめ給へるな
 りすへていみしきすき人にて世の濁に心をそめす妹せの間に愛執あさき人也けれの後世も

罪淺くこそ見えけれ

永秀法師數寄の事

八幡別當頼清か遠類にて永秀法師と云者ありけり家まつしくてこゝろすけりけるかよるひる笛をふくより外の事なしかしかましさにてたへすとなり家やうくたちざりて後には人もなくなりけれとさらにてたますこそまつしけれとおちふれたるふるまひなどいせさりけれいさすかに人いやしむへき事なし頼清き、あわれみてつかひやりてなとかの何事もたまいせぬかやうに侍れいさらぬ人たにことにてふれてさのみこそ申うけ給ひる事にて侍れうとくおほすへからすたよりあらむ事のは、からすの給ひせよといはせたりけれ返すくかしてまじり侍りとしこも申さいやと思ひながら身のあやしさにかつのおそれかつのは、かりてまかりすき侍るなりふかくのをみ申へき事侍りすみやかにまじりて申侍るへしといふ何事にかよしなきなさをかけてうるさき事やいひかけられんと思へとかの身のほどにいいかはかりの事かあらんと思ひあなつりて過すほどにあるかた夕ぐれに出きたれりすなわち出あひて何事になどいふあさからぬ所望侍るを思ひ給へてまかり過侍りし程に一日のおほせをよろこひてさうなくまじりて侍るといふうたかひなく所知などのそむへきなめりと思ひてこれをたつぬれ、筑紫に御領おほく侍れいかんちくの笛のことよろしく侍らんひとつめして給ひらむこれ身にとりてきいまれるのをみにて侍れとあやしの身にいえかたき物にてとし比えまうけ侍らすといふ思ひの外にいとあはれにおほえていとくやすき

事にこそすみやかにたつねてたてまつるへしそのほか御ようならん事の侍らすや月日を、くり給ふらんことも心にくからすこそ侍るにさやうの事もなかのうけ給ひらざらんといへん御心さしのかしてまじり侍りされとそれの事かけ侍らす二三月にかくかたひらとつまうけつれの十月までいさらのそむところなし又朝夕の事のつからあるにまかせつゝ、とてもかくてもすき侍るといふけにすき物にこそとあわれにありかたくおほえて笛いそきたつねつゝをくりけり又さこそいへど月この用意などまめやかなる事ともあわれみさたしけれいそれかあるかきりの八幡の樂人よびあつめてこれに酒まうけて日くらし樂をすうすれい又た、一人笛ふきてそあかしくらしける後にい笛のこうつもりてならひなき上手になりけりかやうならん心の何につけてか、いふかきつみも侍らん

時光茂光數寄天聽に及ぶ事

中比市正時光といふ笙吹ありけり茂光と云ひちりきしと圍碁をうちておなし聲に装頭樂を唱歌にしけるかおもしろくおほえけるほどに内よりとみの事にて時光をめしけり御つかひいたりて此よしをいふにいかにもみ、にもき、入ず只もろともにゆるきあひてともかくも申さ、りけれい御つかひかへりまじりて此よしをありのまゝにそうもんすいかなる御いましめかあらむと思ふほどにいとあわれなる者ともかなさほどに樂にめて、何事もわするはかり思ふらんこそいとやむことなけれ王位にくちおしき物なりけり行てもえきかぬ事となみたくみ給へりけれい思ひのほかになむありけるこれらを思へい此世の事おもひすてん

事もすきのことたよりとなりぬへし

寶日上人和歌を詠して行とする事

中頃寶日といふひしりありけり何ことをかつとむると人とひけれの三時のおこなひつから
まつるといふかさねていつれの行法をどとふにこたへていふやうあかつきに

あけぬなり賀茂の河原にちどりなくけふもむなしくくれんとすらん 日中に

けふも又むまのかひこそふきにけれひつしのあゆみちかつきぬらん くれに

山里の夕くれのかねのこゑにけふもくれぬときくそかなしき此三しゆのうたををの
く時をたかへす詠して日々に過ゆく事を觀し侍るなりとそいひけるいとめつらしきおこ
なひなれと人のこゝろのすゝむかたさまゝなれつとめも又一すちならず潤州の曇融ひ
しりの橋をわたして淨土のこうとし蒲州の明康法師の船にさはさしてわらしやうをとけた
りいはんや和歌のよくことなりをきひむるみちなれのこれによせて心すまし世のつねなき
を觀せんわさともたよりありぬへしかの惠心のそうつ和歌の綺語のあやまりとてよみ給
いさりけるをあさはらけにはるゝと水うみをなかめ給ひける時かすみわたれる浪の上に
船のかよひけるを見て何にたとへんあさはらけと云うたを思ひ出ておりふし心にそみ物あ
はれにおほされけるよりしやうげうと和歌といはやくひとつ也けりとてそのちなんさる
へきおりゝかならず詠し給ひける又ちかく蓮如といひしり亭子くうこくうの御
うた

夜もすからちきりしことをわすれすのこひんなみたのいろをゆかしきと侍るのかくれ給
ひける時御門に御らんせさせんためとおほしくてちやうのかたひらのひもにむすひ給ひた
りけるうたなりこれを思ひ出てかきりなくあはれにおほえけれのこゝろにそみつゝ此うた
を詠していなくゝせんせうたらにをよみてを後世をとむらふ又なかめていさきのことく
誦すかくしつゝよもすからまどろますして冬の夜ををあかしたりけるいみじきすき物なり
かし大貳資通の琵琶の上手なり信明さねあきら大なこんのふの師なりかの人さらによのつねの後
世のつとめをせすたゝ日ことにおふつだうに入てかすをとらせつゝびわのきよくをひきて
を極らくにえかうしけるつとめいこうと心さしとよるわさなれいかならずしもこれをあ
たなりと思ふへきに非す中にもすきといふ人のましりをこのます身のまづめるをもう
れへす花のさきちるをあはれみ月の出入を思ふにつけてつねにこゝろをすまして世のこ
りにままぬを事とすれいのつから生滅のことはりもあらわれみやうりのよまうつきぬへ
しこれまゆつりげだつのかどでに侍るへし保元のころ世に事ありて崇徳院さぬきにうつ
ろはせ給ひにける後たびの御すまひあはれにかたしけなき事いひつくすへからす國のつは
ものともあさ夕御所をうちかこみてたやすく人もまいりかよはぬよしきこゆれいかの蓮如
と云すきひしりもとよりなさけふかき心にていとかなしくおほえけれと人つかはすことも
なかりけりたゝいもうとなる人のさふらひけるゆかりに御あたりの事をもきゝ又むかし陪
從にて公事つとめける時御かくらなどのついでにまれにけんさんに入はかりなれいさしも

ふかくなけくへきにしもあらねどわさとた、一人みつから笈かけてさぬきへくたりけりゆきつきて見れり御所のありさまめもあてられすつたへき、つるよりもけなりされとせちに内へいらんと思ふ心さしふかくてさるへきひまやあるとひめもすにうか、ひけれとまもり奉るものいとはしたなくとかめて人かくるへくもあらすむなしく日もくれにけれり月のあか、りけるに笛をふきてなん御所をめぐりありきけるいかさまにせんとおもふほどにや、あかつきにをよひてくろばみたるすいかんはかりうちかけたる人うちより出たりいとうれしくて此たよりに御所の中に入れてみれり草まけり露ふかくてこと更人のをもせすいみしう物かなしきにはかりたちわつらひて板のはしにかきてけんさんにいれよとてありつる人になんぞらせける

朝くらや木の丸のに入なから君にまられてかへるかなしさ此おのこほともなくかへりきてこれを奉れど侍るといふをとりて月の影にみれば

あさくらやた、いたつらにかへすにもつりするあまのねをのみそなくとそか、れたりけるいとかしこく覺えてこれを笈の中にいれつ、なくく、かへりのほりにけり

室の泊の遊君鄭曲を吟して上人に結縁する事

中ころ少將ひしりといふ人ありけり事のたよりありてはりまのくにむろといふところにとまりたりける夜月くまなくていとおもしろかりけるに遊君我もく、とうたひゆきちかうあわれなるもの、さまかなどみる程に遊女の舟このひしりの、りたる舟をさしてこきよせけ

れのかんどりやうの者いなやこれの僧の御舟なり思ひたかへ給へるかど事の外にいふさみたててまつる何とてかひさるひかめりみる物かといひてつ、みうちて

くらきよりくらき道にそ入ぬへきはるかにてらせ山のはの月と此うたを二三返ばかりうたひてかゝるつみふかき身とされるもさるへきむくひ侍るへしこの世の夢にてやみなんとすかならすくひ給ひなんこゝろはかりえんをむすひたてまつるなりといひてこきはなれにけり思ひすあはれにおほえてなみたをおとしたりと後に人にかたりけり

乞者の尼單衣を得て寺に奉加する事

あるなま宮つかへ人の清水にこもりたりけるつほねのまへにいろまらばみされはれたる老尼のかけのことくやせをとろへたる物をこひありくありけり十月はかりにきたなけなるやふれかたひら一つきてうへにみのをきたりけりみる人あないみしのみさまや雨もふらぬになど箆をきたるそとふこれより外にもちたる物なけれりさむさのさむしすちなくてなとこたふるをあた、まりあるへしとこそおほえねとてわらひけりくた物などくいせたれりうちくひてたちけるをいか、思ひけんよひかへしてひとへをなん一つをし出したるよろこひてとりていぬと思ほどにおなし寺にほうがす、むるところにゆきてす、りこひていとうつくしき手にて此うたをかきつけつ、ひとへを、きていつちともなくかくれにけり

郁芳門院の侍郎武藏野にすむ事

西行法師あつまのかた修行しける時月の夜むさし野をすくる事ありけり比は八月十日あま
 りなればひるのやうなるに花のいろく露をおひむしのこゑく風にたくひつこゑも
 およはすはるくと野中に經のこゑきこゆいとあやしくきくにおどろかれてこゑをたつね
 て行てみれいわつかに一間はかりなるいはりあり萩をみなへしをかこひにしてすきかる
 かや萩などをとりませつうへにひふけりその中にどしたけたるかれこゑにてほけきやう
 をつりよむいとめつらかにおほえていかなる人のかくていとひけれの我のむかし郁芳
 門院の侍のおさなりしかかくれさせおのしまし後やかてさまをかへて人にあられさらん
 どころにすまむ心さしふかくていつちともなくさすらへありき侍りしほとにさるへきにや
 ありけん此花のいろくをよすかにて野中にどまり住てをのつからおほくのとしををくり
 もどより秋の草をころにそめし身なれの花なき時そのあどを志のひ此ころの色にこ
 ろをなくさめつうれのしき事侍らすといふこれをきくにありかたくわれにおほえてな
 みたをおとしてさまくかたらふさてもいかにしてか月日をくり給うとへおほろけ
 にて里などにまかり出る事もなしをのつから人のあはれみをまちて侍れの四五日むなしき
 時もあり大かたの此花の中にてけふりたてん事もほいならぬやうにおほえてつねにのあさ
 ゆふのさまならずとそかたりけるいかにころすみけるそらやましくなん

上東門院の女房深山にすむ事

あるひしりみやこほとりをいとふ心ふかくてすみぬへき所やあるとたつねありきけるほど

に北丹波といふかき谷にいたりてあどたえたる太山のおくのかたに河よりきり花のから
 のなかれ出たるありいとあやしくていかなる人のいかにあてすむらんどおほつかなさにた
 つねつはるかにわけ入てみれのかたのやうなる柴のいはりの軒をならへて二つありいと
 めつらかにおほえてちかくあゆみよるほどに窓よりそのかたちともなくくろみをとろへた
 る人わつかにさし出て人のけしきを見て引入ぬあはれさ申し物を花からを谷にちらし給ひ
 てといふをきけいをんなこゑなりにこれるすゑの世にもかゝるすまひする人のある物か
 どありかたにおほゆるにもまつなみたおちていかなる人のかくていおのしますを身にたへ
 たるわれらたになをえおもひとり侍らぬをいとけうの御心さしなりやとさまくかた
 らへとふつといらへもせず其時いたう恨みて我身の志かくの者に侍りほたいをんをおこ
 して世をのかれ身をすて山林にまどひありき侍れば心おなしきゆへにことに隨喜したて
 まつるうちにも女の身に事ふれてさばりありかくおほし立けんことのかへすもあ
 はれにたくひなくおほえて侍りかつこのまかにうけ給ひりてわかこゑをもはけまし侍ら
 んと思ふなりふかくへたて給へはいとほいならずなんとこまかにうちくときうらむれいと
 はかりためらひていふやうかくし申さんとも思ひ侍らすとしころこにすみ侍れといまた
 かくたつね來る人もなきをおもひかけすきたり給へれいなく心さはきて御いらへも
 どこほり侍るはかり也われらかありさま申侍らんむかしはたちはかりの時ふたりおなし
 やうにて上東門院につかうまつりて侍りしか世のありさまうつりゆくをみるにもたかきい

やしきかたのしよりかくれ行すへて此世に心もとまらずされのことに優なりしところの
 ならひに色ふかき心とて事にふれつゝ身もくるしくつみのつもらんこともおそろしく侍り
 しかいふたり申あはせて行衛も志らすはしりかくれにきそのうちこゝかしこにへつらひ侍
 りしかと人のあたり何事につけてもすみなく、心になはぬ事のみ侍りしより思ひかけ
 ぬこゝに跡をとめてをのつからおほくのとし月をへたり北のちりはのいろつくを見て春
 秋のへぬることをかそふれの四十餘年になむなりぬるすみそめ侍りし比はあらしもはけし
 くはかなき鳥けた物のはけしきまても氣うときこゝちしてことゝたへ志のふへくもあら
 ざりしかと今の住なれてたまさかにたち出たる時もこゝをすみかといそきかへりまうてく
 れいさるへかりける事とあはれに侍るなりなにとならはせる事にかいける數とて雲風に身
 をまかせてもえなけれひひとりゝかはりて十五日つゝ里に出ていま一人をやしなふわさ
 をなんし侍りこのならへる庵のうちさまをわけてわつかにとふらひ侍るをたよりにてた
 んあけくれの念佛侍るなりとまめやかしくあてなる氣はひにてかたるましきをもおほえ
 す袖をまはりつゝ一佛淨土の契りをむすひてかへりぬ又そのうちあさのころもときれうな
 どよいいして尋ねゆきたりけれひほりのあどのさなから行かたも志らすかくれにけり人
 のこゝろおなしからぬおこなひさまゝなれと女の身にてかゝるすまぬ思ひたちけ
 んおほろけの道心にあらざるへし今此事をおもふにけからはしくあたる身を山林のあ
 ひたにやどしいのちをほどけにまかせてまつりてしやうゝふたいの身をえんこといけ

に心からによるへき行なりまつかに過ぬる事を思へりんるしやうしのありさまかきりも
 なしほどりもなし一人か一こうをふるあひたに身をすてたるかはねもしくちすしてつもら
 ひ毗留羅の山のことくならんといへり一こうなをかくのことしいんやむりやうこうをや
 其ほどもろゝのうじやうひとつとしてうけざる身なく苦といひ樂といひ事としてへざる
 事なしさため佛の出世にもあひばさつつけうけにもあつかりけん志かあれとたのしみを
 うけたる時のたのしみにふけりてわすれくるしみにあへる時にくるしみをうれへてをこ
 たりし故に今なをばんふのつたなき身としてまゆつりの期を志らざるなり過去のをろかな
 る事を思ふにみらいも又かくのことくこそ大かた諸佛はさつと申も本のみな凡夫なりわれ
 らかち、はゝともなりさいしけんそくともたかひになりたまひけんされとかれのかしこく
 つとめおこなひてすてに三かひを出給へり我らの信なく行なかりしかの志やうじのすもり
 としてむかしのけちえんのゆへにわつかに御名をきゝちかひをあふくことをえたり今さい
 はひにかたならへたる人のつとめおこなひて生死をはなれんにも又をくれなんとすをも
 ゝほどけになる事いまやくそんのわうごをきけの三そうぎ百大こうかあひたあるひむ
 りやうあそらうごをますゝ行し給ふともとけりその時節のはるかなるのみにあらず
 むび大わうとして鳩にかいりさつたわうじとして虎に身をなぐかくのことくなんぎや
 うくぎやうして佛身を得給へり行をしていつれのところをねかふへしと思ふに過去をへて
 すぎにし天上のたのしみ何にかいせんたしやうをへたつれいどをきえんを期するにあちき

なした、此たひいかにもして不退の土にいたりてやうくす、みてつゝるにばたいにいたらん事をはげむへきなり志かるをかの極らくせかいねかひ、むまれぬへしそのゆへの本願に云く我はどけをえたらんに十方のまゆじやう心をいたして信樂してわか國にむまれんとねかひてないし十念せんにむまれずといひ、正覺をとらじとちかひ給へり下ばん下しやうの人をどくに四ぢう五ぎやくをつくるあく人なれともいのちをのり時善知識のすゝめにあひて十たひ南無阿彌陀佛と申せの猛火たちまちにきえてはちすのうてなにのほるとどけりあるひの極重悪人無他方便唯稱彌陀得生彼國ともいひ又若有重業障無生淨土因乘彌陀願力必生安樂國とも其佛本願力聞名欲往生皆悉到彼國自致不退轉ともどけりこれらの説のこどくいわれらるらいまやうじのつたなきはんなりたちまちにふたいのじやうとにむまれかたしとひげすべからすまやはとくらくとえんふかく彌陀とわれらと契りひさしきかゆへにはどけのふしきじんづうはうべんをもてくうこの勤修を一日七日の行につゝめ六度萬行を一念十念のせうみやうにかうふらしめてはやくふたいにいたりやすくすみやかにほたいをうへきみちを、しへ給へりまことに多百千劫のくぎやうはどけの御ために何かせんたゝまはらくの念佛のみをそのほんぐんにかなへるわれはどけを念すれはどけ我をてらし給ふはどけ我をてらし給へりもろくのつみことくくせうめつしてわうしやうする事うたかひすかの聖相をみぬあくこうのまなこのどがなり大悲をむく事なしめつざいうたかふへからすまかれのみつからかはげみにいかたかるへけれはどけのふしきの

願力にせうずるかゆへにすみやかにいたることをうるなりこれ十住毘婆娑論にいへる陸地と船路とのたとへのことしいかにいはんやまゆくせんすであらわれてあひかたき佛法にあへりうえんのひぐんをきくに又機感のいたれる事をまじり又つみふかけれといまた五ぎやくをつくらずまんあさけれとたれか十念をとなへさらん時のこれ彌陀りもつのさかりところのまた大せうるふの國なりさかしをろかなるをいはす道俗をえらひすぎいはうをほとこせよともどかす身命をなけよともものたまはすたゝねんころに彌陀のひぐんをたのみ口にみやうかうをどなへ心にわうじやうをねかふ事ふかくの十人なからかならず極樂にむまへきなりそれもろくの道理をまもりてせひすともうえんのわれらかためにおこし給へる大ひのべちくのむなれ法の相にもたかひ因果のことほりにもそむけり思ひの外よろこひなるへしあふきてまんせすいあるへからす經にどけるかどくのわれら彌陀佛を念してはどけのくいんりにきにせうしてかならず極樂に生るへきことを六方恒沙のもろくのほとけまをのへて三千かいにおほひてこれまことなりと證明し給ふはどけとほとけとい何のおほつかなき事かのおほしますたゝわれらかうたかひをたゝんかためを侍らめ凡夫のならひ我も人も此世の事にのみうつりてさらにいとふ事なく身の世のちりにのみちやくしてもろくのつみをつくりて彌陀のちかひのありかたく極らくのまうてやすき事をきけとも信するともなしうたかふともなしみゝにもいらすころにもをますねかふ心なけれは又つとむる事もなし一期夢のことくにすぎない三途まなこのまへにきたるへしされの四十八

願莊嚴淨土華池寶閣易往無人とも侍るにこそすへていきとしける物の中に人のさとりこ
 とにすぐれそらをかけるつばさ海にすむうろくすこれをうるにかたからす水をきりうみを
 わたるけた物をたかへて家にゆゝ蚕をかひてきぬをりまかねをときてうつは物をいる
 まてもことにふれ物にたかひていつれか凡夫の志わさとおほゆる志かあれとめのまへに
 無常を見ながら日々死期のちかつく事をおそれぬ事、智者もなし賢人もなしおひか死す
 るのみにあらずわかきも又志すけふ人のうへあすの身のうへなる無常をさとりぬ此ふ
 かきむみやうの酒にゑひちやうやのやみにまよへるなりはやく此ことりをときてあたな
 るのこりの命をたのますはなれやすきをんわいのきつなにつなかれすして此たひ頭燃をは
 らふかことく喉のかはけるに水をのむかことくにねかふへし手をむなくしてかへる事な
 かれたし諸行の志ゆくまうによりてすゝむみつからつとめて執して他の行ををしるへか
 らす一華一香一文一句みな西方にゑかうせのおなしく往生のこうとなるへし水のみぞをた
 つねてなかるさらに草の露木の志るをきらふ事なし善の心に志たかひておもむくいつれの
 行か廣大の願海にいらさらんや

惠心僧都空也上人に謁する事

惠心僧都そのかみ空也上人見奉らんとてたつねきたり給へることありとしたりとくたかく
 してたゝ人ともおほえすいとたうとく見え給けれの後生の事申出し極樂をねかふ心ふかく
 侍り往生のとけ侍りなんやとたつね給けれの我のむちの者也いかてさやうの事をことばり

侍らんとし智者の申侍りしことをきゝてこれをあんするになどかの生せさらん其故の人
 六行觀を修して上界の定をえむと思時下地の魚也苦なり障なり上地の静なり妙なり離なり
 といふ事を信して下地のいやしきさまをいと上地の妙なる事をねかへその觀念のちか
 らにて次第にすゝみて悲想非々想まていたるへしといへり志かれの西方の行人も又おなし
 事なりちゑぎやうとくなくとも穢土をいとひ淨土をねかふ心さしふかくのなとか往生をど
 げさらんとたたまひけれの僧都これをきゝてまことにはりきはまり侍りて涙をなか
 したなこゝろを合せて歸給ひにけりさて往生要集を撰じ給ひけるに其事を思ひて厭離穢土
 欣求淨土を先とし給ひけるとかや

發心集第七

空也上人衣をぬきて松尾大明神に奉る事

空也上人雲林院にすみ給ひける比七月はかりに京になすへき事ありてあさかけに大宮おふ
 ちをみなみさまへおはしけるにおほがきのほとりに例人との覺えぬ人のさしあへりけるか
 いみしく寒をうらみたるけしきにて見えけれの上人あやしくてたちとまりていかなる人に
 てましませのかくあつきほどにさむげにおはするを問給ふ此人のたまふやう空也上人と
 の御ことを申にや日ころよりあひたてまつりてうれへ申さんと思ひつるにいどうれしく侍

りをのれの松尾の大明神なりまうざうてんだうのあらしはげしくあくごうぼんなふの霜あつく侍るあひたかくさむくたへかたきなりもし法花のほつせをえせしめ給ひんやとの給ふひしりいとかたしけなくあわれにおほえてうけたまひ侍りぬたし社にまうてはうせし奉らん此をのれかまたにきて侍る小袖の此四十一年おきふしたちるほけきやうをよみまめて侍る衣なりあかづきていとかたしけなき事には侍へれとこれをたてまつらんと申給ひけれのよろこひてき給ひて今のこの法花のころもをきていとあたゝかに成たりこれより後いぶつたうなり給ひんまてまもりたてまつらんとてひしりをふしおかみてさり給ひぬこれ大通智勝佛のすいしやくにておのしますすへし國をたすけ佛法をまもらんかためにあどをたれ給への上人のとくをたうとみて法施をうけ給ふまかるにふるき小袖をたてまつり給ひける心のたけこそなをありかたく侍へれをもく天慶よりさきの日本に念佛の行まれなりけるかこのひしりのすゝめによりて人こそりて念佛を申事になれりつねにあみたをとなへてありき給ひけれの世の人これをあみたひしりといふある時の市の中に住してもろくの佛事をすゝめ給ふによりて市のひしりともきこゆすへてはしなきところに橋をわたし井なくして水ともしき郷の井をほり給ひにけりこれをわか國の念佛のそしと申へしすなひちほけきやうと念佛とを極樂の業として往生をとけ給へるよし見えたり

中將雅通法華經をたもちて往生の事

中ころ左中將まさみちといふ人ありけりこゝろうるのしくてわかきよりほけきやうをよ

みたてまつりけりとに提婆品をまんとして毎日十廿へんこれをよむまかれとも世につかへ人にましいるあひた心ならずかりすなとりしもろくのあくこうをつくりつねのかの淨心信敬不生疑惑者のもんを口つけことくさとせりいのちをゆる時おなしく此文をとなへさまさまのすいさをあらわしてわらしやううたかひなきよしひろうしけり道雅朝臣さらに此とをもちひす殺生をこのみ世路をわしりつる人いかゝわらしやうせんといふほどにとしへて後六はらみつ寺へまいりてまのひてちやうもんするあひたに車のまへに一人の尼ありてをのかどちかたりていはくとし比往生をねかへとも身まつしくして善根をなすちからなしあさ夕これをなけくほとにすぎぬる夜の夢にみるやう一人の僧ありてつけていはくなんちなけく事なかれ只心うるのしくして念佛する者かならずこゝろくにむまるゝなりちかくの中將雅通朝臣心うるのしくしてほけきやうをたもつかゆへにその外のせんこんなけれどもすてにわらまやうをとけたりと語る道雅つふさにこれをきゝてそのち信したりけりたゝいつれの行なりともこゝろうるのしくしてそのうへに願をおこしこうをつむへきにこそある傳記に云もろこしに并州といふ國ありかの國の人七八さいより道心ありて念佛を申ておほくこくらくにむまる其中に僧延法師といふ者ありこれか思ふやうかならずしも念佛してのみやのこくらくにむまるへき千部の經をよむ百部になる夜の夢にわか左右のわきより羽のおひいてとびぬへくおほえけれのあやしくてこれをみるにはほけきやうのもじのとくくつはさにおひたるなりけれのあわれにたうとく覺えて心にこくらくへとひまいらんと思

ふに西をさしてとひゆくほどにすなひち思ひのことくまいりつきぬ七ちうほうじゆのもと
にとひおりたるあひた此はねにおひたる字六萬九千餘の佛になり給ひてみなことくくひ
かりをはなちて阿彌陀佛をぬえうしてなみぬ給へりこれを見たてまつるにいよくたうと
くかたしけなくおほえてなみたをなかつ事かきりなしあみた佛のたまふやう此佛たちのみ
ななんちかよみ奉るほけきやうの文字にておひしますまかるをなんち極らくをぬかふま
はにかへりて千部の願をはたしてもろくの衆生をいしへて此經をたもたしめよとのたま
ふこれをうけ給りてかへらんとする時又此おほくのほどけかへりてもどのことくつはさど
なり給ひぬとふことさきのことし僧延ゆめさめてなみたおさへかたくして五たいを地にな
けて夢中に見たてまつるほどけたちをおかみふかき心をおこして此經をよみたてまつると
なん又云もろこしに惠超禪師といふ人ありほけきやうに心さしふかくしてとし比よみたて
まつるほどにや、こつもりて後いつくよりきたるともなく小法師ひとり出つかひれけり
此小ほうし心かしくさとりありていまたいはさることをもまろ思ふこゝろをもをしはか
るもろくの事にちからたへてこれをつかふにいさ、かも心にたかふことなかりけれり又
なき物に思ひてすきけるほどに此惠超事のためによりに眞言のをしへすくれたる事をき、て思
やうほけきやうの八巻をよみたてまつるもわつらひしきに眞言のもしのすくなく義理の
まろくなれいよみやすくしてとくよくすくれ給へりと思ひてほけき經をおさめてひた
すら眞言をならひて胎藏界をおこなふ其時に日比つかへつる小ほうしかきけつやうにうせ

ぬいたらぬくまなくたつねもとむれともさらにはゆきかたをあらす惠超これなけきて寝た
りける夜の夢にかの小ほうしきたりていはく我まことに地さうほさつなり汝ほけきやう
にこうをいれたる事たうとおほえて日ころつかへつれとも今のその心さしをあらためて
眞言をならふ事ほいなければなりぬるなりとのたまふとなん見たりけるこれかならずまろ
こんのをろかなるにあらすかつのかうをいれたる行をすてたるあやまりをとかめ給へる
なりをもく、釋尊の一期のけえんつきて涅槃に入給ひしか此きやう生身にかはりてあまね
く衆生をとし給ふ我のまよひもたえずさとりもなきはくちのぼんふとしてむりやうこうに
名をたにきかぬびやうどう大忍の教門にあへる、又他の事にあらす釋尊むえんの大悲無作
の勢い、くんにによりて我らか道心すくなしといへとも岩にも木にもあらずいかて此廣大の
をんどくをほうじたてまつらんと、此經一文一句をもじゆちとくしゆしてこれをもつて佛
恩をほうせんとすへしその故のほどけの三かいとくそんとしてまさいじんづうをえ給へり
何物かともしき何事か御こゝろにかなひさらんた、我らか生死のうみのそこにまつみうか
ふ世もなきを一子の御あはれにうむことなくてかなしみ給はかり也まことにねんころなる
御歎きにてこそ侍らめか、れの衆生一人かどくたうする事、くうこうたしやうの御大事
はうくのほうへんをめぐらしまゆくの身をげんしてえんをむすいんとつきせすかまへ
いとなみ給ふなるへしまかるを此經のほつしほんに一偈一句なりともよみたもちかきくや
うし奉らん人のみなほとけになるへしとまゆきし給へり又やくざんぢしやがそくくいん

ぎなどいもとき給へりこれをきけりわか身のためたのもしきのみならずほとけの御心をよ
ろこいしめたてまつらん事いみしきようにて侍るなり孝經といふ文に人の子のくせかた
いなくてむまれたるの孝のはしめなりといへりむまるゝ子のこゝろよりおこらぬ事なれど
も父母をよるこはしむるのけうやうにて侍るなりまかれの淨財をなげてくやうしたてまつ
らぬこそまつしくていちから及はずともいはめかくひろまり給經たもち奉らんかたかるへ
き事かゝ全部つうりし文々げしやくせよともかずぞんらんむちなりともひげすへからす
世に師おほけれの千ざいつかうるわつらひもあるまし五しゆの行まぢくなり行もこのみ
にあたかひてもしの一偈一句なりともえんをむすひ奉らん事いさすかに易行をかしたれど
ならひよまねのよまでそある一偈をたもちたてまつる人のこれすなはち信心のすくなくて
佛説をうたかひ見聞のふかくてみせうの行と人めをはつるなるへしこれきはめてをろかな
ることなりたゝ一文一句なりともかはけるに水をのむかごとくあひかたき思ひをなして縁
をむすひたてまつるへしちかきころの事にやある智者のおちふれて子などあまたもちたる
有けり兒むまれて物いふほどになりぬれいさたまれる事にてかならずほけきやうの首題の
字を教へてかたのやうなれどこれをとなへさす四つ五つにもなりぬればたふるにまたかひ
て一品一卷までも一句つゝ口まねをしてよませけり人そのゆへをどひけれの此經のほとけ
出世の本懐なり此子とも若いのちみしかくていとけなくて志する事もあらは何をか人か
いにむまれたる志るしとせんまことにたからの山に入てむなしく出るかことしかゝれい

そきえんをむすひするなりとをいひける大かたさるへき見物などの時見てもさうあへす人
のあつまれるをみる時の人界のむまれかたき事もおほえねとまことに又戒全たもちてむ
まるといへいとかたかるへき事にこそあれ今の世の人をみれの一戒なをたもちかたしい
はんや又五戒をやたゝあさ夕三惡道のこうをのみつくるかゝれとさすか人のたねもたえぬ
事いたゝ此經のひろまれる故なりほうたう品に此經難持若暫持者乃至是名持戒と云々此心
の志はしもこの經をたもつ者の破戒なれど持戒なりといふなりまことにたのもしき事なり
たゝし若志はらくも信心ふかくてたもつへくのれもかたくや思ふへきにおなし文のつゝ
きには則勇猛是則精進とあれのこゝろゆるくけだいならん人のためにとかれたる文と見え
たりすへてのこりふかきすゑの世に此經をさなからつうりする人のおほろけの志ゆくせ
んとのおほえす現身にその證をもへりんじうにずいさうもあらはるへけれともかならずし
もまからす此世にの持經者のおほくてその行儀とゝのりかたし又ことなる志るしもなし
人の志んをおこさぬもこれよりおこる事なり實いとあやしきをよく思へる世々にちぢした
てまつるちからにてむちもんまうなる人もをのつから通利す生々にみやうりのためにして
まことの心をおこさゝるゆへしやうしにもとゝまりその威儀もかけたるなめりとのみおほ
え侍るさりとてゆめくこれをかろしむへからす金の藁につゝめりとてもあたひすくなか
らすいはんや過去のけちえんと盡未來のどくだうもつてかゝるへき故なり

賀茂の女常住佛性の四字を持て往生の事

中ころ賀茂女といふ歌よみ事にふれて名たかき人ありけり賀茂保憲かまご二條關白家の女房なり後にの尼になりて名をの妙とをいひけるふかき道心者なりけれのことに動する事なしたよのつねにの常住佛性といふ四字をたちおきふしのことくさにしけるかつねにをり思ひのことくにてわうまやうをとけたるよし傳に見えたりこれの涅槃經のかんじんにてめてたきことばりなれと往生こくらくのつとめにたかひてを侍るされと宿習にまかひゑかうによる事なれの凡下の是非すへきにのあらざるなり又ある傳記にいはいはくむかし楊州に人ありて云常住をきつる者かならず惡道におちすといふひとり居士これをうたかひあさけりて云此涅槃經をみなことく聞たりともぢうざいをつくりてののかれかたしいはんやわつかに二字をみふれたらん人をや此事もちひられすといひてさりぬそのうち此居士のちをりて閻王のまへにめしすへられたりける時間羅人の事をかんかへ出すなんちの大乗ひはうのものなりすみやかに地こくへつかはすへしとさたむ居士これを聞て云ひはうの罪をかうふらん此經ゆへなるへしまからの又二字をみふれたるくとくむなしからんやといふその時空中にひかりあり光の中にこゑありてとなへて云若信若不信纔聞常住字不墮惡即生不動國となふえんらん人これをきてまんがうしてざい人をゆるすといへりすへての法花も涅槃も信するも信せざるも法の妙なるの耳にふれ口にとなへ有智無智をわかつすみな淨土のこうとなれりたどへせんだんのわつかにふるれどもにはひふかくつるきの機能をあらされ共物としてきれざる事なきかことしかねての又やまともろ

こしの傳記のことくいたとひ行をろかなりといへともゑかうまんぐなれのみなそのねかひをどぐいはゆる橋をわたし道を造り船にさはさし施を行じもろくの歡喜これなりすなうちまゆしやうのもろくの行はしめみふれしより心にすみこうをつみさとりをうるまでことく前世のまゆくまうによりてこのむどころひとつならざるゆへなりかのわしゆみつたかおとこをちかつ祇陀太子の酒をたしみ天志ゆばだいか過差をこのみめんわう比丘か無相はなはたかりしみなかいりつにをむけるにたれども釋尊これをかなしみ給のさりしにてころうへし彌陀の化儀も又おなしあきらけく衆しやうのまゆくしう心さしひきふすみまをくれたる事をあらしめしてくう大のせいくんをおこし給ふすなはち極らくに九品をまうけ有智徳行をはしめとし十あく五きやくにいたるまでももらし給はす念佛とくきやうをもととしてはかなきあそひたはふれまでもみな人によりゑかうにたかひてことくいんせうし給まかるを今の世のきやう者たかひに他の行をそしり智惠のあさきふかきをあらそふほどに我執偏増にしてやもすれの佛敎のおもむきにそむきてひとへなるへき西方のこうの中にへたてをなしたつかしかるへきおなしのそみの中に竟趣をふくむ此事のをろかなる心によしなくおほえ侍るなり大かた凡夫のならひ我ころなをわか心にかないすいはんや人のころをやせんいた身つからはからひ身つからつとめてむじやうのせつきの來ららんさきに出離のこうをはけむへしよしなきうたかふ者にあひてあたらいとまにらんぎをこのむ事よしなくおほえ侍るなり

太子の御墓能上人管絃を好む事

太子の御はかに覺能といふひしりありけり音楽をこのむ事よのつねならずあさ夕にいとな
 心事とてハ板のはしにておかしけに琴びわのかたをつくりて馬の尾をかけてひきならし竹
 をきりて笛のかたにゑりてこれをふきつゝ興にいり遊けしはいはくはさつ聖衆の樂のをど
 いかにめてたからんといひてなみたをおとしけりつねのいとなみにてかくのみつくりをき
 たれハわたるあたりにはうちりておほくみゆるをのつからわらはへなどの手すさひに
 どりうしなひけれハさすかに腹のあしきくせにてのゝちりけり此ひしりとしへてのちりん
 ちう思ひのことく樂の聲みゝにきこえてをハりにけりそのゝちむなしきからひさしくみた
 れそんする事もなかりけるをあたりの人いとゝほとけのことくたうとみあつまりけるはど
 に四十九日といふにその身いつちともなくうせて見えす成にけり此五十年はかりかさきの
 事なれハとしたかき人などハ見たるもや有らん管絃も淨土のどうとま九する人のためにハ
 往生の業となれり今の世に徳たかくきこゆるひしりあり人たいめんのついでにその行をど
 ふ何わさをつとめとしていつれのところをねかひ給ふそとたつねけれハさらになつくと
 さしてねかふ所なしたゝほとけなせそとゝいましめ給ひしことハ。せと忍ひてすゝめ給ふ
 わさをハ心のをよふほどハつとめハやどはけみ侍れハほとけこそはからひていつこへもつ
 かひ給ハめほどけの御心になん事もまらすいかゝおほけなくこゝかしこと願ハ侍らん
 とそこたへられける此心たての佛意に叶ひけるにやをハりめてたくてゑなからいきたえに

けり印をむすひたりける手二三日はたらかさりけるとそなへてのきハ大きなくどくあ
 れども願なけれハしやうじゆする事かたしたとへハ牛のちからあれどもやる人なけれハ思
 ふかたへいたらざるかことしといへりされど人のおもひさまくなれハ一すちに思ひとり
 てほとけの御はからひをあふかむ事もいとたうとし

中ころさへかしこきはかせありけりおもきやまひをうけてかきりなる時善知識きたりて念
 佛すゝむるにさらにたゝとし比の餘執なれハこゝろなを風月にのみそみていと思ひもいれ
 ぬさまなりけれハ此僧思ひはかりある人にやありけん念佛のすゝめをどゝめてどはかりこ
 れかこのむところの事をあいらふこゝろゆきてさもと思へるけしきを見ていふやうさて
 もとし比おほく秀句をつくりいみしき名文どもを書とめ給へるに極樂の賦といふ物をかゝ
 てやみ給ひぬる口おしき事なり世間の美景すてかたき事おほかりまして淨土のかさりいか
 にふせいおほからんといひ出したりけり思ひまめたることなれハ極樂のえはうことゝく
 みるやうにおもかけたちて心をすゝむるたよりになりて念佛し思ひのことくしてをハりに
 けり臨終のせんちしきハよくゝ心をまへきことなり此事をハ保胤入道とそある人かた
 りしかどかれハ無極の道心者なれハりんちうに他念ましハりけんことけにともおほえす
 吉田齋宮と申人おはしけり御惱おもくしてかきりになり給ひける時大原の藥忍上人せんち
 しきにまいりて念佛すゝめたてまつりけるほどに御けしきことの外にすくよかにてさま
 づのようもんをとなへてめてたくをハり給ひにけりその時まちかくさふらふ人々なみた

おとしてたうとみ奉る上人いか、思はれけん念誦してうちねふりてはやくたちさらんども
せずたれもあやしく思ふ程にとはかりありていき出給ひにけりさて二時のかりすきてさき
の御けしきにいにすいとよはくしきさまにてひきいり給ひにけりこれこそまことの御り
んちうよさて御ありさまけにくしからすとて出られけれひしりのとくにそいひける魔
のかまへたるにこそかやらの事よく心得へきなり

又ある人やまひかきりなりける時せんちまきをひめて念佛をす、めけれといと申さすいふ
かひなきさまなりけれひ耳もきかぬにこそとてみ、にさしあて、高聲になん申けるすてに
と見えけれとそなたひのやみいきて後にかたりけるひ耳にたかく申入つる念佛のこゑ五た
いにこたへてたへかたくおほえつるほどに何の往生極樂の事もおほえすとそかたりける
これいかならすあるへき事なれひよういのために記す

賢人右府白髪を見る事

小野宮の右大臣をい世の人賢人のおと、とそいひける納言などにておはしけるころにやあ
りけん内より出給ふにうつ、ともなく夢ともなく車のまりにまらはみたる物きたるちいさ
きおとこの見しとおほえぬかはやらかにあゆみてくれひあやしくめをかけて見給ふほど
に此男はしりつきてうしろのすたれをもちあくるにこゝろえかたくてなに物そびんなしま
かりのけとのたまふに閻王の御つかひ白髪丸にて侍るといひてすなひちくるまにをとり乗
てかうふりのうへのほりてうせぬいとあやしくおほえてかへり給ふまゝに見やり給へ

白髪をそ一すち見いたし給ひたりける世の人いふ事なれとまさしくまよふをみて心にあは
れとおほされけるにやもとの道心などおほせさりけるかこれより後世のつとめなとつねに
し給ひけるとそ

三井寺の僧夢に貧報を見る事

中比みゐてらにわりなくまつしき僧ありけりねんしわひておもふやうかく所縁のなきなめ
りかくしも思事のかかふへきかひ我はかへゆきてすくせをも心みんと思ひてひるなどは旅
すかたもあやしけれひあかつき出たつほどに夜ふかくおきみちのほともわつらひしかるへ
しとてまはしよりふしたる夢にいろあをみやせをどろへたる冠者のわひしけなる我とおな
しやうにわらくつはきなど用意しいみしう出たつありさきくもみえぬ者なれひあやし
てをのれひ何ものそとふとし比さふらふ者なりいつもはなれたてまつらぬ身なれひ御と
も申候いんとて出たち侍るといふ僧のいふやうさる物やひある名をい何といふととへ
人くしき身ならぬひ異名侍りた、うちみる人の貧報の冠者となん申侍るといふと見て夢
さめぬれひすなひち身のつたなきすくせをまゐりつくへ行とも此冠者かそひたらんにいと
思ひてはかこゝろあらためてあやしなからもとの寺にそすみける是又しもあるへき事なれ
ど人ことに夢にもみぬひ宿世のほどもまらすいくはくもあるましき身のあたらいとまに
後世のことをさしをきてまつもしや、とはしりもとめ心をつくすなるへし佛天のちけん
こそいとほつかしく侍れ

道寂上人長谷に詣て道心を祈る事

元興寺に伊賀のひしり道寂といふ人有けりいんぐのこのりにくらからさりけれいふかく佛道を思へりとしわかて長谷にまいりて道心をいのりたてまつりけり夢中に僧ありてまめしていはく道心の躰なした、かくのこときを道心といふとのたまふとそみたりけるすなち世をのかれかしらおろしとろく修行しけり後にいあすか寺のほとりにいはりむすひ坐禪念佛してさしたるつとめとてい小阿彌陀經一へんをよみけりこれおなしへ往生をとけたりけり

惠心僧都母の心にまたかひ遁世の事

惠心僧都としたかくわりなき母をもち給ひけりこゝろさしいふかゝりけれとも事もかないねいおもふばかりにてけうやうすることもなくてすき給ひけるほどにまかるへきところに佛事しける導師に請せられてふせなとおほくとり給ひたれいというれしくてすなちいはのもとへあひくしてわたり給へり此母世のわたらひたえくしきさまなりいかによるこれんと思ふほどにこれをうち見てうちうしろむきてさめくとなかめいと心えずもしうれしさのあまりかとおもふあひたにはかりありては、のいふやうはうし子をもちていわか後世をたすけらるへき事とこそしころいたのもしくて過しかまのあたりかゝる地ここのうをみるへき事かゝる夢にも思はさりきといひもやらすなきにけりこれをきいて僧都發心してとんせいせられけりありかたかりける母の心なり

阿闍梨實印大佛供養の時滅罪の事

ひと、せ東大寺の大佛くやうの時田舎の人の残りなくまいりあつまりける比かのくいんまんのひしり夢に見けるやう一人の高僧きたりてつけて云く此きせんたうぞくかすまらすまいりあつまる中に大夫あまやちいんといふ僧の無始のさいしやうことく滅するなりとの給ふいとたうとおほえてまかくいふ人やあるとたつねさするほどにをのつからたつねあひにけりすなち此事をかたりてさてもいか程のことをつとめ給ふといとくおはつかなくなどいひけれいさらくつかまつる事なした、御まへにさふらひし時つねよりも信おこりて侍りしかい他念なくしてなくなみなたをおさへて理趣分をこそ一へんよみ侍りしかとこたへけれ

源親元普く念佛をすゝめ往生の事

中ころ安房の守みなもとのちかもといふ人有けりつねにさきの世のつみをくゐてあさ夕極らくをねかふ事あさからすけいしにてありけるあひた施をおこなひつみをなため人をたすくる事おほしつゐにひかし山のはとりに堂をつくりてあみたの三尊をあんちす其うへにひとりの比丘のかたちをつくりすへてその名を阿法とつけたりけるこれわか出家したらん時の名なるへし安房守になりて下りける時任のはしめなれとさらに神事をさきとせすた、佛事をのみつとめけり國をおさめけるあひたかしこに五間の堂をつくりちやう六の阿彌陀佛をあんちせり國中の民にあまねく念佛をすゝめて遍數にまたかひて官物をゆるす石

別に十萬へんをそあてたりけるもし科犯の者あれ念佛するものをいゑらひてかならずゆるす國の内ゆたかにして民百姓なひきまたかへりあさ夕に念佛申こゑの家ことたゆる事なし後にいとりの國まできつたへてかつのうらやみかついたうとふ任はてのほりける時民のうれふるさまち、は、にわかれたるやうにそありけるつゐに京へいらすして三井寺にて出家すをいりちかくなりてのみめうの音楽み、にきこえさま、すいさうあらわれてわうしやうをとけたるよし傳にゑるせり

心戒上人跡をとめさる事

ちかく心戒坊とてゐところもさためす雲風にあとをまかせたるひしりあり俗性の花園殿の御すゑとかや八しまのおと、の子にして宗親とて阿波守になされたりし人なるへしそのかみいかなる心かありけん平家はろひて世の中目のまへにあとかたなくあたるしに心をおこしてもとより世をそむける佛性坊といふひしりにあひともなひてかうやにこもりゐてとし久しくおこなれけり其後大佛のひしりもろこしへわたりにけるたよりにつきてわたるかの國にとし比ありて行ひけるありさまも世のつねの事にあらずひとへに身命をおしますある時の樹下坐禪とて同行三人くしてふかき山に入て草ひき結ぶ程のよういもなく偏へに雨露に身を任せつ、四五十日とおこなひけれ、今二人のえたへすしてすて、出にけりとそその、ち此國へかへりて都あたり、事にふれてすみにくしとてゑひすかあくろつかるつほのいしふみなどいふかたにのみすまればとこやいもうとあまたおはしけるに天王寺

に理圓坊とてすみ給ふいむかし建禮門院に入條殿ときこえし人なるへしかのひしりのありさま山林にまどひきて跡をもとめすさとはかりほの、きこゆれとちかきころのたいめんなどせらるゝたよりもなけれいかにておはすらむ志らすひたすらむかしかたりにすぎ給ひけるに此二三年かさきに思ひよらぬほどによいゆ、しけなる人いりきたるありわらんへあまたまりにたちてものくるひとわらひの、しるそのさまをみれ、人にもあらずやせくるみたる法師かみきぬのきたなけにはら、とやふれたるうへにあさのころものこ、かしこむすひあつめたるをわつかにかたにかけつ、かた、やふれうせたるひの本かさをきたりあないみしこの何物のさまをと思ふ程にとしころおほつかなく心にか、りつる心戒坊なりけりこれをみるにめもくれてあ、れにかなしき事かきりなしまつさてまぢかくみむ事もか、りゆき様なれいふるき物ともぬきすてなとして後なんふつかにとしころのいふせさもかたられける今いとしもたかくなり給ひたりおこなふへきほどいつとめて過給ひぬいつこにもまつまりて念佛など申されよとねんころにいさめて山崎にいほりひとつむすひて小法師一人つけてその用意などかのいもうとのさたしをくられけれ、主従ながら月日を過しける程にある時河内のひろ川にすむひしりとかやたつねて來けりこれとたいめんして夜もすから物かたりせられけるを此小法師物をへたて、きけいかくてもなを後世のかならず修すへしともおほえすことにふれてさ、りありた、もとありしやうにいつくともなくまどひありきいさ、かも心をけかさしと思ふなどかたりけれ、あやしと思ひけれとたちまちにあるへき事

とも思はてすくるほどに其のち四五日ありていつくともなくうせにけりこの小法師ころ
ある者にていとかなしくおほえてなくくたつねありきけれといつくをはかりともなしあ
りし夜の物語りの中に丹波のかたへと哉らんこのさきかりわつかにきし物をと思ひ出
て心さしのおまり尋行ける程にあなうといふ所にてたつねあひにけりひしりおほえすあき
れたるけしきにていかにしてきたるそといひけれ日ころもさるへきにてこそつこうまつ
りつらめいかなる御ありさまにても御とも申候はんなど心さしふかくきこゆ心さしとい
くありかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたかた
かひぬへきさまなりけれのちからなくてかへりけり後さらばその行末もあらすなん侍りし
いとたうとく今の世にもかゝるためしも侍れのこれをきゝてわか心のをろかなる事をもは
けましをよひかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたかたかた
にあらず一つにの身よしくしてやまひおこりぬへし一つにの衣食ともしからの中く心み
たれてん身をまたくしてゝろをまつめてのどかに念佛せんにはかかしていふこれひとへに
心さしあさく道心すくなき故なりまことのこゝろおこらすの佛法かなひかたし露命きえや
すし一念にて他事を思ふへからすかた時なりともれそれたらん事とくじやの如くにして此
身をの水のみなもとといふへしかゝれわさとも此身を佛道のためになけてふたいの身
をえんとこそ思ふへけれやまひおこりてまなむにいたりての思ひあるへき身かゝあくごう
の依身なりふじやうの庫藏なりつゝにみちのはどりの土となるへしあはしいたはりて何か

せんいかに衣食のしやうとくの報なり天運にまかせてもありやまひの又習にまたかふい
たはるとてもかならずしもさらすとめる人のをどろへたるさまをみるにゆたかなる時ころ
もをあつくきくすりをふくしてかべしろをひきさまく身をいたるにのつねに風熱きは
ひおこりて神心やすき事なし此人まづしくなりて飢寒身をなやまし服薬こゝろにかなはず
もろくの悪事おりにつけつゝみな身をおかすむかしのことくならいたちまちにやまひお
こりてまぬへけれともかやうに身をすつるのちのやまひもまたかひてさりぬこれすなひち
身のならばしの物なるうへに運命かきりある故なるへしいはんや佛力むなしからすの何の
やまひかあらその職感ならの身もつよきことを得てんすへといへともまなすおしめと
もたもたれざるの此身なりたまく佛法にあひたてまつり決定わらしやうすへきみちをき
ゝなからかりの身をいたり五よくにつなかれて一期をくらすはかなき事にあらすやかの
阿彌陀如來の心くんの我らかわうまやうのこゝろ勸門につきてうちきくこそやすきやうな
れとよく思へ無始より以來りんゑしやうしの地をあらためて大せうせんごんのさかひけ
らくふたいの國にむまれん事の心をおこしてはけまざるさすかにとけかたかくを侍らめま
かるを今の世のならひわつかに散心念佛はかりを行としてありかたきりんじう正念をこし
かたへの往生人のまゆくせん内徳をいゝらすたやすく我分に思へりいとをろかなる事にこ
そうち思ふにの五ぎやくの罪人一念のせうみやうなを引接にあつるなどかのぞみをかけさ
らん事とこそのおほゆれされとかのこくあくをつくるのすなひち心のたけきよりおこる事

なれの思ひかへす時も又強盛なるへし一念に證をうる事のまた命終にのそみてそれつよく
 おこるかゆへなりわれらかたくひのちもより心よはくつたなくしてきら／＼しき罪をもえ
 つくらすけに／＼しくさんげを修するにあらされの熾盛の心もなしぐちあんどんにして泥
 をきるかこどくなりもしこゝろをふかくおこして此たひけつちやうわうしやうをどけむと
 思ふ人のはやくみやうりをいとひ身命をすて、ねんころに願ふへし水をわたる者手をやす
 めつれのおはれてます火をきるものちからをいさる事なしわうしやうこくらくも又
 かくのことし一心にはけみつとめてゆめ／＼をこたる事なかれもし世執なをつきすの志つ
 かに此身のありさまを思ひとくへし大かた此身のあるにもあらず又ひさしくとむへき物
 にもあらずすゝろにけしやうする物にもあらずたゝるらゐやうじの夢のうちに因縁をの
 つから和合してかりに業報のかたちのあられたる許なりいは、旅人の一夜の宿をかるか
 ことしこれに何の會著かあるへきか、れのかたちつねのあるしなしたましおの常の家な
 しといへるなり此身のかくわたなる物なれとまかもわか心のかしこくをろかなるにまたか
 ひてあたかたきともなり又善知識ともなるへし或經にいはいく人一日をふるに八億四千の思
 ひあり一々の思ひあくこうにあらすといふ事なしといへり一年二年にもあらずもしの一生
 にもかきらす無始よりこのかたつものしむほどかきりもなし此つみかけのこどくに身にそ
 ひてたどひひさうひ、さうのいたゝきにむまるゝといへどもなをはなれすしてそのむくひ
 つきぬる時三づの億里にぐしてゆくなり此つみのふかきといふのなんをみなわか身を思ひ

しゆへなり此身つみの根元としてこゝろのためにはあたかたきなれともまはしもいけるは
 どの念比にあひ思へりいのちつきて後すなひち身をい山にすつるにむなしく鳥けた物の食
 となりぬ心ひとりのめいどにおもむく時何しにもてはてさりける身を思ふとてもろ／＼のつ
 みをつくりてかくからきめをみるらむとらめしくやしけれともすへて何のかひかひあ
 る雜阿舍の中にたどへをとりて云人のもとにひとりをやつこありよつこのわさこゝろにか
 なひてひとつもかく事なしあるしひとへにこれをあひたのみてあさゆふあれみはむくむ
 かれかこのみねかふ事きる物くひ物よりはしめてはかなきあをひたのふれにいたるまでみ
 なかなへともしきことあらせしと心をつくしいとなむより外のことそなきまかるを此やつ
 ことし比かたきのたばかりてつけたりけぬ使なれのあるしの心さしを思ひまらんやひまを
 はからひつゝたちまちにあるしをころしてさりぬやつこといふの我身なりあるしといふの
 心なり心のをろかなる故にあたかたきなる身をしらて宿善のいのちをうしなひあくしゆに
 墮することはいへりむかし目連尊者ひろき野をすき給けるにおそろしけなる鬼つちをもち
 てまろきかばねをうつありあやしくおほしてとひ給ふにこたへていはくこれのをのれかさ
 きのしやうの身なり我世に侍りし時此かはねをえしゆへに物にむさはり物をおしみておほ
 くのつみをつくりて今餓鬼の身をうけたり苦をうくるたひに此かはねのねたううらめしけ
 れのつねに來てうつなりといふこれを聞えりてなを過給ふほどにあるところにえもいは
 ぬ天人きたりてかはねのうへに花をちらす又これをとふに天人こたへて云これのすなひち

我さきの身なり此身にくとくを造りしによりて今天上にむまれてもろくのたのしみをうくれのそのむくひせんかために來りてくやうするなりとそこたへ侍るか、れのひたすら身のうらめしかるへきにもあらずせんあくにもまたかひて大なるちまきとなるへきなりかの都率の覺超僧都の月輪觀を志ゆしてさとりをえたる人なりその觀文のおくにいたとひ紫金の妙躰を得たりともかへりて黃壤の舊骨を拜せんとそかゝれて侍りけるまことに道心あらん人のために、此身のかりたうとくうれしかるへき物なしこれらのこと、のりをおもひときて身命を佛道のためにおしますることさらに事理さんげを修せすとも六度のなんきやうをへつくさすともはらみつのくとくもをのつからそなはりぬへし

齋所さいしよ權介成清か子高野にすむ事

おほりの國中まのこほりに齋所の權介成清といふ者ありかの國にとりてゆたかなる者なり子あまたある中にちやくしにてわかき男ありけりの中のならひなれ、のかりすなとりを事としてさらに因果のこと、のりをもあらず一とせ東大寺の大佛くやうのとし廿二三はかりにて父母にあひくしてまうてたりける時さるへきにやありけん、ののうちにつよく道心おこりていかて身をなき物になして思ふさまに佛道を志ゆきやうしてかなと思ひければ父母さらにゆるさす此たひのいかにもかな、しとておもひければそのけしき色にもいたさすもてかくして本國へかへり下りにけりその、ち日比へてさるへきひまをはからひつゝ、ひどり京へのほりぬ又すな、ち大佛の上人のもとにいたりてかしらおろさんよしきこえければ

れ人そいかなる事によりて世をのかれんと思ひた、れたるをとしもわかきいますあやしくどうたか、れければまことにさそおほすらんこれ、まかゝの者に侍りさきにまゐりて侍りし時申へく侍りしかともその時のかたゝ、さまたけおほえてどけかたく侍りしか、國にくたりて後たちかへりわざとひとりのほり侍るなり身にとりて、のことなる事も侍らすおやゆたかなれの心にかな、ぬ事もなし資財もあり田園もありさりかたき妻子をもちてかたゝ、思ひたつへき身にも侍らねとも世のむじやうをおもふに何事もよしなしと思ひ侍れ、た、身命を佛道になけてほとけの「悲く、んをたのみたてまつらんはかりこそかしてからめと二心なく思ひたちて侍るといふひしりこと、のありさまをき、なみたをおとしつゝ、いとありかたき事なりこれらに弟子と名つけたるひしり其數侍れとすゝろに世をすてたる人、のなしあるひ、の主君のかしこまりをかうふりあるひ、の世のすきかたき事をうれへあるひ、のかなしきつまにをくれあるひ、のつかさくらぬにつけて世をうらみなどさまゝ、心にかな、ぬをそれをついてとしてのみこそ世をすつるならひにて侍れ、のその事わすれなん後の道心もいかゝとあやうく侍るをきくかことくなら、の發心にこそほとけも必あはれどかなしみ給ふらめいとゝありかたき事なりとてかしらおろさんとすかくてゑほらしをとるほどに髪のはらゝとみたれかゝるを見てあやしくて故を問かたりて云田舎よりのほり侍りし時もし思ひかへすこともや侍らんとわか心のうたか、のしくおほえて侍りしか、のかれにてなんもとゝりをきりて侍るといふにいと、心のなをさりならぬ事をまゝりぬ即ちかしらおろし

て後かの弟子のひしりともにもましのりて三年はかりやありけんひるのかはらをはこひ石をもちさいもくをひく事時のまもやすますよるの出家したる日よりさらにうちふすことなしよもすから念佛をとなへて西にむかひてゐなから夜をあかすおほかた露のまもいとまおしらすれの人と物かたりなどする事もなし食物きる物のあるにまたかひてさらに身命をおしむ事なしたゝねてもさめても心に西方をかけたひしりあかふるまゝに此有さまをみるに有かたうとくおほされすゝめて云朝夕佛道のために身をくるしうせらるゝも大なるけちゑんなれと猶こゝろをまつめ身をやすくしてあくまで念佛せんにはかき高野に新別所といふところありすなり我はしめぬたる所なりもどよりほうかいの地なる上に不斷念佛をとなへて一へんに往生極樂をねかふより外に他のいとなみなし志かれのこゝにおほかるひしりの中にもし道心ありとみゆる人をいすゝめてかならずかの念佛衆にゐるゝ也はやくその衆につらなりて念佛のこうをつまれよといさめられければまことにかくても侍るへけれと凡夫のくちおしさの女などみゆれの妻のこと思ひ出らるゝ事侍りおさなき子どもの侍る時のこれをみるにつけても我子もかくやと忘れかたく侍るもいとよしなし山ふかき所にすみない思ひもなくていとよく侍るへしたゝし入とし入なは又かへる事のさらに仕るましうとくなり奉らん事こそ心ほそく侍れといひなから高野へのほりけりかくて彼往生院の廿四人の中にて月日をゝくるありさまありしよりもことなり田舎にの此人をうしなひて父母妻子ともみななきも心をまといし當國隣國いたらぬくまなくあしてをわかちつゝたつねも

とむれといづくにかあるらんとといひのちつきてむなしきからとなりたりとも今一度そのかたちをみむとなきかなしむさまことりにも過たりはてに國の中ゆすりみちて見きく人なみたをおとさぬいなかりけりとかくいへとかひなくて月日を送るあひたに世間にかくれなければ程へて後なん出家せし事きこえたりけるつゝに高野にこそすむなれと聞てなくゝせうをこしけりさしもあさからすおもひたりける道なれいそむかん事いふにも及はず文一つたにもかきをかすしてむなしくおやの心をまといせることなむいとらめしけれとさていかゝいせん心をかへて思ふにゝ又つみさり所なきにしもあらず此國にも山寺おほかりちかくてたにきかまほしきをかして雲をへたてたるさかひにかけはなれたる事こそいとほいなくなどさまゝにかきやれとさらになひくにもあらずかねて父母なんわざと京へのほりて高野の麓に天野といふところにまうてゝそこによひ出して對面したりけるその時心の中をろかならんやわかさかりなりしかたち見し物どもなくやせくるみてほろほろとあるぬの小袖などむかしかりにたに見さりし姿なれい目もくれむねもふたかりとみに物いはれすとはかりためらひつゝさまゝ日來思ひつめたる事どもなくゝいひまらすれともことはすくなにてはかくしく物もいはすたゝ此山へまかり入し時又かへり出しと思ひかため侍りしかといとまを申さすして家を出て侍りし事のつみさりかたくて又たちもとり候ひつれどもあらぬ心にてかく出侍るなり今より後いたとひ御たつね候ともいさゝかもこれまで出る事仕るましされい今のこれはかりなんかきりにて侍るへし我をみまほし

くおほさの心をおこして佛道をねかひ給へ此世にていたとひ思ふはかりそひ奉りたりとも
 いつまてか見奉らむ我も人もをくれ先たつならひのかれたけれいせんなく侍るへしとつ
 れなくこたへてかへりのほりにけり妻いそこまてのほりけれとおもてをむくへくもおほえ
 さりけれの物のはざまよりわつかにのそきて忍ひもあへすよとなきけり父母すかたを見
 さりし時よりも中々かなしく覺えてなく帰りにけりさて國よりさま物とも
 さたしのはせたりける返事にこれい入ことも侍らねと御ため罪ほろふるえんとかならむ
 と思ひ給て念佛衆にわけ侍るへしたとくして浄土へまいらんとおもふ心のみふかく侍れ
 り日にそへて命のみこそいと悲しく侍れゆめかりそめの身をいたのしくなほしそと
 そいひけるまことにき物くひ物のたくひけつしゆにわかつのみにあらず貧人みゆれのみな
 あたへて我ためにのこす事なしおやのさたにて三間なる坊をつくりてすへたりけれとあ
 ころほしかる人の有けるをすへてわか身のさたまれるすみかなし日ことに湯をわかせども
 これをあみすとし月ふれとも物をあらふことなしやれぬれすつたあさゆふほとけのら
 いかうを心にかけて事にふれてむじやうをおもふより外さらに他事に心をかけすもし人の
 もとにゆく時はどろふめるあしにてむしろたゝみをふみてはかる事なし人とかむれい不
 淨いをのく身のうちにありなんそあられたるをのみいとはんやと云かのところのなら
 ひにて結衆の中にさきたつ人あれのこりの人あつまりてところの大事にてこれをはうふ
 るわさしけれと此ひしりのありけるほどいさらに入りにいとなませすたひどり引くし

て木をこりてはうふりはねひろひとかくして我ひとり念比に心を入たるさま父母を葬する
 かことしこのところにするみそめけるよりおくの院へ入堂する事日ことにかずそのあひた
 に雨風霜雪をためらふ事なしみのかさ用意するほどのかまへたにければ雨ふれいさな
 らぬれ又雪ふれいゐてこほる更にこれを事とせずある人云浄土をねかはんに身をまたく
 して念佛のこうをかさぬへし何故にか身命をいたはらさらむこたへていはく世の末世なり
 身のばんふなり今たましくこゝろをおこせり此こゝろさめさらんさきにわうしやうをとけ
 んと思ふこのゆへに身命をおしますといふきく人かついかなしみかついたうとむ事かきり
 なしかくて出家して後七八年やありけんかねて死期を去りてことなるやまひもなくりんじ
 う思ひのことく念佛の聲たてすして居なからをりにけり今の世の事なれいかの別所にま
 らぬ人なし

發心集第八

時料上人隱徳の事

中來ちくせんの國に時料と名つけたるひしり有けり府のあたりにありきて人の家にいたり
 物を乞とてかならずときれうとはかりいひて經をもよます佛號をもとなへすいはんやその
 外の事一こともいはさりけれいかく名をつけたるなりあさゆふつねに見ゆれい見あふにま

たかひて物などどらすれどたしかにそこいあどとめたりといふ事を志れる人なし其時に
 府官の中にことにこれをあわれむ男ありけり心に思ふやう此ひしりのありさまこそいとお
 ほつかなけれさりとも跡をかくせるところなからんやいかにもその徳ある者にこそこれを
 見あらひしてふかく縁をむすいんと思ひて物こひめくりてかへりけるを見えかくれにゆく
 おひたにはるかに山ふかく入てけりしき谷のおくにあられたる神のやしろありける中にはひ
 入ぬいとめつらかに覺えてかくれぬてきけり日暮かたよりもろくのざいしやうをさんげ
 す夜中過るほどより法花經をよむ其聲いとたうとくて涙もとまらず夜あけて後此男かへ
 らんとする時人のあるけしきをさとりてひしりとかくもどめありきける程に見つけられぬ
 やかて袖にとりつきて大きにかなしみていはく我此たひ生死をはなれんと思ふに此心さし
 を人に去られなまえんもちからをえんせもことにおもかるへし事にふれてさりある
 へきゆへに我ふかく徳をかくしてとし比この谷にすむといへとも鳥けた物より外にさら
 に我を志る物なし志かるをなんち今われを見あらひすはすてに世々生々のあたかたきなり
 さらになんちをゆるすへからすこゝにしてもろともいにのちをすつはかりそといひてなき
 もたゆる聲谷をひかし涙をなかして袖をほるはかりぬれぬ此男おそれをのきていふや
 う我ひしりのとくをたうとむにより信をおこしてたつねきたるこれ何のとかある我ひ
 どりの何はかりの事かあらんねかはくのけふのとかゆるし給へなかく妻子にもこのことを
 ちらさし佛天かならすてらし給ふへしといふひしりの云一人かえれるとてもほいにあら

ねども汝人よりも信心ふかし志かれいかいせん口より外へ出すへからす今日より後ふ
 かくあひたのまむなどたかひにさまゝちきりをむすひてかへりにけり其後此おとこの志
 のひ人にかくれて時料とふらひけれり里へ出ることもなくて思ふことく往生をよけたりけ
 りとそかねて死期を志りて此男につけたりけるによりてそのりんじうのたうどかりし事な
 ど後に人にかたりけり或人云濁世の行者の身つから徳をかくし賊國にありてたからをまう
 くるかことくすへしそのゆへ今の世の天魔ぬす人みちゝて人の善根をうかひさまた
 く志かれともさとりふかくとくある人の諸天のおうごひまなくして天まそのたよりをうる
 事なしたとへ人の門をつよくとさしつものおほくまもりてかなしみなきかことしもし
 我らかことくなるけたいむちの者たまゝつとむるくどくいまつしき家にたからおほから
 んかことし心城かこひあたにして善神の志ゆごし給ふもなしたゝ外相をよそにしその徳を
 ふかくかくして志らせらんその志かすかのこかねをせろにつゝみ寶珠を土にうつむかこ
 としたゝしたとひとくをかくすことも身つからをざる心あらひ又益なからん天まのよくけ
 うまんをたよりとすたとへ盗賊の中人をもちひるかことし末世の比丘あらそひふかく名
 利にまどへる故に身つからなき徳をあぐ妄語の中にくれたる重罪なりいかにいはんや身
 にある徳をわけ人の稱讚するをよろこぶ事の萬人のならひなり妄語にあらすといへとも其
 とがなをかるからすもしまことに後世を思はん人の人有りて我身になき徳をさんたんせりこ
 れをおそれおとろく事盗殺のむ志ちをおふかことくすへし身のけよたつはかりをのゝき心

神やすからずしてすなわち三ほうを念せよつれなくおどろく心なくのそのとかなをのかれ
かたし

或上人爲名聞堂をたて、天狗になる事

ある山寺に徳たかくきこゆるひしりありけりとし比だうをたてほとけつくりさまくくと
くをいとなみたうとくおこなひけるかをいりめてたくてありけれの弟子もあたりの人も
たかひなきわうしやう人と信して過けるほどにある人にかのひしりの靈つきて心えぬさま
の事ともいふをきけのはやく天狗に成たりけり弟子とも思ひの外なる心ちしていみしく口
おしく思へどもちからなくおほつかなき事などひけれのふしきの事ともいふ中に我在世
のあひたふかく名聞に住してなき徳をせうじて人をたふろかして作りしほとけなれのか
る身となりて後の此寺を人のおかみたうとむ日にわか苦患まざるなりとそいひけるいみし
きとくをつくるども心と、のいすのかひなかるへし今の事なれば名いたしかなれとこと
さらあらはすと或人かたり侍りし

仁和寺西尾の上人我執によりて身を焼事

ちかき世の事にや仁和寺のおくにおなしさまなるひしり二人ありけりひとり西尾の聖と
云今ひとり西尾のひしりと名つけたり此二人の聖事にふれて徳をいともみひとりか如法
經かけれひとり如法念佛すひとり五十日ぎやくしゆすれひとり千日講をおこなひ
などたかひにをとらしとまけれの人もひきくにかたくわかれつ、けちえんまけりとし

ころかくのことくいなむあひた西尾の聖身燈すへしといふ事きこえて結縁すへき人きせ
ん道俗いちをなしてたうとみこぞる東尾のひしりこれを聞て狂惑の事にこそあらめとて信
せざるほどにつねに期口になりて弟子ともいみしくぬにようして念佛して火屋に火をさす
こゝらあつまりし人なみたをなかしつゝたうとみあへるほどに火中にて念佛二百返ばかり
申てつねにいみしくたうとけなる聲にて今そ東尾のひしりにかちはてぬるといひてなんを
いりにける此ことをきかぬ人いたうとしと袖をうるほしてさりぬをのつからもれ聞ける
者の思はずにこの何事をいとはいならす妄念なりやさためて天狗などにこそなるへかりぬ
れ益なきけちえんをしてけるかな、といひけりまことにあたらし身を命をすて、さるころを
おこしけんめつらしき事なるへし或人かたりていはくもろこしに御門おのしけり夜いたう
更てどもし火かへにそむけつゝ寝どころに入てまつまりおのしめます程にはのかけにかけろ
ふ物ありあやしくてねいりたるやうにてよく見給へぬす人なるへしこゝかしこにありき
て御たから物御衣などとりて大きな袋に入れてけりいとむくつけなくおほされていと、い
き音もし給のすかゝるあひた此ぬす人御かたはらにくすりあはせんとて灰をやきをかれた
りけるを見つけて左右なくつかみくらふいとあやしと見たまふほどにはばかりありてうち
あんして此ふくろなる物もとり出てみなもこのことくをきてやをら出なむとすその時御
門いとこゝろえかたくおほしてなんちの何者そいかにも人の物をとりぬまかるを又いかな
る心にて返しをくそとのたまふ申ていはく我はそれかしと申候ひし大臣か子なりおさなく

て父にまかりをくれて後たへて世にあるへきたつきも侍らすさりとて今さら人に人のやつことならん事もおやのため心うく思ひ給へてねんしすくし侍りしかと今のちいくへきはかりことも侍らねは盜をこそつかまつらめと覺えて侍るにとりてなみなみの物のぬしのなけきふかくとりえて侍るにつけて物きよくもおほえ侍らねのかたしけなくもかくまいたりてまつ物のほしく侍りつるまゝに灰を、かれて侍りけるをさるへき物にこそと思ひてこれをたべつるほどに物のほしさなをりてのち灰にて侍りける事ははしめてさとり侍れいせめてのかやらの物をも食し侍りぬへかりけりよしなき心をおこし侍りける物かなどくやししく思ひ給へてとなん申す帝つふさに此事をき、給ひて御涙をなかせられ感しさせ給ふなんちの盗人なれども賢者なりこゝろのそこいさきよし我王位にあれども愚者といふへしむなしく忠臣のあとをうしなへりはやくまかりかへり候へ明日めし出し父のあとをおこさしめんとおほせられけれぬす人なく、出にけり其のちほいのことくつかへ奉りてすないち父のあとをなんつたぐたりけるまかれの上人の身命をすてしも勝他名聞をさきとす貧者かざいほうをぬすめるもきよくうるのしきこゝろありすへて人のこゝろのうちたやすくよ所にはかりかたしされは魚にあらされの水のたのしみをあらすといへるも此心なるへし

橘逸勢之女子配所にいたる事

むかし橘逸勢といふ人事ありてあつまのかたへなかせられる時そのゆかりの人なけきかなしむたくひおほかりける中になさけなき女子のことに取分さるかたく思ふありけり主もか

くうき事にあへるをいさる物にてこれにわかれむことを思へりむすめい本はぬ事をは、かりわすればちをすてかなしみをたれてもろどもにゆかんとすおほやけの使かきりなくいと おしく覺ゆれとなかさるゝ人のならひにて事のきこえもひんなかるへけれのかたくいさめてゆるさすせめて思ひあまりけるにやそのあとを尋ねつゝむまやつたひによるゝなむ行ける身にたへたらん人たに去らぬ野山をこえてよなく、たつねゆかむことのあるへき事にもあらずまして女の身なれのおほろけにていたりつくへくもあらねと佛天やあはれとおほしけんからうしてつゝおにかしこにいたりつきにけり遠江の國の中とかなかはなる道のほとにかたちの人にもあらず影のことくやせをとろへてぬれまはれたるやうにてたつねきたりけり待つて見けんおやのこゝろいかばかりおほえけん去ほとに行つきていく程もへす父おもきやまひをうけたりけれぬ此むすめひとりそひて残り居てひめもすよもすからおこなひつとむるさまさらにも身命をおしますこれを見きく人なみたをなかしあひれみかなしまぬいなし後にいあまねく國の中こそりてたうとみあへりわざとまうてつゝえむをむすふたくひもおほくなありけるさてほとへて後國の守につけてみかどに事の上を申ゆるされをかうふりて父のかはねをみやこへもてのほりてけうやうのをいりせんとこひけれのをのありさまをきこしめしておとろきて又ことなくゆるされけりよろこひてすなひちかのほねをくびにかけかへりのほりにけりむかしも今もまことに心さしふかくなりぬる事いかならすとくるなるへし

盲者關東下向の事

あつまのかた修行し侍りし時さやの中山のふもどこのさきと申やしるのまへに六十はかりなるびわ法師の小ほらしひとりぐしたるか過ゆくをよひとめてかれいひくひせていくへゆくそよのつねの人たにはるかなるに旅思ひたつ事いたとくしきをいと心くるしくこそとどふらへうなたれて鎌倉のかたへまかり侍るなり人のむところありてうたへをも申さんもしの御かへりみをかうふらんなと思ひてこそ思ひたつ事なれとをのれ何事をかへ申さんことりかうふるへきうれへももち侍らすさらに期する事なした、世のすきかたさにもし一日もすこすばかりの事もやかまへらるゝとてあらぬありさまにてまかれの道のあひたのくるしみゆきつきてやどるほどのわつらひた、おほしやれといふいかに事にふれて苦しからんといとおしき中にも或智者のこくらくへまうてん事を申とて無智の者のむまれん事いたとへめしひのみちをゆかむかことしとやうげうの心を志れる人の目ある人のまうてんかことくなりと申侍りし事をきと思ひ出てわか身のうへのやうにおほゆれいねんころにとふらふいと不便の事かなさてかなふましくやおほゆるといふまことに思ひたつもおほけなき事なれと何事も心さしによるわさなれいなどかいはけまし侍らざらんよのつねの人の乗馬下人らうれうこときゆたかにもちたるもその心さしなきいまたあふみの國をたに見ぬかすもあらずかくたづくしくやすからぬ身なれとも思ひたちぬれいさすかにまからるゝ也となむかたり侍りしこれをさくにつけても我らかめしひのかたのかりか

かたくひにてまかも心さしうすき事のとにかくにとり所なくこゝろなくおほえ侍りしいさゝかたのもしき事の侍るゝ或記に云く中比もろこしにあさ夕念佛申僧ありけりそのおところちかく鸚鵡といふ鳥のねくらまめてすむありけりすなち念佛のこゑをきゝならひてかの鳥のくせなれい口まねをしつゝ阿彌陀佛となく人こそりてこれをあわれみほむるほどに此鳥をのつからまらぬ寺の僧どもこれをとりてほりうつみたりける後そのところより蓮華一もどおひいてたりおとろきなからほりてみれいかのあふむの舌をねとしてなん生出たりけるかのとり口まねのいみしきにもあらず悲願のねんころなるゆへにこゝろに信すともなけれども口にとなへつれいりやくのむなしからぬにこそ侍らめかゝれい我らか散心念佛とてもをろかなるへきにもあらず

長樂寺の尼不動の志るしをあらはす事

ちかきころ南都に僧ありけりとしころ三尺の不動尊をほんそんとしてあさゆふおこなひける程にある時ぎやうぼうのあひたに目をふさきて念じゆするほどに此本尊うせ給ひてたゝむなしき坐ばかり残りあさましくめつらかにおほえてさまさまにうたかひをなすもしこれ魔のまわさか若い又わか不信けだいに佛意にかなはぬかなと一かたならず心をくたきかなしみをなすほどにまのしありて見たてまつれいたゝもとのやうにておはしますとにかくにこゝろえかたく思ふほどにそのちかくうせ給ふ事たひくになりけりたちまちに沐浴しことにけつさいして七日かあひたをいたして三時の行法をして此事をいのりた

てまつる程に夢にみるやう本尊の御まへにてうつゝに見るかごとく此事をあやしみうたかふあひたにはんそんつけてのたまひくなんち此ことおとろくへからす此廿四年われをたのみりんじうのましやうをいのる者ありこれをたすけんかためにときくゆきむかふなりとのたまふ僧夢のうちにてたへたてまつりて申さくいつれのところにたれと申人そこたへてのたまはく北京ひかし山のはどりに長樂寺といふ所に唯蓮房といふ尼是なりをりちかくなりたれの今二三年のなをときく行むかふへきなりとのたまふと見て夢さめぬ此僧ふしきの思ひをなしてなみたをなかくしてやかて長樂寺へたつねゆきてまかくのあまやあるととふにさたかにありけりまさしくそのいはりにいたりてみれぬ戸引たてゝ人もなしとなり人のをしへけるまゝに雲居寺にいたりてたつねあひてまさしくたいめんしたりけりまつ此事をいひす物かたりなとして後の世のつとめに何ことをかひし給ふとふ尼のいふやう念佛の外にのさらにつとむる事なしといふなをく志めてまかにとひける時此廿年はかり不動の慈救呪をこそ日ごとに廿一返みてゝりんじう正念ならん事を祈り侍るといふ僧この事をきいてまことにいゆへなく尋まうてきたるにあらすとてありしやうをはしめよりかたりけれぬあまもなみたをおさへつゝたのもしくたうとき事なりとよろこひてたかひに一佛土のちきりをむすひてなんざりにけるそのちいほともなくて此尼おもきやまひをうけたりあたりの人いきかたきよしをいひてさまくどふらひけるにことしの志に侍るまし明年二月十五日にこそまかりかへるへき日にて侍るといひける程にそのたひい

ぬあくるとし二月十五日ひつしの時にやまひもなくをり正念にて不動の印をむすひて端座していきたえにけり此尼の長樂寺にいほりを結ひたりけれとある事もなし雲居寺の念佛の衆になりてつねにのかの寺にのみ住て念佛より外のいとなみなかりけりすへて人にあひてこまやかに物かたりしうちわらふ事などもなしほとくはしたなきやうになんあいらひける此十一年かさきの事なれのみ人見きけること也かのならの僧の名もすなわち覺え侍しかと忘れにけりとを或人かたり侍りし末世なれと志んし奉る人のためにいかゝるふしきも侍りけるなり道心なき人のならひにて我心のつたなきをいゝらす萬のどかを世のすゑにおほせてむなく退心をおこすのをろかなる事也

或武士之母子をうらみて頓死の事

近ころひとりの武者ありけりをのか身の世にあひてくたれる母をなんもちたりけるもどより孝のこゝろうすさうへにおもてふせにさへ思ひまゝ母をのみおもく思ひけれぬよのつねのおや子のやうにむつひまみゆることもなしかれとさすかにまさしき母なれぬかたのこどくなるどころをなむとらせたりけるかの母その所をえてかしこにゆきて湯などあみておたりけるあひたにまゝ母のよからすといひけるによりて母か所知をあらためたちまちにこど人にとらせてけりそのあたりの人きゝおとろきて此よしを母に告たりけれぬさらぬ我にこそつけゝれめさる事のほかの事のある物かんとてまこととせすかゝるほどにかの庄の沙汰の者申さく下文をもて来て母によりみきかせける時あまり事きいまりてとはかり物もい

はすあきれたるやうにてゐたるとみるほどにけしきのことの外にみゆるをあやしめて引う
 こかすにいふ甲斐なきさまなりはや居なからいきたえたるなりけりすなわちあくまんの熾
 盛なるゆへなるへしさてかの武者のその思ひをやかうふりたりけん程なくほろひうせにけ
 りどを名のたしかなれど當時の事なれはわざとかず又ちかき比法勝寺の九ぢうの塔いか
 つちの火のためにやけ侍りし時かの寺の執行これを見てかなしみにあたえすたえ入てその日
 のうちに命をのる事のみな人あまねく去れりこれほうめつのはたいしんのつよくおこるな
 るへしか、れの今の世までも善惡に付て心のおこる事かくのことしいか、佛道をねか、ん
 にいたりて世のすゑとて卑下のこゝろをおこすへきまかのみならずおとこをんなにあいち
 やくしていのちをすて勝他名聞のためにかんたんをくたくやうなどの末代とても熾盛なら
 すや、見えたる事のためによりに、奔打といふ者どもあつまりてすころくうつをきけ、夜も
 いねすひるもたちさる事もなく七八日などかた時もやすますそのあひたの身のくるしさ心
 をくたくさまたとへていはん方なしされどとんよくせうたの心のせちなる身力にてをのつ
 からこゝろをやしなふかたもあるにや目もつぶれすこしもすくますかきりあれ、かの大施
 太子の如意珠給ひけん心さしもかくはかりこそいどを見ゆる又こゝろをつみてふしきをあら
 いせる事をい、田樂猿樂などの中にかたなたまといひてあやうきわさする者ありこれを
 みれ、かたな六つを三人してとるむねと上手なる者を、中にたて、まへにむかへる者一人
 うしろのかたに一人をの、刀三つをもちて前後より我をどらしとはやくなけかくるを中

にて前よりなくなるをとりてうしろへなけやり後よりなくなるをいまへさまへなけやるすへて
 六のかたなをどかくさはきやるさま凡夫のまわさともおほえす人つてにきか、信すへくも
 あらぬ事なりこれのまたふしきにあらずひとへにこゝろをつめるかいたすところなりもしく
 とくのためにかくこゝろをつみ勇猛まやうしんの心をおこさむに、現身に三昧をもえつへし
 うつゝに佛菩薩をも見たてまつるへしよしなきすさひに、かく心をいるれども善根といへ
 んゆるく懈怠なるなり中にもあみた佛の悲く、ん、なをさりなる事か、諸佛のすて給へる
 五ぎやくの悪人をもたすけんどちかひ給へれ、むかしも今も智あるも智なきも貴賤道俗老
 少男女をえら、すわうしやうするためしみ、にみちまなこにさへきれりきけどもまんせす
 みれどもたうとますた、末世の我らか分にあらすとのみもてはなれてあるひ、宿善といひ
 あるひ、天竺のまわさなどいひつゝ、行者のはげみとほどけの、ん、りきとを、我もまんせ
 す人にも退心をおこさする、いとこゝろうき事なりかくかしくたうときかとおもへ、いさ
 きの世の業報さたまりてえかたき福祐を、いかにせんと火水に入こどくほどけかみに、い
 りさ、いき晝夜にわしりもどむせん、た、ふかくむみやうの酒にたふらかされて正念をうし
 なへるなるへし

老尼死後橘のむしとなる事

ちかころある僧の家に大きなるたち花の木ありけり實のおほくなるのみにあらずそのあち
 んひも心ことなりけれ、あるしの僧又たくひなき物になん思へりけるかの家のとなりにと

したかきあまひとすみけりおもきやまひをうけて床にふして日ころ物もくはす湯水などもはかしくのみ入ぬほどになれりけるか此たちのなを見てかれをくはやくといひければすなわちとなりへ人をやりてかくなむといはせたりければなさけなくかたくおしみてひとつもをこせす此病人のいはくやすからす心うき事かなやまひすてにせめていのちけふあすにありたどひよくふとも二三にやすくへきをれほどの物をおしみてわかぬかひをかないせぬの口おしきわさなり我極樂にむまれん事をぬかひつれと今にいたりてかのたちのなをばみつくすむしとならんとそのいきとをりをとけすの浄土にむまるゝ事をえしといひてまゝぬとなり僧此ことをまらすして日ころ過けるほどにこの橋のおちたるをとりてくいとて皮をむきてみるにたち花のふくろことにまろきむしの五六分ばかりなるありおとろきていつれもかゝるなんめりやと思ひてみれいそらのたちはなさなからおなしやうになむありければ何にかいせんどてはてにその本をきりすてけり願力といひなからさしもおほくの虫となりけん事いみしきふしきなりかれ悪事を思ふにくたりさまの事なれいかなひやすく侍るにこそ

四條宮の半者人^{はしたもの}を咒咀して乞食となる事

中ころとしたかきあまのさすかに人にまられて乞食しありくあり我身のありさまみつからかたりけるいもとの四條の宮のはした物みなそことなんいひけるおどこの受領になりてくたりける時ぐして下らんといさなひければ宮にもいとま申さふらふ人々にもそのよしきこ

えて心ばかり出たつおほやけにも旅の志やうそく給いせ女はうなどもをのくあふきたうかみやうのはなむけあまねくころさしけりすてにあかつきとてかさねてことよしきこえて里に出つゝむかへの車をまつほどにその日をどつれもなしあやしくてもしくたりおびたるかどたつぬれいはや此あかつき下り給ひぬ北のかたの日ころいそらまらすして此後半はかりたゝあらしかどこそ思ひつれまことに我をきてたれをぐして行へきそとむつからせ給ひつれいやかて北の方もろどもにくたり給ひぬといふ悪心おこるなとのをろかなり人のまつ思はん事もころうければそのち宮へもまいらすやかてその日よりきよまひりして貴ふねへ百夜まいらして申侍りしやう我身をたやかにて人をあしかれと申さのこそかたからめかの人をうしなひ給へ我いのちをたてまつらんもしなをいけらはこのじきする身となり後世に無間地こくにおつる果報をうくるともそれをいられへとせすたゝ此いきどをりをたすけ給へとなん二心なく申侍りし此おとこいたゝめんほくなくなむとはかり心くるしく思ひやりてさほどふかく思ふらんといゝあらさりけり國に下りつきて一月ばかりありけるほどにかの北のかた湯殿におりたりける時湯のけの中へ天井のうへよりまたらうづはきたるあしの一尺ばかりなるをさしおろしたるかみえければ女房にかれのみるやとどひければこと人のめにい見えすかくておどろきおそれてゆもあみすさひきのほりにけるよりやかておもくわつらひてほどなくうせにけりどを京にいまた百日にみたさしし程にきてこゝろの中よろこひ申つくすへからすそのちどかく事たかひて世にあるへくもなく

をどろへてはてにいかく乞食をしありき侍るなりともすれの罪ふかくおそろしき夢など見え侍れどさしも申てし事なれにさらけにうらむるにあらすなん侍るかくいたくおひせまりて後こそ何しにつみふかくさる悪心をおこして二世不得の身になりぬらんと思ひかへし侍れどかひもなしとそいひける

金峯山にて犯妻者としへて盲となる事

河内の國より妻男あひくして御嶽へまいる者ありけり夜に入てまうてつきていとくるしくおほえけれの禮堂にうちやすみつゝ妻男さしならひてあからさまによりふしたりけるほどにいふかひなくまどろみけりやゝひさしくありてねさめたるにかたのらに女ありねほれたる心に物まうてといふ事ふつと忘れぬわか家にあるやうにおほえて何とも思ひわかす此妻を、かしのやうく目さめゆくほどに思ひ出れの金剛藏王の御まへなりけりともかくもいふはかりなし家にありてまやうじんなどはしめたる程たにいさゝかもをこたる事あれの時をすこさすおそろしき事のみあるにかはかりのあやまりをしつたゝ今罰をかうふらん事うたかひなしといいかゝすへきと妻男おとろきかなしむまつ御まへを出て河のはどりにふたりゆきてよくく水あみていひかなしみつゝなくくをこたり申て出にけりたくひなき程の事なれに人にもかたらすこゝろのうちに今やくとまたれつゝ月日をくれと妻も男もさらにその御どかめとおほゆる事なしことゆへなくてとし比すきにけり此事のよはひ廿はかりのおりにやありけんさて四十餘年へてのちまたしき者の御嶽へまいるとてあなから

にけしかりけるをさしもあるへき事かゝなりといふほどにをのつからいひあがりていでやことくしくものたまふ物かなおきなそのかみまかゝのわさをまさしく藏王の御前にてをかしたりしかとさらに事もなくてすてに六十にあたりたりよろつ事たゝいふといはぬとなりと云これとさく人いままさらあさましとおとろきあへりけるほどにかくいひて寝たりける夜の中に兩の目つふれにけりとこれのちかき世の事なりすへて佛神の化機かくのことしかつゝ凡夫のをろかなる事をかゝみ給ひ且いさんげのなをさりならぬによりそのとかをゆるし給ひけるをあらす不善の心をもてすいやくの御まかへをかるしめたてまつり人の信心をみたらんとしける故にふるきあやまりさらにおもきとかとなりけるなるへし

聖梵永朝山を離て南都にすむ事

中比奈良に聖梵入寺永朝僧都といふ二人の智者ありもとの山におなしやうに學文して住けりそのころいみしき同志のわか人ともおほくて彼らにすぐれん事もありかたくおほえてけれの二人いひあひせつゝ山をわかれて奈良へなんうつりける奈良坂にいたりてはるかに見やるに興福寺のかたに人おほくおこぞりていみしうにきやかなり東大寺のかたに人すくなにて物さひしきやうに見えければ聖梵もどよりこゝろすなをならぬ者にてこゝろの中に思ふやう人おほき所にて思ふさまになりてん事いさめてかたし東大寺のかたへこそ行へかりけれと思ひて永朝にいふ一所にていあしかりなんそなたに興福寺へいませ我の

本より三論宗をすこし學したれの東大寺へまからんといひてそこよりなんをのくゆきわかれける此ふたりをどらぬ智者なれど永朝の心うるのしき者にてゆくまゝに興福寺へいたりて程なくすゝみて僧都になりぬ聖梵のまさりかほもなかりけれの月のあかりける夜つくくゝと身のありさまをおもひつゝけてよみける

むかし見し月の影にもにたるかな我どもにや山をいてけん此聖梵がくしやうのかたにのいみしき聞えありけれと人のためはらわしくてさるへききやうろんなどを人にかりてことなる要文あるとこをの切とりさりけなくつぎよせてなむかへしけるかきゝりたる文のきれちいさきからひつにひとはたにそ成たりけるかゝるうたてき心をもちたるゆへに智者といへどもその志るしもなし現世にいつかさもならずつゝの目ぬけてりんじうにのさまゝ罪ふかき相ともあらひれてかのあはうのといひてをのりにける何のちゑもつとめも心うるのしくてそのうへの事也さて永朝僧都の春日の社につねにこもりけるに神感あらたにて夢の中に御すかた見たてまつる事いたひゝになりけれとも御うしろをのみ見てむかひて見え給ふ事のなかりけれのあやしくほいなくおほえてことに志んをいたしていのり申ける時ゆめの中におほせられけるやうなんちうらむる所あかるへしたゝしいとおしくおほしめせともすへて我に後世の事を申さぬのえむかひての見ぬなりとおほせ給ふとなん見たりける末世の機に志たかひてかりに神とこそ現し給へとまことにの化度衆生の御心さしよりおこりけれの現世の事をのみのりしをの本意なくおほしめすなるへし

前兵衛尉通世往生の事

ちかく前兵衛尉なる男ありけりをとゝの檢非違使になり大夫少輔まていたりて世にあひたるをかく數ならぬ事のこゝろうくおほえけれのとし比賀茂につかうまつる者にてことに信をいたしてうちつゝき日ころまうてつゝなくゝ此事をいのり申あひたに御殿に籠居たりける夜夢にみるやう御前にさふらひてうつゝにも思ふ事共を涙をなかしつゝかきくとき申ほどに寶殿の御戸をひらき給ふあななたしけなとかしこまりおそれてえまなををあてすうつぶしたるに夜の中のことにあかくなるやうにおほゆるをあやしくてきと見あけたれのやしゝのうちに阿彌陀如来あきらかに現し給へりその御ひかりの十方にかゝやけるなりいとたうとくめてたくおほえてなみたをなかしつゝおかみたてまつると思ふほどに夢さめぬそのうちつゝと此事を思ふにわか申事をきこしめし入ぬことを思ひてこそ口おしかりつれかくあらひれて見え給ふにてのもし此生の事いさきの世の業報にて神もちから及び給ひぬか又今生のおほしめすかことくして本地のおほしますかたをあらひし給へるの御はからひあさからぬ事なめりとしたのもしく覺えけるよりさるへきにやありけん心おこしてやかてかしらおろしてけり其後現世の事の夢まほろしのさかへなりけりと思ひしられてことになれつゝこれをまことにすくれたる神徳なりけりとかの夢のうちの御ありさまのこゝろにかゝりてめてたくたのもしくおほえけれの寝ても寤めても念佛ひまなく申てあかしくらしけるほどに二三日わつらひていたくもなやますらん志う正念にてねかひのことく念佛たかく

申てをのりにけりまことに浮雲のとてもかくてもありぬへし是もかの桓舜僧都のたくひにこそ世の思ふやうならぬより得脱すへきえんのありけるにこそ

或上人神供の鯉を放ち夢中に怨らるゝ事

あるひしり船にのりてあふみの水うみを過ける程にあみふねに大きな鯉をとりてもてゆきけるかいまたいきてふためきけるをあわれみ着たりける小袖をぬきてかひとりてはなちけりいみしき功德つくりつと思ふほどにその夜の夢に白かりきぬきたるおきなひとり我をたつねてきたりいみしうらみたる氣しきなるをあやしくとひけれの我のひるあみにひかれていのちをばらんとしつる鯉なりひしりの御志の口おしく侍れの事申さむとてなりといふひしりいふやう此事こそ心えねよろこひをこそいはるへきにあまさへうらみらるらむいとあたらぬ事なりといふおきないはく志か侍りされと我うろくづの身をうけてとくたつの期をあらす此水うみのそにておほくのとしをつめり志かるをたま〜賀茂の供祭になりてそれをえんとして苦患をまぬかれなむとつかまつりつるをさかしき事をし給ひて又ちくしやうのどうをのべ給へるなりといふとなむ見たりける

下山の僧川合の社の前にて絶入事

中比の事にや山よりくたりける僧ありけりたすのまへの河原をすぐるにおさなきわらへ三人をののいみしく諍論する事あり此僧たちと〜まりてそのゆへをどふ童のいふやうこゝにおぼつかなき事侍り神の御まへにてまつ人のよみ給ふ經の名をさま〜に申て我こそ

よくいへどかたみに論し侍るなりといふおかしと思ひてひとりつゝこれをとへ一人の眞經と云一人の深經と云一人の神經と云僧うちわらひこれのみなひがことを心經とこそいへといへいひやみてみなさりぬかくて一町はかり行ほどに河原中にはかにまくれてたふれぬ夢のことくにてふしたる程にやむことなき人まくらにきたりてのたまふやうなんちかまわさこゝろえす此おさなき者ともいふことみなそのいはれあり眞經と云ひがことにあらず實の法なれの深經といふ又ひがことにあらずふかきことなりなれの神經といふもたかす神明のことにめて給ふ經なれの此事をや〜ひさしく論しつれいにもかくにもめてた〜く聞つるをなんちか事をきる故にいひやみてさりぬ口おしけれの事まめさんどてなりとおほせらるゝと見てあせうちなかれあへてことなくなむおきたりける神の法にめて給ふ御心さしふかげにあはれなる事なりをも〜事のついでことにかきつゝ侍るほどにをのつから神明の御事おほくなりけりむかしの餘執かなとあさけりも侍るへけれとあなちちにもてはなれんと思ふへきにもあらずそのゆへにおほむねすゑの世のわれらかためいた〜とひ後世を思はんにつけてもかならず神にいのり申へきとおほえ侍るなりもろ〜の事おりをえどころにより身にまたかへることのつとむるもやすく又その志るしも侍るなり釋尊入滅の後二千よ年天ちくをされる事數萬里わつかにしやうげうつたはりたまふといへども正像すてにすぎておこなふ人もかたくその志るしも又まれなりこゝに諸佛はさつ惡世の衆生の邊卑のさかひにむまれ無佛の世にまどひてうかふかたなからん事をか〜み給ひてわか

機にかなはんためにいやしき鬼神のとつらとなり給へんかつのあくまをたかへ佛法をま
 もりかつの賞罰をあらひして信心をおこさしめ給ふこれすなりち利生方便のねんころなる
 よりおこれるなり中にも我國のありさま神明のたすけならすのいかてか人民もやすく國土
 もをたやかならん小國邊界のさかひなれ國のちからよく人のこゝろもをろかなるへし
 かくして天魔のためになやまされあらひれて大國の王に領せられつゝやすきそらもな
 くてこそ侍らましかたどひ佛法わたり給へりともあくまのさまたけこほくしてちよく世
 の今にひろまり給へん事きりめてかたしかの天竺の南州の最中まさしく佛の出給へりし國
 なれど像法のすゑより諸天のおうごやうくをどろへ佛法滅し給へるかことしりやうじゆ
 せんのいにしへの事虎狼のすみかとなり祇園志やうじやのふるきみきりのわつかに石すへ
 はかりこそ残りて侍るなれまかるを吾國のむかしいさなみいさなきのみことより百王の
 今にいたるまでひさしく神の御國としてそのかごなをあらたなりあまさへ新羅高麗支那百
 濟などいひていきはひ事の外なる國くさへまたかひつゝ五ぢよく亂慢のいやしきもなを
 大せうさかりにひろまり給へりもし國にぎやくしんあれの月日をめぐらすこれをほろぼ
 し天ま佛法をかたふけんすれの鬼王としてたいぢし給ふこれより佛法王法をどろふる事
 なく民やすく國をたやかなりあきらけきまゆじやうの願樂世々のかういんをかみ給ひて
 これにまたかへるめくみたどへん水のうつは物にまたかふかことし君の御ためにいたかさ
 大神とあらひれ民のためにいやしき道祖神となり智慧のまへには本地をあらひし邪見の

家に佛法をいましめ給ふ後世をあらぬともからいさいはひをいのらんためにあゆみをは
 こふ因果にくらき人の罰をおそれてあふきたてまつるか、れり里の中道のはどりなどに大
 きなる木一二本もみゆる所みなあやしけれと神のいます所なり寺のはどりの草木いつら人
 のうへをきけるとかめのゝしるたにひまをはかりてきりほろほすやうやく堂舎をこぼちと
 りほどけの場にもろくの不淨を行すまことにめもあてられぬ事おほくこそ侍れけにも神
 とあらひれ給へさらましかの無惡不造のともから何につけてか露のかりのえんをむすひた
 てまつらましと思ひとけバかくさかきみてぐらよりはしめかたくなる宜稱かつ、みのを
 どまでもみな開樂悟入の御かまへなりとあらひれにかたしけなくなむ侍りまかれのすなりち
 現世のもろく、のそみこそかりのはうべんとこそあらしめ給はめ出離生死をいのり申さ
 んにいたりていひかてか化度の本懷をあらひし給へさらむとおほえ侍るなり

明治三十四年十月

近藤 圭 造

發心集第八終

春秋のうつりかはるにつけて、空のけしきもあらたまりつゝ、雨となり風となり、雲となり霧となる、世の有さまも又かくのとし、我國の萬にすぐれたるいふもさらなれど、あらきのふね渚にたゝよひ、むくりのいくさ、はどりをうかゝひしためしなきにしもあらず、ふみやの頭たひら、常にこれをうれへ、保己一檢校をして、ひろくもろくのふみをかうかへしめ、あらぬ國よりあたせしたくひ、とさらけにえりいてゝ、たてまつりしかり、やかておほやけのふどのおさめ、あろかねなどたひて、其いさをしをほめさせ給ひき、今やよつの海志つかにして、やしまの浪立さはくとなしといへとも、のとけき花のあしたに、雨風をおそれ、さやけき月の夕に、くも霧をいとはさる事なし、これこのふみをつくるゆへむにして、弓を袋にし、つるきをはこにせし御代にも、ものゝふのやまとたましぬを、うしなひさらむとをおもふになむありける、文化やつのとし、靜寛堂のあるしこれをあるす、

わかおほやまどの國は、細戈の千たる國にて、人の心いさをしく、たけきみちなむこと國に
 いまさりたりける、されはよろつのくにより、きて犯さむことかなひかたきわさなめり、ま
 かはあれど、くれ竹のよをふるほどに、かた糸のよりく、さることなきにしもあらざりし
 かど、やかてうちとりせめほろはされて、いきてかへる人なむまれなりし、こと國にいはどり
 のえみし、うちつ國をうかひて、終にきみとなり、世をさるたくひもなくやはあらぬ、か
 れいこそ、すくれたりといふなりけれ、このころおほやけのおほせことにて、代々のふる
 ことかきあつむるまゝに、己つからひろくふみ見る中より、このすちによりたること、もを
 ぬきいて、いつまきとなしつ、なつて螢蠅抄といふ、こは螢火のかやく神、五月蠅なす
 あしき神のあらひにて、えみしらの此國にあたすることありとも、やかて神風に吹やふら
 れて、遂にうれひなからむ理りを、世人にあらせむとてなむ、

文化八年二月五日

檢按保己一

螢蠅抄引用書目

舊事紀	日本後紀	續日本後紀	三代實錄
日本紀略	扶桑略記	百練抄	一代要記
帝王編年記	歷代皇紀	神皇正統錄	神皇正統記
神明鏡	皇代略記	皇年代記	皇年代略記
大日本傳皇代記	天地根元歷代圖	和漢合符	和漢合運
日本運上錄	天正中年代記	興福寺年代記	如是院年代記
大鏡	大鏡裏書	増鏡	五代帝王物語
伏見院御記	後崇光院御記	小右記	竹林院左府記
園太曆	左經記	吉續記	仁部記
勘仲記	太田康有記	臥雲日件錄	類聚三代格
西宮記	北山抄	朝野群載	本朝文粹
善隣國寶記	類聚神祇本源	太神宮例文	伊勢公卿勅使雜例
公勅卿使參宮次第	度會元長神祇百首	八幡愚童記	八幡愚童訓
神功皇后繪詞	由良八幡緣起	大安寺八幡緣起	諏訪大明神繪詞
藤森緣起	伊豫國三島社緣起	宇津宮大明神奇瑞記	
春日社三十講最初御願文		類聚大補任	仁和寺御傳

- | | | | |
|-----------|----------|----------|----------|
| 天台座主記 | 東寺長者補任 | 元亨釋書 | 密嚴上人行狀記 |
| 興正菩薩傳 | 忍性菩薩行狀略頌 | 眞源大照禪師行狀 | 妙慈弘濟大師行記 |
| 日蓮註畫贊 | 蓮公略傳 | 蓮公年譜 | 日蓮化導記 |
| 日蓮親書簾漫茶羅記 | 門葉記 | 東寶記 | 醍醐枝葉抄 |
| 孔雀經御修法記 | 五壇法記 | 伽藍開基記 | 將軍執權次第 |
| 關東評定傳 | 北條九代記 | 新式目 | 成氏朝臣年中行事 |
| 保曆間記 | 太平記 | 竹崎五郎繪詞 | 豫章記 |
| 龍造寺記 | 尊卑分脈 | 大中臣氏系圖 | 大藏氏系圖 |
| 日下部氏系圖 | 北條系圖 | 大友家譜 | 宇郡宮系圖 |
| 吉見系圖 | 菊池系圖 | 菊池家譜 | 武藤少貳系圖 |
| 武藤少貳家譜 | 河野家譜 | 稻葉家譜 | 宗家譜 |
| 田尻家譜 | 常陸國吉田社文書 | 西大寺文書 | 興福寺唐院文書 |
| 東寺文書 | 東寺引付 | 高野山文書 | 尾張國性海寺文書 |
| 島津文書 | 志賀文書 | 野上文書 | 田尻文書 |
| 菊池武朝申狀 | 室親善申狀 | 春乃深山路 | 大槐秘抄 |
| 國牛十圖 | 璫囊抄 | 海人藻芥 | 鎮西要略 |
| 東鏡末記 | 弘安記 | 異稱日本傳 | 異賊襲來祈禱注錄 |

螢蠅抄第一

神明鏡云蒙古我朝へ寄ル事開化ヨリ始ル仲哀ニハ新羅高麗百濟也仍神功皇后御對治其後欽明敏達推古天智宇多一條御宇也每度以神力對治中ニモ文永并弘安ニハ當以奇特神變共也

按一條當作後一條一代要記類聚大補任亦爲一條誤

類聚大補任云新羅國百濟國刀伊國一名蒙古國軍渡時代第九代開化天皇十九年新羅國合戰十萬八千人渡四十八年合戰二十萬三千人渡第十四代仲哀天皇々々崩御之後皇后於豐浦島得如意珠到高麗百濟新羅國降伏第十五代神功皇后新羅合戰五度內廿年新羅軍三萬八千人廿五年五萬三千人卅七年四萬三千人四十四年十萬人五十一年十萬人第十六代應神天皇廿三年新羅軍來第卅代欽明天皇五年新羅軍來第卅一代敏達天皇四年辛巳新羅軍起從大宰府迄明石浦皆燒失第卅四代推古天皇八年庚申新羅合戰第卅九代天智天皇元年百濟國軍船七十艘二年同國王卒四年新羅軍兵二萬七千人第六十六代一條院刀伊國異賊渡軍自開化天皇御宇至于一條院御時十代間異國賊來事以上十六箇度云々

八幡愚童記云情算異敵之襲來人皇九代開化天皇四十八年廿二萬三千人仲哀天皇御宇廿萬三千人神功皇后御代卅萬八千五百人應神天皇御時廿五萬人欽明天皇御宇卅萬四百餘人敏達天皇御代ニハ播磨國明石浦迄着ケリ推古天皇八年四十三萬人天智天皇元年二萬三千人桓武天皇六年四十萬人文永弘安御宇ニ至マテ以上十一ヶ度雖襲來皆追歸サレ多滅亡セリ

伊豫國三島社緣起云人皇九代開化天皇位四十八年從異國我朝渡十四代仲哀天皇位此御

宇異國塵輪云物長門國豐浦郡渡十五代神功皇后位從異國朝敵渡十六代應神天皇位異國敵日本渡三十代欽明天皇位此代異國渡三十一代敏達天皇位從異國播磨國明石浦攻寄舍光三曆壬辰扶桑州蝦蟇州流泉州高麗國軍渡卅四代推古天皇位願轉元年辛丑從異國渡卅九代天智天皇位白鳳元年辛酉異國渡

一代要記云欽明天皇五年新羅軍來推古天皇八年庚申或記云新羅合戰又云此御時異國軍從太宰府至播磨國燒明石浦云々天智天皇元年壬戌或記云今年百濟國軍船七十艘來二年癸亥百濟滅或記云百濟王卒四年乙丑或記云三月新羅軍兵二萬七千人伐之一條院此御代刀夷國凶賊渡自開化天皇御宇至當代異國賊卒來十六度

神功皇后繪詞云仲哀天皇御宇二年癸酉歲にあたりて新羅國より數萬の軍兵攻きたり日本を討捕らむとす然間天皇みつから五萬餘人の官軍を前後に相從へて長門國豐浦宮にして異國の凶賊を拒かしめ給ふ此時異國より塵輪と云不思議者の色の赤く頭ハ入にして形鬼神のこどくなるか黒雲に乗て日本に着人民をとりころすこと數をふらす天皇安倍高丸介丸に仰て惣門をかためさせ塵輪きたらはいそき奏し申へし人臣の力にてたやすく討事あるへからず我十善の力を以てかの者を降伏せしめんと仰せふくめらる即彼二人弓箭を帶して門の兩方を守護するに第六日にあたりて塵輪黒雲に乗して出来る高丸武内の大を以て此由を奏するに御門御弓をとり矢をはけて射させ給へし塵輪か頸忽に射きられて頸と身と二になりて落にけりかゝる所に何とかしたりけむ流矢まいりて玉躰につゝかあり同九年二月六日御年

五十二にして筑紫の檀日の宮に於て終に崩御畢又見八幡愚童記由良八幡大安寺八幡等緣起

舊事紀仲哀天皇紀云八年春正月天皇幸筑紫討熊襲之議矣時有神託皇后誨曰云々天皇不信神教誨猶親擊熊襲中賊矢也九年春二月癸卯朔丁未天皇忽有痛身而明日崩于時

年五十二即知不信神教而中賊矢早崩之矣按日本紀一說亦爲天皇中賊矢崩然今不論之以有所釋也

天正中年代記云欽明天皇僧聽元庚午自新羅百濟兵船六萬艘責來按庚午即位十三年也舒明天皇和景繩

二乙未自異國兵船二萬艘對馬迄責來按乙未即位八年也和漢合符云推古天皇廿七丁丑新羅兵襲來

豫章記云益躬府中樹下御箱有仍樹下押領當國國司被任推古天皇御宇三韓襲來ル戎人八千人鉄人爲大將來然者伐射不叶以人爲糧食筑紫九ヶ國者禦ニ手ナシ向者大半被打殺或山林逃隱惣向者無之西國マテ打上ル爰益躬夷敵退治事家先例トテ勅ヲ承リ九州ニ發向シ見給フニ味方一人モナシ詮方盡テ俄ニ知謀ヲ設先降ヲ乞テ申様我生ナカラニシテ得武藝ト云へ共日本武將劣識不知之去レハ日本ノ住居モ懶有願ハ御手ノ奴ト作忠ヲ致恩願ヲ蒙リ度也殊日本山嶮水深無案内ノ人輒可透地ニ非ス我案内致存知也先引可申云ケレハケニモ相好伶利諸藝可將器量也トテ即降ヲ赦彼鉄人馬ヲ先立テ打上ル程益躬如何近付寄テ伺ヒ見ニ鉄身ト云へ共肉身ノ處可有思ヒ窺見行程ニ播磨國明石浦ニ著此處ヨリ陸地ニテ風景面白處ナリト云ケレハ舟ヲハ室津高砂ニ止馬共追下打乘蟹坂ヲ越彼坂上レハ下ル坂ナレハ須磨ヤ明石ノ浦傳景モ勝處ナレハ鉄人モ乘興足舉馬ノ上ヨリ遠見シテ彼是問ケルヲ答

體ニテ見レハ足ノ裏ニ眼有誠神明御示現ヨト喜テ袖下ニ隠持タル矢ノ鏃ハ綿線也名掃鬼以今度亦舉處ヲ抛矢ニ被投ケレハ跌ヨリ頭迄徹ケルホトニ馬ノ上ヨリ眞倒落此時迄出江橋立ト云益躬ノ被官ノ有ケルニ課頭ヲ打セラル鉄人ナレモ氣盡ヌレハ安々ト首刎是ヲ指上レハ夷國ノ習大將死スレハ士卒皆自殺也戎人八千人自害スルマ、殘黨共ハ忙然逃方モ不知迷ヒケルヲ日本者共須磨垂水ノアタリ迄逃延タル夷賊悉切捨ラル餘多切程打物皆ホトヲリ返サレハ少々ハ降ヲ赦シヨウ筋ヲ斷テ海邊ニ被放其子孫海士宿海ト成テ漁捕命ヲ續ケル故ニ西國ノ海人河野下人タルヘシト被定其間ニ殘徒四國地ニ渡テ濫妨シケルヲ益躬下向有被追伐其被切捨タル處ヲ鬼谷ト云和介郡三津北ニ有又播州大藏谷ノ西ニ三島大明神御坐ス益躬此時御勸請申ス其矢今ニ在之伊豫國ニテハ鴨部大神ト號ス又見河野稻葉等家譜日下部氏系圖云表米養父郡大領天智天皇御宇異賊襲來時爲防戰大將賜日下部姓於戰場忽被退異賊

神皇正統錄云桓武天皇延曆六年丁卯歲夷國兵此國へ襲來ル和漢合運云延曆六丁卯夷國襲來

按開化至桓武異賊事正史所不載也然諸書所記大同小異又似有據仍集爲一卷以備後考

螿蠅抄第一

螿蠅抄第二

日本後紀云弘仁三年正月甲子(五日)太宰府去十二月廿八日奏云對馬島言今月六日新羅船三艘浮於西海俄而一艘之船著於下縣郡佐須浦船中有十人言語不通消息難知其二艘者闇夜流去未知所到七日船廿餘艘在島西海中燭火相連於是遂知賊船仍殺先著者五人五人逃走後日捕獲四人即衛兵庫且發軍士又遙望新羅每夜有火光數處由茲疑懼不止仍申送者爲問其事差新羅譯語并軍殺等發遣已訖且准舊例應護要害之狀告管内并長門石見出雲等國訖者所奏消息既是大事虛實之狀續須言上而久移年月遂無所申又要害之國必發人兵應疲警備解却之事期於何日宜言其由不得更怠又量事勢不足爲虞宜令停止出雲石見長門等國護要害事

日本紀略云弘仁四年三月辛未太宰府言肥前國司今月四日解僭基肆團校尉貞弓等去二月廿九日解僭新羅一百十人駕五艘船著小(省)近島與土民相戰即打殺九人捕獲一百一人者又同月七日解僭新羅人李清等申云同國人清漢巴等自聖朝歸來云々宜明問定若願還者隨願放還遂是化來者依例進止

續日本後紀云承和九年八月丙子大宰大貳從四位上藤原朝臣衛上奏四條起請一曰新羅朝貢其來尙矣而起自聖武皇帝之代迄于聖朝(仁明)不用舊例常懷奸心苞茅不貢寄事商賈窺國消息方今民窮食乏若有不虞何用防之望請新羅國人一切禁斷不入境內報曰德澤泊(泊カ)遠外蕃歸化專禁入境事似不仁宜比于流來充糧放還商賈之輩飛帆來者所賚之物任聽

民間令得廻易了速放却四日邊要之地爲有警虞延曆年中特立制文不許開田而比年頗有墾開之事望請依延曆三年四月廿六日符一從停止許之

十年八月戊寅太宰府言對馬島上縣郡竹敷崎防人等申云從去正月中旬迄于今月六日當新羅國遙有鼓聲傾耳聽之每日三響常俟三時其聲發動加以至于黃昏火更見矣勅曰夫安不忘亂古人明戒將驕卒惰兵機所忌縱雖无事故不可不慎太宰府言對馬島司言去延曆年中以東國人配防人後以筑紫人配防人而並停廢也當百姓去弘仁年中疫癘多死急有寇賊何堪防禦望請准舊例以筑紫人爲防人者聽之

三代實錄云貞觀八年四月十七日辛卯下知太宰府云迺者京師頻視恠異陰陽寮言隣國兵可有來窺安不忘危宜勤警固七月十五日丁巳太宰府馳驛奏言肥前國基肄郡人川邊豐稻告同郡擬大領山春永語豐穗云與新羅人珍寶長共渡入新羅國造兵器器械之術還來將擊取對馬島藤津郡領葛津貞津高來郡擬大領大刀主彼杵郡人永岡藤津等是同謀者也仍副射手册卅五人名簿進之十一月十七日戊午勅曰迺者恠異頻見求之著龜新羅賊兵常窺間隙災變之發唯緣斯事夫攘災未兆退賊將來唯是神明之冥助豈云人力之所爲宜令能登因幡伯耆出雲石見隱岐長門太宰等國府班幣於邑境諸神以祈鎮護之殊効又如聞所差健兒統領選士等苟預人流會無才器徒稱爪牙之備不異蟻蚋之衛况復不教之民何禦非常之敵亦夫十步之中必有芳草百城之內寧乏精兵宜令同國府等勤加試練必得其人

九年五月廿六日甲子造八幅四天王像五條各一鋪下伯耆出雲石見隱岐長門等國下知國司

曰彼國地在西極墜近新羅警備之謀當異他國宜皈命尊像勤誠修法調伏賊心消却災變乃須點擇地勢高敞險瞰賊境之道場若素无道場新擇善地建立仁祠安置尊像請國分寺及部內練行精進僧四口各當像前依最勝王經四天王護國品書轉續經卷夜誦神咒春秋二時別一七日清淨堅固依法薰修

十一年六月十五日辛丑太宰府言去月廿二日夜新羅海賊乘艦二艘來博多津掠奪豐前國年貢絹綿即時逃竄發兵追遂不獲賊七月二日戊午是日勅譴責太宰府司曰諸國貢須使史領將一時共發不可先後零疊雖其群類而令豐前一國獨先進發亦弱奸人乘訕虎口遂使新羅寇盜乘隙致侵掠非唯亡失官物兼亦損辱國威求之往古未有前聞貽於後來當無面目雖云使人之可責抑亦府官之有怠又或人言盜賊逃去之日海邊百姓五六人冒死追戰射傷二人事若有實寧非忠敬而府司不申何近掩善又所禁之人雖有嫌疑緣是異邦最思仁恕宜停拷法深加廉問早從放却十二月四日丁亥先是太宰府言上往者新羅海賊侵掠之日差遣統領選士等擬令追討人皆懦弱憚不肯行於是調發俘囚御以膽略特張意氣一念當千今大鳥示其恠異龜筮告以兵寇鴻臚館并津厨等雖居別處无備禦侮若有非常難以應猝夷俘分居諸國常事遊蕩徒免課役多費官糧請配置處々以備不虞分爲二番別當百人每月相替交相駝役其糧料者諸國所舉俘稻利稻之內每國令運輸以給其用至是勅曰俘夷之性本異平民制御之方何用恒々若忽離舊居新移他土衣食无續心事反常則野心易驚遂致猜變宜可簡監典有謀略者令其勾當并統領選士幹事者以爲其長勉加綏誘能練武術設有諸國

糧運闕如即須府司廻撥支濟又以百人爲一番居業難給轉餉多煩宜五十人爲一番十四日丁酉遣使者於伊勢太神宮奉幣告文曰天皇我詔旨掛畏岐伊勢乃度會宇治乃五十鈴乃河上乃下都磐根爾大宮柱廣敷立高天乃原爾千木高知天稱定竟奉留天照坐皇太神乃廣前爾恐美恐美毛申賜倍止申久去六月以來太宰府度々言上須良久新羅賊舟二艘筑前國那珂郡乃荒津爾到來天豐前國乃貢調船乃絹綿乎掠奪天逃退多利又廳樓兵庫等上爾依有大鳥之恠天下求爾隣國乃兵革之事可在止下申利又肥後國爾地震風水乃灾有天舍宅悉仆顛利人民多流亡多利如此之灾古來未聞止故老等毛申止言上多利然爾陸奧國又異常奈留地震之灾言上多利自餘國々毛又頗有件灾止言上多利傳聞彼新羅人波我日本國止久岐世時與利相敵美來多利而今入來境內天奪取調物利天無懼沮之氣量其意况爾兵寇之萌自此而生加我朝久无軍旅久專忘警備多利兵乱之事尤可慎恐然我日本朝波所謂神明之國奈利神明之助護利賜波何乃兵寇加可近來岐况掛毛畏岐皇太神波我朝乃大祖止御座天食國乃天下乎照賜比護賜利然則他國異類乃加侮致乱倍岐事乎何曾聞食天警賜比拒却介賜波須在幸故是以王從五位下弘道王中臣雅樂少允從六位上大中臣朝臣冬名等乎差使天禮代乃大幣帛遠忌部神祇少祐從六位下齋部宿稱白江加弱肩爾太細取懸天持齋令捧持天奉出給布此狀乎平介久聞食天假令時世乃禍亂止之天上件寇賊之事在陪岐物奈利止毛掛毛畏支皇太神國內乃諸神達乎毛唱導岐賜比天未發向之前爾沮拒排却賜倍若賊謀已熟天兵船必來倍久在波境內爾入賜須之天逐還漂沒女賜比天我朝乃神國止畏憚來禮留故實乎澆多之失比賜布奈自此之外爾假令止之天夷俘乃逆謀叛亂之事中國乃刀兵賊難之事又水旱風雨之事疫癘飢饉之事爾至萬天爾國家乃大禍百姓乃深憂止毛可有

良牟乎波皆悉未然之外爾拂却銷滅之賜天天下无躁驚久國內平安爾鎮護利救助賜比皇御孫命乃御體乎常磐堅磐爾與天地日月共爾夜護畫護爾護幸倍於奉給倍止恐美恐美毛申賜久止申十七日庚子去夏新羅海賊掠奪貢綿又有大鳥集太宰府廳并門樓兵庫上事神祇官陰陽寮言當有隣境兵寇肥後國風水陸奧國地震損傷廨舍沒黎元是日勅令五畿七道諸國班幣境內諸神豫防後害廿五日戊申勅令五畿七道諸國限以三日轉讀金剛般若經謝地震風水之灾歷隣兵窺隙之寇焉廿八日辛亥遣從五位上守右近衛少將兼行太宰權少貳坂上大宿禰瀧守於太宰府鎮護警固勅曰鎮西者是朕之外朝也千里分符一方寄重况復隣國接壤非常巨期今聞大鳥示怪龜筮告寇機急之備豈令暫輟哉宜令瀧守勾當緣警固之事是日瀧守奏言所以置選士設甲冑者本爲備警急護不虞也謹檢博多是隣國輻輳之津警固武衛之要而塚與鴻臚相去二驛若兵出不意倉卒難備請移置統領一人選士四十(廿)人甲冑四十(廿)具於鴻臚又謹檢承前選士百人每月番上今以尋常之員備不意之禦恐機急之事實難支濟請例番之外更加他番統領二人選士百人詔並從之廿九日壬子遣使者於石清水神社奉幣仍令畧之十二年正月十三日丙子勅充壹岐島冑并手纏各二百具彼島元有甲無冑太宰府依島解請充從之十五日戊辰勅令太宰府遷置甲冑百十具於鴻臚二月十二日甲午先是太宰府言對馬島下縣郡人卜部乙屎麻呂爲捕鷓鴣鳥向新羅境乙屎麻呂爲新羅國所執縛囚禁于獄乙屎麻呂見彼國挽運材木構作大船擊鼓吹角簡士習兵乙屎麻呂竊問防援人答曰爲伐取對馬島也乙屎麻呂脫禁出獄纔得逃歸是日勅彼府去年夏言大鳥集于兵庫樓上決之下筮當夏

隣兵因茲頽幣轉經豫攘灾眚如聞新羅商船時々到彼縱託事賈販來爲侵暴若無具備恐同慢藏况新羅凶賊心懷覬覦不收蠶尾將行毒螫須令緣海諸郡特慎警固又下知因幡伯耆出雲石見隱岐等國修守禦之具焉十五日丁酉勅遣從五位下行主殿權助大中臣朝臣國雄奉幣八幡大菩薩宮及香椎廟宗像大神甘南備神八幡等告文亦准伊勢又遣使於諸山陵告可禦新羅寇賊之狀廿日壬寅勅太宰府令新羅人潤清宣堅等卅人及元來居止管內之輩水陸兩道給食馬入京先是彼府言新羅凶賊掠奪貢綿以潤清等處之嫌疑禁其身奏之太政官處分殊加仁恩給糧放還潤清等不得順風无由販發其間對馬島司進新羅消息日記并彼國流來七人府須依例給糧放却但叢爾新羅凶毒狼戾亦迺者對馬島人卜部乙屎麻呂被禁彼國脫獄遁販說彼練習兵士之狀若彼疑洩語爲伺氣色差遣七人詐稱流來歟凡垂仁放還尋常之事狡奸往來當加誅懲加之潤清等久事交關僑寄此地能候物色知我无備令放販於彼亦弱於敵既乖安不忘危之意又從來居住管內者亦復有數此輩皆外似販化內懷逆謀若有來侵必爲內應請准天長元年八月廿日格旨不論新舊併遷陸奧之空地絕其覬覦之奸心從之廿三日乙巳參議從四位上行太宰大貳藤原朝臣冬緒進起請四事其一曰軍旅之儲烽燧是切而數十年來國无機警雖有其備未知調用若有非常何以通知今須下知管內國島試以舉烽焚燧彼此相通以備不虞若不其由恐驚動物意望請下知事旨依件調練詔從之三月十六日戊辰從五位下行對馬島守小野朝臣春風進起請二事其一曰軍旅之儲管在介冑介冑雖薄助以保侶望請縫造調布保侶衣千領以備不虞其二曰軍興小虞倍日兼行轉餉易絕輕重難給

望請以調布縫造納糯帶袋千枚可帶士卒腰底以支急速之備詔從之以太宰府庫布造充之六月七日戊子勅太宰府置對馬島選士五十人十三日甲午先是太宰府言肥前國杵島郡兵庫震動鼓鳴二聲決之著龜可警隣兵是日勅令筑前肥前壹岐對馬等國島戒慎不虞又言所禁新羅人潤清等卅人其中七人逃竄八月廿八日戊申先是對馬島言境近新羅動恐侵掠既無其師督機何用絕域孤島誰救警急迺者有聞彼國寇賊學劍習戰若不豫備恐難應卒望請置督師一員勅太宰府簡擇其人補任言上立爲恒例九月十五日甲子遣新羅人廿人配置諸國清倍鳥昌南卷安長全連五人於武藏國僧嵩沙彌傳僧關解元昌卷才五人於上總國潤清果才耳參長焉才長真午長清大存倍陳連哀十人於陸奧國勅潤清等處於彼國人掠取貢綿之嫌疑須加重譴以肅後來然肆背宥過先王之義典宜特加優恤安置彼國沃壤之地今得穩便給口分田營種新并須其等事一依先例至于種蒔秋獲並給公糧僧沙彌等安置有供定額寺令其供給路次諸國並給食馬隨身雜物充人夫運送勤存仁恕莫致窘苦十一月十三日辛酉筑後權史生正七位上佐伯宿禰真直繼奉進新羅國牒即告太宰少貳從五位下藤原朝臣元利萬侶與新羅國王通謀欲害國家禁真繼身付檢非違使十七日乙丑太宰府進禁少貳藤原朝臣元利萬侶前主工上家人浪人清原崇繼中臣年麻呂與世有年等五人以從五位下行大內記安倍朝臣興行爲遣太宰府推問密告使判官一人主典一人常陸國吉田社文書大明神依例奉貞觀新羅國海賊時被寄貢奉數度祭會并諸雜舍修理料神合租穀

捌百參拾束

正月一日御祭料參斛 歲御祭料貳斛

二月御祭料參斛

修理料

御殿料拾斛

可奉下諸祭料租穀

右伴神祭穀貞觀十四年新羅國海賊時所、也仍任先例、奉下之狀如件

寬治四年、大祝大舍人、

宮司正六位上吉美候、

此文殘闕不可讀今姑存其要

三代實錄云元慶二年六月廿三日丁亥勅令因幡伯耆出雲隱岐長門等國調習人兵修繕器械戒慎斥候固護要害灾消異伏理歸依佛神亦須境內群神班幣於四天王像前修調伏法以著龜告可有邊警也七月十三日丙午詔令太宰權少貳從五位下藤原朝臣仲直攝行警固事去貞觀十一年左近衛權少將兼權少貳坂上大宿禰瀧守行此事而秩罷入京警戒停廢今卜筮有告隣敵窺隙故亦為之是日加主鈴直一人十二月十一日壬申太宰少貳從五位下島田朝臣忠臣奏言檀日宮有詔宣云新羅虜船欲向我國宜為之備因茲遣從五位上守刑部大輔弘道王向伊勢太神宮祈請冥助廿日辛巳以從五位上守民部大輔藤原朝臣房雄為太宰權少貳兼左近衛權少將從赴太宰府警戒戎事廿四日乙酉遣兵部少輔從五位下兼行伊勢權介平朝臣季長

向太宰府奉幣檀日八幡及姬神住吉宗形等大神其檀日八幡姬神別奉綾羅御衣各一襲金銀裝寶劍各一以彼府奏有詔宣云新羅凶賊欲窺我隙肥後國有大鳥集河水變赤等之怪也

日本運上錄云寬平四年壬子四月新羅凶賊襲來

小右記寬仁三年四月記云寬平五年閏五月三日勅符云追討新羅海賊事當今務在農要勿令失時且征且田良將之術勅到奉行

扶桑略記延喜十八年十月十五日下午云故老云寬平六年二月彗星見四月新羅賊來損人物擾吏民

和漢合符云寬平六年甲寅四月賊船七萬三千艘來

又見日本運上錄及和漢合運

一代要記云寬平六年四月新羅賊船來九月討新羅賊

扶桑略記云寬平六年九月五日對馬島司告新羅賊徒船四十五艘到着之由太宰府同九日進上飛驒使同十七日記曰同日卯時守文室善友召集郡司士卒等仰云汝等若箭立背者以軍法將科罪立額者可被賞之由言上者仰訖即率列郡司士卒以前守田村高良令反問即島分寺上座僧而均上縣郡副大領下今主等為押領使百人軍各結廿番遣絕賊移要害道豐圓春竹率弱軍四十人度賊前凶賊見之各銳兵而來向守善友前立楯令調弩亦令亂聲時凶賊隨亦亂聲即射戰其箭如雨見賊等被射並逃歸將軍追射賊人迷惑或入海中或登山上一合計射殺三百二人就中大將軍三人副將軍十一人所取雜物大將軍縫物甲冑貫革袴銀作太刀繩弓革胡錄充夾保呂各一具已上附脚力多米常繼進上又奪取船十一艘太刀五十柄梓千基弓百十張胡錄

百十房楯三百十二枚 僅生獲賊一人 其名賢春即申云彼國年穀不登 人民飢苦倉庫悉空王城不安然王仰為取穀絹飛帆參來但所在大小船百艘乘人二千五百人被射殺賊其數甚多但遺賊中有最敏將軍三人就中有大唐一人類聚三代格

太政官符

應停史生一員加置督師事

右得太宰府解稱謹檢案內格條云去弘仁五年五月廿一日除史生一人置督師一人若有病故誰補其闕望請重減史生加置督師謹請官裁者大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅陸奧出羽按察使源朝臣能有宣奉勅依請

寬平六年九月十三日

北山抄云寬平六年九月十八日子二剋太宰飛驒使來十九日戊二剋飛驒使來言上打殺新羅賊類二百餘人之由云々寅四剋召先後飛驒使於陣頭給白衾各一條緣其早來也一人給勅符一人給位記等還遣之云々

扶桑略記云十九日官符云應出雲隱岐等國依舊置烽燧事右得彼國解稱檢令條諸國置烽燧若有急速則達京師遠近相應慎備警固至于延曆年中內外垂事永從停發而今寇賊數來侵掠邊垂加之此國遙離陸地孤居海中風波危厲往還不通縱有非常何得通告望請官裁雖不通京都而件兩國境依舊置烽燧者右大臣(良世)宣奉勅依請

西宮記云寬平六年九月廿三日奉山陵臨時幣停尋常政依新羅凶賊來侵也

小右記寬仁三年四月記云寬平六年新羅凶賊時宣命野美材自筆草慮外尋得

又云引見寬平外記日記云有警固北陸山陰山陽南海等道要害

又六月記云寬平六年新羅凶賊到對馬島々司善友打返即給賞

本朝文粹善相公意見十二箇條

請停以贖勞人補任諸國檢非違使及督師事第十條

緣邊諸國各置督師者為防寇賊之來犯也臣伏見本朝戎器強弩為神其為用也短於逐擊長於守禦古語相傳此器神功皇后奇巧妙思別所製作也故大唐雖有弩名曾不如此器之勁利也臣伏見陸奧出羽兩國動有蝦夷之亂太宰管内九國常有新羅之警自餘北陸山陰南海三道濱海之國亦皆可備隣寇者也而今件督師皆充年給許令斥賣唯論價直之高下不問才伎之長短故所充任者未知軍器之有弩况曉機弦之所用乎假令天下太平四方無虞猶宜安不忘危日慎一日况萬分之一若有鄰寇挑死者空懷此器孰人施用乎伏望令六衛府宿衛等練習弩射之術試其才伎隨其功勞充任件國督師然則人才適名城戎易守

延喜十四年四月廿八日

新羅賊勅符

前中書王

安不忘危况虎視方久治不忘亂况風聞已成者昔李將軍之守邊胡人不敢南下楊大尉之在鎮敵國亦以子來且警兵機且勤耕織令生民樂業死生駐戰

年月日 又見朝野群載

案承平五年新羅爲百濟所并然猶以異賊稱新羅者多矣

百練抄云長德三年六月十三日諸卿定申高麗國牒狀事僉議不可遣返牒可警固要害又牒狀不似高麗國牒是大宋國之謀略歟十月一日旬出御南殿之間太宰府飛驒到來申高麗國人虜掠鎮西之由仍止音樂庭立奏事了令諸卿定申之 按日本紀畧及鎮西要畧爲南蠻賊未知孰是

日本紀畧云長德三年十月一日壬辰旬天皇一條御南殿于時庭立奏之間太宰飛驒使參入云南蠻亂入管内諸國奪取人物奏樂之後諸卿定申件事十三日甲辰奉幣帛使於諸社依筑紫之騷動也十一月二日癸亥太宰府飛驒使來申伐獲南蠻卅餘人之由

百練抄云長德四年二月太宰府追伐高麗國人
日本紀畧云長德四年九月十四日庚午太宰府言上下知貴駕島追捕南蠻由
長保元年八月十九日己巳太宰府言上追討南蠻賊由

鎮西要畧云長保元年八月勅太宰府討南蠻海賊府將軍大藏春實擊得賊船賞封對馬邦及筑前岩門縣以相城於岩門
和漢合運云長和三甲寅三十二與新羅戰

鎮西要畧云長和三年三月新羅賊來西府官兵相擊破賊兵咸亡
天正中年代記云寬仁三己未新羅軍兵對馬マテ來賊船四十八艘 按和漢合運寬弘三年下有賊船到壹岐對馬之文蓋寬仁之訛也
伊豫國三島社緣起云六十八代後一條院寬仁三年己未二月廿七日新羅軍對馬來 按二月宜作三月

皇年代記云寬仁三年四月廿八日太宰府言上刀伊賊來侵之由

日本紀畧云寬仁三年四月十七日甲辰公卿參入被行小除目之間太宰府飛驒使乘馬馳入左衛門陣是刀伊國賊徒五十餘艘起來虜壹岐島殺害守藤原理忠并虜掠人民來筑前國怡土郡者 大鏡裏書同之

小右記云寬仁三年四月十七日戊剋許惟圓師持來帥中納言隆家書今月七日書云刀伊國者五十餘艘來着對馬島殺人放火警固要害差遣兵船府飛驒言上者惟圓歸去不幾重來云八日送內房帥書同飛驒持來云件異國船來着乃古島 去太宰府警固咫尺云々者

又十八日下云去夜飛驒解文事侍從中納言行成卿行之云々宰相資平問遣太宰府解文案內行成卿返報書云府解文云刀伊國擊對馬壹岐等島 對馬守遠勝參府申事由壹岐守理忠被殺害又筑前國乃古島警固近々所云々等彼賊多來不可敵對其迅如準云々

百練抄云寬仁三年四月十八日諸卿定申太宰府言上新羅賊侵邊境之狀
日本紀畧云十八日乙巳攝政賴通以下定申飛驒事仍賜太宰府勅符并五箇條警固要害防禦凶賊祈禱佛神可守常境之由也

小右記云十八日參內右大臣公季大納言齊信公任中納言行成賴宗實成參議道方公信通任等先參入刀伊國事於壁後問行成卿 對馬守遠勝申狀壹岐守理忠被殺事彼島講師常覺脫來以理忠郎等九人射殺者事定已了者余實實着陣座大臣給府解二枚今月七日八日鮮文等云可被行事可定申又云件符解射殺者事定已了者余實實着陣座大臣給府解二枚今月七日八日鮮文等云可被行事可定申又云件符解注官裁狀也非飛驒申狀如何余答云諸卿僉議如何大臣云警固要害可加追討有勤之者

可加賞事府解注官裁須給官符然而非勅符遲到歟函上注飛驒猶可給勅符但官符文可注違例由又可賞事尋前例不載勅符仍可戴官符可被行種々内外御禱山陰山陽南海道等可警固要害事等定申了余云此外又不可申但可警固事同可給北陸道歟大臣諸仰左大辨道方大臣引見寬平外記日記云有警固北陸山陰山陽南海等道要害叶余定申者又云飛驒若可給寮馬乎答不覺由被問外記無所見者諸卿云雖慥無所覺可給歟推而所量也者未被行勅符事之前稱所勞退出後聞可加賞事非奏狀事猶被載勅符者少納言信通所談或云賞事不可被募云々飛驒二人給寮馬云々

日本紀略云廿一日戊申奉幣伊勢大神宮以下十社依刀伊國賊徒事也

小右記云廿一日依異國凶賊着鎮西之事被立諸社御使大納言公任卿行之

日本紀略云廿五日壬子從太宰府令獻府解

小右記云廿五日早且惟圓來云鎮西事已無音者即歸去後不幾來云從備中參上者申云異國者人於壹岐島打得其一人付兵士令參上者先經言上可左右歟直令參上如何留山崎可進府解之由指旨了後聞此事太虛言更無令參上之者云々近代只以虛爲宗西時許惟圓持帥書來去十六日書亦異國人九日來着合戰等子細在府解又亦可辭退哉否事惟圓云使者乘隼船參上但異國八日俄來着能古島同九日亂登博多津府兵忽然不能徵發先平爲忠同爲方等爲帥首馳向合戰異國軍多被射殺不留戰場將人船中又有弄置者又有生虜者等又奪取兵具甲冑者一船中有五六人合戰場每人持楯前陣者持鉾次陣持大刀次陣持弓箭者箭長一尺餘許射力太猛穿楯中入府

軍被射殺者只下人也爲將軍者不被射乘馬馳向射取只忌加不良聲引退刀伊國人之中有新羅國人等云々乘船遁去傍岸棹船庫軍等依無兵船不能追擊從陸路馳行刀伊人更下船欲燒宮前宮府兵射殺前行兵一人驚乘船逃遁十日十一日北風猛烈不得還渡逗留海中神明所爲歟兩日間府令營造兵船卅八艘令追襲賊徒遁去指本州漕去府兵船又令廿餘艘乘勝逐之又致行朝臣調十餘艘相逐但先可到壹岐對馬等島限日本境可襲擊不可入新羅境之由都督所誠仰也者使者又云如只今似被討平也賊徒甲冑兵具等少々被奪取又云從陸路令捕進刀伊國者之由十六日以前所不承也者縱橫說難信受而已後聞帥使說壹岐對馬島人等悉取載船合戰之間島人等叫云馬馳かき射よ病た仍官軍等馳進射刀人遁走歸乘舟此間被取載之二島者多下從船遁來博多津云件刀人爲牀多食又多飲水馳馬以加不良射留仁有恐怖氣者又云以兒爲荒卷落置博多津云々食人云々

朝野群載擊取刀伊國賊徒狀

太宰府解 申請官裁事

言上刀伊國賊徒或擊取或逃却狀

右件賊船五十餘艘來着對馬島劫略之由彼島去月廿八日解狀今月七日到來即載在狀言上先了且整舟船且與軍兵警固要害所々然間壹岐島講師常覺同七日申時參來申云合戰之間島司及島內人民皆被殺略常覺獨逃脫者同日襲來筑前國怡土郡經志摩早良等郡奪人物燒民宅其賊徒之船或長十二箇尋或八九尋一船之櫂三四十許所乘五六十人三二十人擢刃奔騰

次帶弓矢負楯者七八十人許相從如此一二十隊登山絕野斬食馬牛又屠犬肉叟嫗兒童皆悉斬殺男女怯者追取載船四五百人又所々運取穀米之類不知其數云々事出慮外要害地廣雖召人兵來未多雖整舟船勢未、雖然與所差遣兵士并彼郡住人文室忠光等合戰之場賊徒中矢者數十人或扶以載船其中追所斬首數輩兵士等中矢十餘人同八日移來同國那珂郡能古島重錄在狀言上又了但彼郡人民或迷鬪戰或為賊虜飛驒言上之前不申子細也以前少監大藏朝臣種材藤原朝臣明範散位平朝臣為賢平朝臣為忠前監藤原助高備仗大藏光弘藤原友近等遣警固所令相禦同九日朝賊船襲來欲燒警固所距却之間奮呼合戰其間中矢者十餘人賊徒遂不能前戰還着能古島其後二箇日風猛波高不能相攻十一日未明同國早良郡至志摩郡船越津先是分遣精兵豫令相待同十二日酉時上陸與太神宮權檢非違使財弘延等合戰中矢之賊徒卅餘人生得二人其中一人被疵一人女少貳平朝臣致行前監種材大監藤原朝臣致孝散位為賢同為忠等差加兵士以船卅餘艘令攻追同十三日賊徒至肥前國松浦郡攻劫村閭爰彼國前介源知率郡內兵士合戰中矢者數十人生得者一人賊船不能進攻遂以歸却、兵船等攻戰云々又差遣救兵四十餘艘了但生虜者等皆高麗人者以通事令尋問之處申云高麗國為禦刀伊賊遣彼邊州而還為刀伊被獲也者其疑難決追賊之船還之後搜實誠追可言上又所擊獲首虜并戎具等追將進上且錄在狀謹解

寬仁二年四月十六日

三品 帥 親 王在京

正六位上行大典上毛野朝臣師善
從五位下行大監菅原朝臣雅隆

正二位行中納言兼權帥藤原朝臣隆家
正五位下行少貳兼筑前守源朝臣道濟
從五位下行少貳藤原朝臣盛規

大監正六位上大藏朝臣光順
正五位下行少監豐島真人靜風
正六位上行少監上毛野朝臣行蔭

日本紀略云廿七日甲寅大納言實資卿以下定申太宰府言上雜事等給官符於太宰府防禦刀伊賊

小右記云廿七日頭辨經通含攝政命來曰太宰府解文事飛驒解文刀伊國凶賊追却事等今日可定申者申可參入由未剋許參入宰相乘車後暫之左大辨道方參入召外記順孝問上達部參不申云大納言公任右衛門督實成雖有所勞相扶宜者可參入也自餘故障者頭辨經通下給太宰府解文云可定申者令申云見參上達部數少隨仰可定申被命云重召遣大納言可定申者召遣之間大納言右衛門督等參入先是經通下給太宰府解文云可定申者定申云府解文云申刀伊國人內獲得者三人推訊之處申云高麗國為禦刀伊賊遣彼邊州而還為刀伊被獲也云々數千人刀伊賊外高麗人何必被捕乎偽稱刀伊人歟決斷府可言上歟兵具首虜不可令進又四王寺御修法殊可被行對馬島司遠晴早可遣本島但差副堪事者令勤防護仰國々令運兵糧催遣防人又壹岐守理忠被致害事此度解文慥尋問可言上也而無其事可仰其由歟事若有實暫遣、使可令警固歟定申趣以經通令申攝政命云任上達部定申可給報符者但兵糧糒可注進之由可加載報符者即件事等仰經通五月三日太宰報符草今朝見之有改直事等可覽攝政之由相示左中辨了左中辨示送云給太宰之官符令覽攝政殿了命云大吉但可入農業不可懈怠之

由者依無仰事所不令作件事要領事也四日太宰府報符從左中辨許見送之止奸猾襲來文可改奸猾來侵之由而遣了件官符今日請印云云廿四日帥納言消息書今日十今日到來云追打刀伊賊之兵船未歸來仍重不言上歸來之後可上府解兵船等自壹岐向對馬了者其後不聞案內疫癘方發無為術但止萬事令造兵船戎具等令勤行要害警固事追打刀伊之官軍等皆府無止武者等向于今不歸來太以鬱歎者

日本紀略云五月廿六日祈刀伊國事

小右記云六月廿一日今日帥書付脚力送之高麗人未斤達五月廿九日到著筑前國志摩郡申云去年三月十六日從彼國康州隨身米千石參着京都六月十五日罷歸之間被放逆風去月八日到大宋國明州今年五月廿四日罷歸本國之間遭逆風來者依有大疑禁固令訊問者廿九日參內秉燭後左中弁經通下給太宰府言上筑前國壹岐對馬等島人牛馬為刀伊人被改害并被迫取解又勳功者注申事又處々合戰狀勘問間力刀伊人及此度流來未斤達等文傳仰云太宰言上解文中注進勳功者可賞哉否又流來者并初刀伊人等勘問等事可定申抑勳功賞有無如何大納言公任中納言行成申不可行之由其故者有勤之者可賞進由雖載勅符勅符未到之前事也余云不可謂勅符到不假令雖不募賞事至有勳功者賜賞有何事寬平六年新羅凶賊到對馬島島司善友打返即給賞雖無彼募前跡如此他事相同就中刀伊人近來警固所又追取國島人民千餘人并殺害數百人牛馬等亦殺壹岐守理忠而太宰府發兵士忽然追返并射取刀人猶可有賞若無賞進向後事可無進士歟大納言齊信同余定其後大納言公任中

納言行成及已次皆同伴等定文注太宰府言上賊徒合戰之間雜事

一府所注進勳功者事

右大將藤原朝臣實資中宮大夫藤原朝臣齊信權大納言藤原朝臣公任權中納言藤原朝臣行成皇太后宮權大夫源朝臣經房左大辨源朝臣道方右大辨藤原朝臣朝經資平朝臣等定申云先日賜勅符之日被募功伐之間有功績輩隨其狀可加抽賞之由而所注申者在勅符未到着以前不可理必被行其賞歟但散去餘衆非無向後之畏為勵後輩聊可賞進歟

一生虜者勘問事

同前諸卿等定申云所注申之人合戰間雖多中矢者捕得賊徒唯三人也而勘問之場共陳申高麗國人之為刀伊賊徒等被虜之由縱雖非刀伊國之人同船送數日之間蓋見其案內而不窮問其趣難散鬱結又拷訊之者不承伏時度々可究拷也加之不注杖數頗以不愷重以窮問可言上其旨歟

又言上流來高麗國人事

同前諸卿定申云先日賊徒之中多有高麗國人者此間流來輩非無事疑安置別所重令尋問可經言上之由可被下知歟抑異國賊徒來候之恐不可不慎先後來觸何不怖畏方々可被祈禱歟

太宰注進成勳功者

散位平朝臣為賢

前大監藤原助高
備仗大藏光弘

藤原友近

友近隨兵紀重方

以上五人警固所合戰之場相戰者雖數多賊徒正中件爲賢等矢但重方不載先日府解事
標子細依不注申也令尋實誠追所言上也

筑前國志摩郡住人文室忠光

賊徒初來志摩郡之日與所差遣兵士合戰之間中忠光矢者多又斬賊徒之首進上并進彼
戎具等

同國怡土郡住人多治久明

賊徒到來之間於當郡青木村南山邊相戰賊徒合戰射取賊一人斬其首進府先日解文難
注子細仍件久明白漏矣

大神守宮擬檢非違使財部弘延

賊徒擊却之間計要害所々件守宮等差加兵士豫所遣也而於筑前國志摩郡船越津邊合戰
之間中件守宮等之矢者多就中生捕者二人但一人被疵死了
前肥前介源知

賊徒還却之間於肥前國松浦郡合戰之間多射賊徒又生捕進一人

前少監大藏朝臣種材

賊徒逃却之日依有兵船遲出之告以少貳兼筑前守源朝臣道濟遣博多津且令解纜且問
遣其案內之處奉使者等各申云賊船數多猶造兵船一度可罷向者其中種材獨申云種材齡
過七旬身爲功臣(春實)之後待造了兵船之間恐賊徒早逃弄命忘身一人先欲進向者道
濟以種材所云而爲善整出衆軍了者依賊船之早去誠雖無遂戰種材之所言忠節不淺
壹岐講師常覺

賊徒三襲每度擊返後不堪數百之衆一身逃脫身雖非在俗其忠不可隱

右去四月十八日給當府勅符云箇裏若有攻戰忘身勳功超輩者隨其狀跡加以褒賞者言上
如件

事定了子四剋退出件定文未清書仍書具可奉由仰左大辨了

筑前

志摩郡人五百四十七人

被殺害者百十二人被追取者四百三十五人牛馬七十四疋頭

早良郡人六十四人

男廿四人女四十人牛十頭馬九疋被殺害者十九人被追取者四十四人被切食牛馬六疋

怡土郡人二百六十五人

被殺害者四十九人男童并四十人被追取者二百十六人男卅八人女童并百七十八人牛馬卅三疋頭牛十六頭馬十八疋

能古島人九人

女六人童三人馱四十四疋牛廿四頭

壹岐島

守藤原理忠被殺害

被殺害島內人民百四十八人

法師十六人童廿九人女五十九人被追取女等二百卅九人

遺留人民卅五人諸司九人郡司七人百姓十九人

對馬島

銀穴燒損了云々

被殺害人十八人被追取人百十六人男三十三人童廿八人女五十六人

上縣郡百四十一人

被殺害人九人被追取男女童并百卅二人男三十九人童九十三人

下縣郡男女并百七人

被殺害男女并百七人被追取男女童九十八人男三十八人童并六十八人

并三百八十二人男百二人女童二百八十人

被燒亡人々住宅四十五宇

爲賊徒被切喰牛馬百九十九疋頭馬八十二疋牛百十七頭

七月十三日直物次有叙位除書等敦頼惟通四品俊遠成順加階種材任壹岐守若所望歟鎮西鎮武者非忽無所望者歟仍被任歟八月三日都督書云云々副府解并內藏石女申文

太宰府解申請官裁事

言上對馬島判官代長岑諸近越渡高麗國隨身爲刀伊賊徒被虜女拾人歸參狀

二人筑前國志摩郡安樂寺領板持庄人即進府

一人病船中不參府

八人對馬島人

二人到來之間病惱死去

五人又病惱留本島

一人進府

副進賊虜女內藏石女等申文

右得對馬島去六月十七日解狀同廿一日到來備得管上縣郡伊奈院司同十六日解狀備刀伊賊徒到來之間判官代諸近并其母妻子等被虜而賊船還寄當島之日諸近獨身逃脫罷還本宅然間以昨夜盜取小船逃亡已了定知爲恐當島之厄罷渡陸地歟早被言上大府將被召返者島內人民爲賊被虜僅所遺民又渡他處若無被召返之定愁遺民不可留跡望請府裁被仰下管內諸國尋在所將被糺返者而又得同島今月九日解狀同十二日到來備件諸近以去六月十五日晦跡逃亡仍其由言上先了而以今月七日諸近到來申云刀伊賊到來之日諸近母伯

母妹妻子從者等并十餘人被取乘賊船慮外往反筑前肥前等國但賊徒還向之次寄對馬島爰諸近獨身逃脫罷留本島而竊惟離老母妻子獨雖存命已有何益不如相尋老母委命於刀伊之地欲申事由於島司渡海制重仍竊取小船罷向高麗國將近刀伊境欲問老母存亡爰彼國通事仁禮罷會申云刀伊賊徒先日到來當國殺人掠物欲相戰之間逐電赴日本國仍騰舟備兵相待間無幾還向重殘滅海邊仍豫於五箇所儲舟千餘艘所々襲擊悉以擊殺了其中多有日本國之虜者被五箇所之內且三箇所所進三百餘人也待集遣二箇所之人乘船可被進日本國之由已有公定早還對馬島可申此由者爰罷會彼賊虜中本朝人等問老母存亡即申云賊徒等到着高麗地之間取載強壯高麗人以病羸庭弱者皆入海了汝母并妻妹等皆以死了者只會伯母一人欲罷還本土之處本朝同國之制已重無故罷還者定可當公譴縱雖得書牒無證更不可被信用因之受乞日本人爲證件人欲罷還之處高麗國且以賊虜十人充給抑諸近依思老母已忍罪過知母死亡至于今者進身於公廳左右可隨裁定者投若異國朝制已重何況近日其制彌重仍召諸近身相副件女二人差島使前掾御室爲親進上如件者謹檢案內異國賊徒刀伊高麗其疑未決今以刀伊之被擊知不高麗之所爲但新羅者元敵國也雖有國號之改猶嫌野心之殘縱送虜民爲悅若誇勝戰之勢僞通成好之便抑諸近所爲先後也越渡異域禁制素重况乎賊徒來侵之後誠云以先行者爲興異國者而始破制法而渡海無書牒而還以將來虜者優而無坐其罪恐向後愚民偏思法緩輒渡海爲懲傍輩禁候其身須待高麗國使申上其案內然而來不難知旬日欲移下民之言誠雖難信境外之爲

非可默爾仍注在狀言上如件謹解

寬仁三年七月十三日

內藏石女等解申進申文事

注申被追取刀伊賊徒罷向高麗國海路雜事并歸參本國案內等狀

右石女安樂寺所領筑前國志摩郡板持庄之住人阿古見對馬島住人也而並被追乘賊船日來之間見其案內所々合戰之日石女等罷乘兩船之內中矢賊徒五人也而着對馬之岸之間皆以死了此外傍類船被疵死亡者追日不斷爰罷着高麗國岸之後賊徒等每日未明之間上陸地滅海邊別島等之人宅運物取人也晝則隱島々撰取強壯之者打殺老衰之者又日本虜者之中病羸者皆以入海了夜則各々潛去也如此送廿餘箇日之程五月中旬之比高麗國兵船數百艘襲來擊賊爰賊人等勵力雖合戰依高麗之勢猛無敢相敵之者則其高麗國船之體高大兵仗多儲覆船殺人賊徒不堪彼猛船中殺害所虜之人等或又入海石女等同又被入海浮浪仍合戰案內不能見給無幾有高麗船扶了即勞所令蘇生也但見被救乘船之內廣大不似例造二重上立檣左右各四枚別所漕之水手五六人所之士二十餘人許下懸檣又一方七八枚也船面以鐵造角令衝破賊船之料也舟中儲雜具鐵甲冑大小鉞熊手等也兵士面々各々執持之又入大石打破賊船又他船長大已以前前合戰事畢之後石女等一類卅餘人各給驛馬近金海府之途中十五箇日每驛以銀器供給其勞尤豐官使仰云偏非勞汝等只奉尊重日本也者着金海府之後先以白布各充衣裳兼以美食給石女等六月卅个日之間令安置

彼府爰對馬判官代長岑諸近為尋訪被追取賊徒之母妻子等到來高麗國聞母子之死亡欲歸本朝仍為證據申請虜女十人離岸之日彼朝公家充給歸糧新入別白米參斗干魚卅隻兼給酒食但金海府前召集之日本人并二百餘人是二个所軍船所進也殘二个所人等來集之後差使可返進之由且言上公家者往反案内言上如件

寬仁三年七月十三日

多治比阿古見

內藏石女

廿一日藏人右少辨資業合攝錄命云太宰府言上解文等定申先度解文今般解文等事又々々可警固要害事祈禱事等如先日報符可勤行事新羅人能可守護事兵糧糯米追可催納事可給官符者即仰下了府解等上達部定文同下給也廿二日右少辨資業持來給太宰之報符仰可令捺印之由九月十九日入夜惟圓師持來帥納言隆家書其狀云從高麗國虜人送使鄭子良來對馬之由申彼島解文仍言上其由具案内注府解等明日臨時祭始一府大事也忿々間具事等不令申付九月四日書

日本紀略云九月廿二日乙亥右大臣公季以下定太宰府言上刀伊賊事左經記云寬仁三年九月廿二月參內右大臣中宮大夫齊信權大納言公任左大將教通右衛門督實成右大辨朝經侍從宰相資平等於左仗被定申太宰解文新羅國所送為刀伊國被取壹岐對馬等人共申云先召太宰府體問定依實可被行左右歟云々小右記云廿二日召使云今日右府有可被定申事可參入者答依犬死穢不可參由了若太

宰府言上高麗國事歟件事昨日入道殿道長有被而事其趣者為刀伊國賊被虜者二百七十人許云々男六十人女二百餘人相送者二百餘人云々只牒對馬命云給絹米等可歸途也先尋新羅國貢調時給物例可被行歟者太宰解文并高麗牒等尋取後日可見之廿二日宰相資平云昨日右大臣按察大納言齊信權大納言公任左大將教通右衛門督實成右兵衛督公信右大辨朝經參入頭辨經通下給太宰府解文高麗國牒等諸卿定申云高麗國使召上太宰府暫安置便處厚賜資糧可被問此間持疑事等又先日太宰解文注刀伊國高麗國牒注女真國此事可被問太宰府又馳驛可申而以脚力言上旬日多廻同可被問也給報符又隨申上其度可被定下歟者中署今朝源大納言俊賢亦送云高麗國使事其定如何數多者着小島送旬月者可量國強弱可知衣食乏以早返為先見牒案內始自文書手跡無所耻不論手之淺深可作返牒歸祿等程如何內々可給位階由云々牒已不送日本何授位階又知本位進一階所作也牒文無本位此間憤申侍於一朝中事者雖無是非誰人謂其旨酌異國事先所不綏息也只可歸送先日捕得者流來者等也二百餘人男女何阿容異朝謀詐乎追々被尋問自可知實不使久住事未得意侍依彼朝謀略之旨我朝可被推行之有樣未思得侍者報依觸穢不預僉議由但昨定旨以宰相談說告大納言今案不可被尋問歟只以差使送處者可為其志給物被早返遣上計歟大納言重亦送狀云定旨大略承侍不馳驛由大府失也不高麗失依後々重言上可被定下事如何雖有彼朝詐可被行旨如何只如不知早被廻却使上計也彼國牒中女真時々注貢獻由是可所攝尤可責不順旨也擊得異國凶賊以虜民送當朝尤大事也宗朝可牒我朝而別府安東護府牒送對馬島此旨頗可

顯返牒許也者余(實資)又報事旨了廿四日今朝源納言(俊賢)亦送云世間所滿思者兩納言(實資公任)也此度事内々承寄侍被聞四條大納言(公任)若案内被申歟者高麗使經(歷二島(壹岐對馬)參)太宰府如何入秋之後風波不靜歟廻却之期已及嚴冬彼國牒對馬使者指其處更召上太宰往還之間若有漂沒極可不便歟又於太宰被問何事乎經兩島之程計之見衰弱由歟賜返牒并物從對馬返遣宜歟以此由亦達四條大納言報云定日申往反之間若經其日無便廻却彼是云猶問可然事可遣者仍不强申可有議事也但衰亡事見聞歟者十二月卅日戊刻許冒雨前大納言俊賢卿送書狀云只今自太宰府言上問高麗使日記自對馬島着筑前國彼國人卅人乘船已漂沒二艘僅到着也先日案、令出見流來虜人等使申伴者高麗人而不知其來由者此尤可疑問安東護號申云伴府彼朝鎮東海府也他府皆改其號爲州也彼府獨爲惣攝府仍所送虜人也者端書云自對馬不被歸被迎府事極奇議也如案漂沒可哀者件事所亦尤理也稱賢卿相所定也彼日余不預參後聞此定大納言聞此定謗難可然四條大納言預被議余亦此事所答有諾氣初陳海道難由傍卿云猶可召上府者不能強執所同也者今般定頗不宜前大納言彼定時似嘲僉議人等緣彼時案相當臨夜冒雨所馳亦歟日本紀略云寬仁四年二月十六日戊戌右大臣以下參入被定高麗返牒事令太宰府牒高麗國令發歸鄭子良等及生虜流來事四月十一日壬辰請印太宰府遣高麗國返牒官符左經記云寬仁四年四月十一日有召參右府下給太宰府言上高麗人鄭子良欲歸去府解仰云前日定下子良等祿法并遣高麗返牒等了彼到着之日慥給祿物并返牒等可返遣之由可

給官符即下大夫史奉親令作官符依火急事自殿上方召上官符忽於結政所請印入夜退出八月廿五日高麗國使鄭子良給祿之由府解并子良祿物等右府被奏而今日依凶事不能奏達之

大鏡云帥殿(伊周)の御一腹の十六にて中納言になりなとしてよの中のはかなものといはれ給ひし殿(隆家)の御童名の阿古君をかし中畧御めのそこなれ給ひしにこそいとくあたらしかりしかよろつにつくろひせ給しかともやませ給ひて御ましらひ絶給へるころ大貳の闕いてきて人々のそみのゝありしに唐人の目つくろふかあなるに見せむとおほしてこゝろみにならぬやと申給ひけれの三條院の御時にてまたいとをしくもやおほしめしけんふたとなくならせ給ひてしをかし政よくし給ふとて筑紫人さながら隨ひ申たりけり例の大貳十年かほとにてのほり給へりところ申しか彼國におはしまし、程刀夷國のもの俄にこの國をうちとらんとや思ひけんこえきたりけるに筑紫にいかねての用意もなく大貳殿弓矢の本すゑをもち給ひぬいかにとおほしけれとやまとこゝろかしこくおほする人にて筑後肥前肥後九國の人をおこさせ給ふをはさるものにて府の内につかうまつる人をさへをしとりてたゝかはしめ給ひけれのやかやつか方のものともいとおほくまにけるにさいいへと家たかくおひしますけにいみしかりし事たいらけ給へりし殿をかしおほやけ大臣大納言にもなさせ給へかりしかと御ましらひたえにたればたゝににおはするにこそあめれ此中に宗と射かへしたるものともあるして公家に奏せられたりしかは皆賞させ給ひき種材は壹岐守になされ

其子(光弘)ハ太宰監にこそいなさせ給へりしか此種材かそうの純友うちたりしもの(春實)すちなりさて壹岐對馬の人をいとおほく刀夷國にとりもていきたりければ新羅のみかといくさをおこし給ひてみならちかへし給ひてけりさて使付てたしかに此島に送給へりければ彼國の使にハ大貳金三百兩とらせてかへさせ給ひける

大藏氏系圖云種材太宰大監從五位下壹岐公號若門將軍天下無雙弓馬達者後一條院御宇寬仁三年異賊襲來可九

州亂入之由有其告其時大藏種材蒙院宣而馳向令退治西戎蒙征西將軍宣管領九州依

祖父(春實)例賜錦御旗

菊地家譜云政則對馬守後一條院御宇寬仁三年四月親父隆家帥時異賊襲來時政則若年ニシテ

着紫色鎧竹笠乘白草毛駒打望博多警固松原防戰異賊大將討取之畢依忠功可爲九州

之兵頭之由被下宣旨賜御旗賜御歌ツクシナル矢峰ノ嶽ノフモトニハタケキヲノコノ住

トコソキケ按太宰府所進勳功者交名中無政則且菟池武朝申狀多舉先祖功名而不載政則防賊事可疑

大槐秘抄云帥大貳に武勇の人なりぬれはかならず異國おこると申候けり小野好古か大貳の

時隆家か帥の時とり分刀異國のおこりて候なり

八幡愚童訓云寬仁ノ比東夷ノ國賊日本國へ襲來ノ時壹岐島ノ常行法師ト云者ノ母トラレテ

行ヌ我子ニ今一度アヒミセ給ヘト大菩薩ニ遙ニ祈念シ奉レトモ海隔テ境遠クシテ歸ル事更

ニ有ヘカラス歎ノ餘リ身ヲ投ントテ海ノ邊ニ望所ニ海アサカリケル程ニ渡リユケハ片時ニ

ムカヒノ地ニ付ヌ是高麗國ナリ件ノ海ハ深キコト底モナク廣キコトホトリモナシ風波荒ク

ノ舟船ナヲ容易クカヨハサル道也是併大菩薩ノ御助也ト驚テ高麗ノ王官食ヲ與テ日本ニヲクラル天喜年中ニ三十餘歲ヲヘテ本國ニイタリ愛子ヲ見ル事不思議也偏神恩ナラテハイカテカミル事ハ有ヘキト悦事無限リキ

左經記云寬仁四年十二月廿九日大夫史奉親朝臣持來太宰府解云左右大辨(道方朝經)具有所勞不被任仍令申事由於左府(顯光)之處被仰云令汝申者仍所持來也者南蠻賊徒到來薩摩國虜掠人民等之由也即參左府申事由次參關白(賴通)殿令覽府解次爲御使參御寺申此由仰云(道長)改年之後儘可追討之由可賜官符於太宰府

螢蠅抄第二

螢蠅抄第三

關東許定傳云文永五年正月蒙古高麗牒狀到來高麗牒使幡阜貢來之日本可從後蒙古之由

載之又見北條九代記

一代要記云文永五年後正月五日從太宰府蒙古國并高麗牒狀到來關東進彼牒使於仙洞(後

嵯峨)其後被止御賀沙汰

歷代皇紀云文永五年二月蒙古國牒狀初到按本書四年下同有此文皇代畧記亦爲四年共誤

八幡愚童記云文永五年二月一日公家奏ス蒙古牒狀アリ其狀云上天眷命大蒙古國皇帝奉書

日本國王朕惟自古小國之君境土相接尙務講信修睦况我祖宗受天明命奄有區夏遐方異域畏威懷德者不可悉數朕即位之初以高麗無辜之民久痒鋒鏑即命罷兵還其疆域反其旄倪高麗君臣感戴來朝義雖君臣而歡若父子計王之君臣亦已知之高麗朕之東藩也日本密邇高麗開國以來亦時通中國至於朕躬而無一乘之使以通和好尙恐王國知之未審故特遣使持書布告朕志冀自今以往通問結好以相親睦且聖人以四海爲家不相通好豈一家之理哉以至用兵夫孰所好王其圖之不宣至元三年八月日ト書タリ是ヲ見テ公家武家大ニ驚可有返牒哉否牒使可截首否諸道勘文諸卿僉議様々ナリ按二月一日蓮公畧傳爲正月一日蓮註畫賢爲閏正月十八日五代帝王物語云一院後嵯峨のことし文永五年四十九にならせおはします五十の御賀ひきわけて今年あるへしとて去年より内裏にて樂所始ありて連日に伎樂あり五年正月廿四日うるはしく院の舞御覽の儀あり新院後深草の御所宮小にても閏正月十五日又舞御覽あり一院御幸なる麗しき御賀の儀いかはかりの事にてかわらんすらむとおほえしに蒙古國とかやより牒狀を奉る高麗の儀を相副たり宰府よりまつ關東へつけて關東より二月六日牒狀をまいらせたりこれによりて御賀止めらる公私本意なき御事なり蒙古國もとの契丹の所屬韃靼國也年比契丹國以下の近邊の諸國を打とる大宋國も三百餘州のうち大略皆うちとられてはつかに六十餘州残り高麗も同せめ落されて臣として蒙古の朝につかふるよし牒狀にも載たり牒使に趙良弼と云者わたれり高麗の使を副たり牒狀二通あり一通は高麗の牒也蒙古狀ハ文永三年丙寅九月の狀なり至元二年と載たり高麗國同彼年號をうけて至元となせり去年八月の

牒なり數多の方物を相副て正月一日太宰府に着たり是によりて官外記以下の勘文をめされて仗議を行はる又仙洞の評定あり

増鏡云文永も五年になりぬ正月に閏あり後の廿日あまりのほどにれんせい院にて舞御覽有あけんとし一院いそちにみたせ給ひけれの御賀あるへしとていまより世のいそきにきこゆかくしよはしめのきしきいたりにてそありけるおなし二月十七日にまたしん院とみのこうち殿にてまひ御覽其あした大宮院まつまのひてわたらせ給かやうにきこゆるほどにむくりのいくさといふとおこりて御賀とまひぬ人々口惜くほいなしとおほす事かきりなし何事もうちさましたるやうにて御しゆ法なにくれと公家武家たこの騒きなりされともほとなくしつまりていとめてたし

帝王編年記云文永五年二月七日高麗牒狀常盤井入道大相國實氏以右兵衛督爲教卿進入仙洞云々十四日武家使者一人參院十五日異國事於仙洞評定是日自關東被進神馬并御劔於賀茂社廿五日依蒙古事被立臨時二十二社奉幣使三月廿七日諸道勘申異國事有仗議右大臣基忠已下參入

新式目 蒙古人棟凶心可伺本朝之由近日所進牒使也早可令用心之旨可被相觸讀岐國御家人等狀依仰執達如件 文永五年二月廿七日 相模守時宗 左京權大夫政村

駿河守殿

八幡愚童記云後嵯峨法皇御賀行ハルヘシトテ天下ノ營ミ他事ヲ閣レシモ止ラレ異國降伏ノ

御祈禱諸寺諸社ニ始ラル當宮ニハ三月五日ヨリ淨行社僧四十五人ヲ以テ毎日仁王講ヲ行ハ
ル同十三日十四日ニハ善法寺實相房法園寺中道房ヲ先トシテ持戒ノ淨侶三十人大般若ヲ轉
經セラル結願ニ當テ金泥ノ大般若供養アリ導師ハ實相上人請僧三十口ハ皆社僧也
東寺長者補任云文永五年三月廿三日爲異國御祈道勝於東寺講堂修仁王經法七箇日伴僧
廿口

東實記云仁王經法文永五年三月廿三日前大僧正道勝于時前寺務也當寺務道融之師也爲異國調伏修之同卅日
結願其賞逐可申請云々

伊勢公卿勅使雜例云文永五年四月十三日勅使正二位行權大納言右近衛大將藤原通雅亦見太神宮例
文五代帝王物語云四月十三日太神宮へ公卿勅使を發遣せらる右大將通雅卿勅使をつとむ宣
命は主上(龜山)御手のから草をせさせおはします清書にもやかに宸筆也此外諸寺諸社の御
祈大法秘法數を盡せり返牒あるへきかと沙汰有て菅宰相長成卿草して經朝卿清書して關東
へつかひされたりしかとも武家子細を申て遣はさす所詮牒狀の跡無禮なるによりて返牒に
及ぬよし牒使に仰合て返却せらる文永元年六月より彗星出て後さまには光芒半天に及て
目を驚かす消没して現す九月十九日まていたえず出現す此變つねにいづれとも寛元(後嵯峨)
三年三月に出現の後久出さるに今度の先例に超過のうへ二年十二月十日より又出現して三
年正月まで消すいかなる事の有へきやらんと覺しかとも指事なしとて有しほとにかゝる事
出來大器は遅くなるいはれなれにや其まゝし終にむなしからす六年六月にも太微宮右執

法の星を木火二星相侵此事我朝にはいまた無勘得異朝には黃初六年(魏)出現同七年帝(文
帝崩このほかり勘得ぬよし司天の輩申あへり異國事其後打續き絶す

日蓮註畫贊云文永五年閏正月十八日西戎大蒙古國可襲日本國之申牒狀來按牒狀文同愚童記仍今畧之此牒
狀就來朝返牒有無牒使誅否召諸道勘文遂公卿僉議終無返牒被飯牒使開羅網放鯨鯢
者乎牒使每夜見廻築紫地船津軍場委圖之相人之氣色見處之案内飯

吉續記云文永五年六月廿二日依異國事被發遣山陵使頭中將(具房)奉行也上卿内府(家經)
被參陣御陵七箇所告文右少辨經業草使皆參候之後内府着仗座頭中將參進軾可定申日
時并使事之由仰之次召辨賴親被仰日時事主上内々有出御中門被御覽殿下頭辨予(經長)
等視候告文章入管藏人判官親說欲令内覽視候御前之時職事可持來歎之由被仰問頭中將
持參内覽祇候返給頭中將退入次上卿參進弓場被奏告文章頭中將奏之清書奏聞如常使
着仗座給告文次第起座使定文左大辨宰相(雅言)書之山陵使次第

神功楯列池上權中納言源朝臣通賴 皇后宮少進橋長宣 天智山階 權中納言藤原朝臣長雅 宇多大内山 參議藤原朝臣高定
後三條圓宗寺參議源朝臣雅言 散位源朝臣雅範 後白河法住寺 參議源朝臣具氏 後鳥羽大原 參議藤原朝臣公孝
土御門金原宮内卿藤原朝臣重氏 散位源朝臣則雅 散位源朝臣則有 左近將監源朝臣賴基

大内山陵所不分明兼日委可承其所之由雖相觸奉行職事于今不分明及發遣刻限雖令
問答猶不分明及遲々之間使等發遣奉行職事兼尤可沙汰歎越度之至也入夜堀川宰相(高
定)飯參内依無陵所於仁和寺中雖相尋更無其處參御室尋申之處遺詔不置陵云々其上

無才覺之由被仰之間空飯參告文章佛國也異國也奇怪殊甚書之後國朝臣申云佛國不可然奇怪之至太懦弱不可說文章也難申之人々難之尤可有沙汰事也

天台座主記云無品尊助親王青蓮院文永五年七月十七日爲異國降伏御祈七箇日於根本中堂修七佛藥師法助修廿八人同廿四日結願勅使藏人中宮權大進經長登山勸賞追可被申請云々

門葉記七佛藥師法條云文永五年八月十七日於中堂爲異國降伏被修之阿闍梨座主尊助行事僧法眼泰慶按八月當作七月

吉續記云文永五年七月八日參座主宮自來十七日於延曆寺中堂可被行七佛藥師法可申沙汰之由被仰下之間此間事委爲尋申令參十六日參座主宮明日七佛藥師法間事結願日予登山間事內申入

日蓮化導記云或記云文永五戊辰後正月自蒙古國可襲日本之由牒狀渡之就此牒狀安國論符合之旨以書狀諫玉へ其御札云其後書絕不申不審無極抑去正嘉元年丁巳八月廿三日戊亥尅大地震即引諸經勸之念佛宗禪宗等有御飯依之故日本國守護諸天善神作噴恚所起災也若無此對治者爲他國可被破此國之由勘文一通撰之正元二年庚申七月十六日奉付御邊故叡明寺入道殿時題進覽之其後經九箇年今年大蒙古國牒狀有之由風聞等云々如經文自彼國責此國事必定也而日本國中日蓮一人當可爲調伏彼西戎之人兼知之將亦勘之爲君爲國爲佛爲神爲一切衆生可被經內奏歎委細旨者遂見參可申候恐惶謹言

八月廿一日

日 蓮在判

宿屋左衛門西信入道殿按蓮公畧傳文永八年九月文大概與此文相合雖年月不同恐是一事歎帝王編年記云文永六年三月七日蒙古國使八人高麗使四人從類七十餘人著對馬島之由午時自九國申六波羅云々

五代帝王物語云文永六年蒙古の使高麗の船にのりてまた對馬國につく去年の返牒なきによりて左右きかむため也不慮の喧嘩いてきて歸國の間對馬の二人とられて高麗へ渡る高麗より蒙古へ遣はしたれり王宮へ召入て見て種々の祿をとらせ本朝へ返送是に付て又牒狀有

關東評定傳云文永六年九月蒙古高麗重牒狀到來牒使金有成高柔二人也還對馬島人答二郎彌二郎高柔依靈夢獻所持毛冠於安樂寺即叙其由呈詩按北條九代記亦載此事和漢合符爲十二月者非也

吉續記云文永八年九月二日關東使隨身高麗牒狀向西園寺大納言實兼許亞相參院後嵯峨申入云々三日高麗牒狀事於仙洞有評定帥卿經任奉行關白基忠殿德大寺入道相國實基前

左府內府實雄師繼堀河大納言基具源中納言資平帥經任菅宰相長成左大辨宰相資宣等也左大辨讀申牒狀二通管宰相依辭退也件牒狀趣蒙古兵可來責日本歎又糴此外歎救兵歎就狀了見區分

五日參內藤翰林禮候被召御前被讀牒狀二通無停滯讀申之牒狀之旨趣明日於仙洞可有評定云々帥卿奉行也面々被書賦牒狀云々六日藤翰林入來牒狀間事有相談事貼字事此字釋以物爲質然者其儀不叶道理若書寫之誤歎貼字歎然者可叶道理歎此字釋窺視也如唐韻所見者貼字釋典也字釋區分如唐韻者不叶其儀歎互此字釋本ハシメト可讀之由申之或タカヒ此說協理云々此等條々可和議之由申之司天維弘入來夜前熒惑犯天江星重變也

元慶以來廿餘箇度先例被_レ行御祈安元被_レ發遣公卿勅使此趣内々可_レ披露之由前_レ之七日今日高麗牒狀事有_レ評議參任人々關白前左府堀河大納言民部卿(經光)源中納言帥菅宰相左大辨云々菅八座讀_レ申牒狀廿一日今日依_レ仁王會闕請定午刻參陣檢校上卿春宮權大奉公孝奉行職事等未_レ參此間暫候御前近日變異連々相前今日又犯_レ天江星之由司天維弘付_レ予内内令_レ奏此趣執_レ奏之殊被_レ驚聞食之由有_レ仰如御祈事一向無_レ沙汰可_レ歎可_レ歎申斜上卿被_レ參今日咒願作者管文士在依_レ故障不可_レ參陣於咒願文者内々可_レ付進云々奉行職事重相尋之處雖_レ申不_レ參之由早可_レ參陣仍被_レ待_レ彼參及_レ夜陰在公朝臣參任之後藏人左衛門權佐棟望出_レ陣下口宣上卿被_レ給之次上卿召_レ文章博士在公朝臣被_レ下口宣翰林給_レ之退入於_レ立部邊披_レ見之棟望予_レ徘徊此所如_レ口宣者有_レ西蕃使介告_レ北狄陰謀之由載_レ之所載咒願者高麗有_レ北蒙古在_レ西云々口宣趣與咒願西北之儀相違可_レ爲_レ何樣哉於_レ旨趣者雖_レ無_レ相違西北之義違_レ口宣之由與_レ奉行職事問答然而不及_レ書改_レ持參咒願文上卿披_レ見置_レ座前氣色之後翰林退入次召_レ外記寫_レ入_レ咒願文

文永八年九月廿一日 宣旨

近日上天_レ而變冲襟無聊加之有_レ西蕃之使介告_レ北狄之陰謀緯之希畏怖畏是衆永却_レ災難宜致_レ泰平之由可_レ令_レ作_レ載仁王會咒願文_レ藏人左衛門權佐平棟望奉_レ於蒙古國者不見_レ經史今北狄_レ令_レ書之條太以不_レ審誰人諷諫哉云々兼文宿禰參_レ内於_レ弓場藏人左佐異國御祈事於_レ本官可_レ祈請之由仰_レ之廿二日參_レ内候御前仁王會咒願文事有_レ被_レ仰

出事等蒙古爲_レ北狄事不_レ審之由申_レ出之如_レ作者所存者高麗書ニ蒙古ヲ北朝ト書之仍載_レ之云々自_レ高麗雖_レ當_レ北自_レ日本不_レ當_レ北者可_レ背_レ道理歟經史不_レ詳之上難_レ決者也咒願文尋見之處如_レ口宣改直畢廿三日呪願文章合之句可_レ改直之由被_レ仰_レ下云々北狄事先年高麗狀ニ蒙古ヲ北朝皇帝ト書之由奉行職事陳謝云々猶不可_レ然事也

島津文書

蒙古人可_レ襲來之由有其聞之間所_レ下遣御家人等於鎮西也早速差_レ下器用代官於薩摩國阿多北方相_レ伴守護人且令_レ致_レ異國之防禦且可_レ鎮_レ領内之惡黨者依_レ仰_レ執達如_レ件

文永八年九月十三日

相模守(時宗)在判 右京權大夫(政村)在判

阿多北方地頭殿

五代帝王物語云文永八年九月十九日筑前國今津に異國人趙良弼を始として百餘人來朝の間軍船と心得て宰相騷きけれ共其儀いなくて是も牒狀なり但辛櫃に納て金鍊を指て王宮へ持參して帝王へ献れをれ叶はずは時の將軍に傳へて參らすへし其議もなくの持て歸へき由王勅を承たれの手をはなつへからすとて案を書て出したる是も返牒に及す此國後の大元國と號す威徳のまざるに從て名を改とかやされの始終いかなるへきにかと恐しく覺侍帝王編年記云文永八年十月廿三日於_レ一院蒙古牒狀事有_レ評議可_レ有_レ返牒之由議定訖吉續記云十月廿三日蒙古船著_レ岸今津郡件所自_レ太宰府相隔一二里云々捧_レ牒狀云々依_レ此事東使入_レ洛向_レ西園寺大納言亭_レ亞相參_レ仙洞執奏仍俄今日可有_レ評定之由帥中納言奉行云々都督依_レ服藥事未_レ出仕明後日御幸八幡之間被_レ憚

日數未參仙洞被尋宮守之區服之七箇日已後無憚之由申之仍依召廿四日異國事去夜評議關白殿花山院
參院評定事奉行執權仁吉田中納言徒雖祇候不申沙汰非無面目歟 前右府(通雅)內府權大納言(長雅)吉田中納言帥中納言等參仕云々今度牒狀朝使直可持參帝
 都不然者不可放手之由申之蠻夷者參帝闕事無先例牒狀之趣可承之由少卿(經資)問答
 就之彼朝使書寫牒狀與少卿彼狀自關東進之其趣度々雖有牒狀無返牒此上以來十一
 月可爲期猶爲無音者可議兵船云々可有返牒云々先度長成卿草少々引直可遣云々今日
 花山院前右府內府前源中納言(有資)吉田中納言等參仕云々事之次第已以大忍及獲麟歟可歎
 可歎廿五日今日御幸八幡經賴奉行異國事爲御祈歟
 善隣國寶記云文永八年日本遣使如元報聘

東鏡末記云文永八年六月大元の曹介升と云者申ける此頃高麗人わさと道里遠く廻りて大
 元の使者を道引月日を重ねて逗留す宜き事にあらず船にのりて數多の軍兵を將行の案内を
 いたさんと云大元の王是を許容す九月高麗の王是を聞て急て通事を添て大元の勅使趙良弼
 を道引日本へ渡ししけれ日本よりも其返報に彌四郎といふ者を大元の國へ遣す大元の王悅
 て彌四郎をもてなし日本へかへす

天台座主記云前大僧正澄覺圓融房文永八年十一月廿二日於惣持院眞言堂爲異國降伏御祈
 被修熾盛光法助修二十日同廿八日結願勅使藏人左衛門權佐平棟望登山仰勸賞追可被申請
 吉續記云十一月廿二日參院異國事有評定仍不能奏事次參內熾盛光法爲異國御祈座主
證光僧正於惣持院自今日可被始行云々廿九日熾盛光法結願也藏人左佐棟望登山仰勸賞事云

々十二月十一日公卿勅使發遣依異國事

五代帝王物語云さて院の文永八年八夏第四度の御如法經行のせ給て所々の御奉納のうち二
 部の殘されて天王寺へ御幸ありてまづ七日御懺法御逆修ありて御奉納頓て太子の御廟へ御
 幸ありさて天王寺の金堂を移されて龜山殿の中に多寶院をたてられて救世觀音太子の御影
 などを安置せらる十一月六日御供養の日舞樂あるへかりしを異國又競といふ事聞えしかは
 俄に略せられ異國降伏の御祈に公卿の勅使發遣せらる洞院中納言公守卿勅使を勤らる

伊勢公卿勅使雜例云文永八年十二月十六日勅使正三位權中納言兼皇太后宮權大夫藤原公守
 關東評定傳云文永八年十月蒙古牒狀重到來使趙良弼前々依無返牒今度牒狀者良弼稱直
 可傳大將軍出案文不獻正文十二月良弼渡使者張鐸於本國翌年五月張鐸歸來高麗牒狀
 又持來北條九代記同之

東鏡末記云文永九年二月大元の人々奏聞しけるはさきに日本へ遣はさる、勅使申けるの去
 年九月日本の彌四郎となく筑前の宰府へ赴く其守護所の詞に高麗より日本へ申來趣は大元
 より日本を攻討んとす今能きけの大元の王の慈悲の心にて人をあわれみ勅使を渡し書簡を
 給りて念比也高麗人の申處みな偽り也今よく知り侍る然れども大元の都程遠けれ先人を
 遣し御返事を申さんと云是によりて勅使趙良弼の筑前の宰府に逗留して張鐸といふ者に日
 本人廿六人を相添大元國に指越し皇帝にまみえまめんといふ大元の王聞給て是誠かとせん
 議あり各是の大元の威勢を恐れて此人を至らまめて大元の強か弱かと伺ふ謀成へした、慈

悲を以てよく挨拶し參内せしむへからすと奏聞するに依て大元の王にまみゆる事あたはず
又此時高麗王より日本へ書簡兩度來りて大元へよしみを通せよとす、む日本より返事なし
野上文書

肥前筑前兩國要害警固事并豊後國中惡黨沙汰事今年二月廿五日守護所御書下如、此子細破
載狀候早且守狀且無左右不可弄件要害役所給候仍爲其沙汰景泰令下向候也恐々謹
言

文永九年卯月廿三日

藤原景泰 花押

野上太郎(資直)殿

皇代略記云文永十一年十月五日蒙古賊船著岸二萬艘按皇年代畧記保曆間記日本運上錄東寺長者補任等亦載之而不記船數

歷代皇紀云文永十一年十月異賊亂入壹岐對馬五日亡對馬五日亡壹岐云々

興福寺年代記云文永十一年十月六日蒙古國軍兵亂入壹岐對馬兩國合戰被疵死者不知其數

關東評定傳云文永十一年十月五日蒙古異賊寄來著對馬島討少貳入道覺惠代官藤馬允同廿四日寄來太宰府與官軍合戰異賊敗北又見北條九代記

日蓮註畫贊云文永十一年十月五日卯尅自對馬國府八幡宮假殿中大火焰出國府在家人等見燒亡幻是何事澆處同日申尅對馬西佐寸浦異國兵船四百五十艘三萬餘人乘寄來六日辰尅合戰守護代資國等雖伐取蒙古資國子息等悉伐死同十四日壹岐島押寄守護代平内左衛門景

隆等構城郭雖防戰蒙古亂入間景隆自殺二島百姓等男或殺或擒女集一所徹手結付舩虜者無一人不害肥前國松浦黨數百人伐虜此國百姓男女等如壹岐對馬

八幡愚童記云文永十一年十月五日卯時ニ對馬國府八幡宮ノ假殿ノ内ヨリ火焰オヒタシク燃出國府ノ在家人等燒亡出來カト見ル程ニ幻ナリコハ如何ト云程コソ有ケレ同日申時ニ對馬ノ西面佐須浦ニ異國ノ船四百五十艘ニ三萬人計乘テ寄來同日酉時國府地頭所ニ告即地頭宗馬允助國八十餘騎ニテ同丑時彼浦ニ行著翌日卯時通人眞繼男ヲ使者トシテ蒙古人ニ事ノ仔細ヲ相尋ル所ニ散々ニ船ヨリ射ル上船七八艘ヨリ下リ立勢一千人許ナリ其時宗馬允陣ヲトキテ戰フ其矢ニ異國人數ヲシラス射ラル此中ニ大將軍トオホシキ者四人アリケル中ニ葦毛ナル馬ニ乘テ一番ニカケ向フ者宗馬彌次郎ニ右ノ乳ノ上ヲ射ラレテ馬ヨリ落コレヲ始トシテ馬允ニ射倒サル、者四人宗馬允戰トイヘ辰終ニ打レヌ同子息宗馬次郎養子彌次郎同八郎親類刑部丞郎等ニ三郎庄太郎入道源八在廳左近馬允流人肥後國御家人江井藤三源三郎已上十二人同時ニ打死ス蒙古佐須浦ニ火ヲ附テ燒拂フ由宗馬允カ郎等小太郎兵衛次郎博多ニ渡テ注進ス同十四日申時ニ壹岐島ノ西面ニ蒙古人ノ船着其中ニ二艘ヨリ四百人許オリテ赤旗ヲサシテ東ヲ三度敵ヲ三度拜ス其時守護代平内左衛門尉經高并御家人百餘騎庄三郎カ城ノ前ニテ矢合ス蒙古人カ矢ハ二町許射ル間守護代ノ方ニ二(數十)人手負ヌ異敵ハ大勢ナリ叶フヘクモナカリケレハ城ノ内ヘ引退テ合戰スレトモ同十五日ニ終ニ攻落サレテ城ノ内ニテ自害シヌ同十八日平内左衛門カ下人宗三郎博多ヘ渡テ此由ヲ告ル程ニ蒙古ノ船トモ押